

# Backup Exec™ System Recovery 2010 ユーザーズガ イド

Windows Edition



# Symantec Backup Exec System Recovery 2010 ユーザーズガイド

本書で説明するソフトウェアは、使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができます。

Documentation version: 9.0

## 法的通知と登録商標

Copyright © 2009 Symantec Corporation. All rights reserved.

Symantec、Symantec ロゴ、LiveUpdate、pcAnywhere、Symantec AntiVirus、NetBackup、SmartSector、Backup Exec は、Symantec Corporation または同社の米国およびその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。本書のいかなる部分も、Symantec Corporation およびそのライセンサーからの事前の文書による許諾を得ることなく、いかなる方法によっても無断で複写、複製してはならないものとします。

本書は、現状のまま提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。SYMANTEC CORPORATION およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書の内容は、事前の通知なく、変更される可能性があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212 の規定によって商用コンピュータソフトウェアと見なされ、FAR 52.227-19 「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202 「Rights in Commercial Computer Software or Commercial Computer Software Documentation」、その他の後継規則の規定により制限権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示、開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

<http://www.symantec.com>

弊社製品に関して、当資料で明示的に禁止、あるいは否定されていない利用形態およびシステム構成などについて、これを包括的かつ暗黙的に保証するものではありません。また、弊社製品が稼動するシステムの整合性や処理性能に関しても、これを暗黙的に保証するものではありません。

これらの保証がない状況で、弊社製品の導入、稼動、展開した結果として直接的、あるいは間接的に発生した損害等についてこれが補償されることはありません。製品の導入、稼動、展開にあたっては、お客様の利用目的に合致することを事前に十分に検証および確認いただく前提で、計画および準備をお願いします。



<b>第 1 章</b>	<b>Symantec Backup Exec™ System Recovery 2010 の概要</b> .....	13
	Symantec Backup Exec System Recovery について .....	13
	Backup Exec System Recovery 2010 の新機能 .....	14
	[詳細]ページの非表示または表示 .....	15
	Backup Exec System Recovery の詳細情報の入手 .....	15
<b>第 2 章</b>	<b>Backup Exec System Recovery のインストール</b> .....	17
	インストールの前に .....	17
	システム要件 .....	17
	サポートされるファイルシステムとリムーバブルメディアについて .....	19
	無効な機能について .....	20
	ライセンス認証を延期する場合 .....	22
	Backup Exec System Recovery のインストール .....	23
	インストールの完了 .....	24
	Backup Exec System Recovery のアクティブ化を後で行う .....	26
	最初のバックアップの設定について .....	26
	Backup Exec System Recovery の更新 .....	26
	Backup Exec System Recovery のアンインストールについて .....	27
<b>第 3 章</b>	<b>コンピュータの修復の確認</b> .....	29
	コンピュータの修復の確認について .....	29
	Symantec Recovery Disk のテスト .....	30
	ドライバの検証が失敗した場合 .....	30
	カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成 .....	31
<b>第 4 章</b>	<b>始めましょう</b> .....	35
	主な製品コンポーネントについて .....	35
	Backup Exec System Recovery の使用方法 .....	36
	Symantec Backup Exec System Recovery の起動 .....	37
	フィードバックの送信 .....	38
	Backup Exec System Recovery のデフォルトオプションの設定 .....	38
	デフォルトのバックアップ先の選択 .....	40
	コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響の調整 .....	41

デフォルトのトレイアイコン設定の調整 .....	43
ファイルの種類管理 .....	43
外部ドライブでのニックネームの使用 .....	45
オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定 .....	46
<b>Backup Exec System Recovery</b> メッセージのログへの記録 .....	47
製品(イベント)メッセージの電子メール通知の有効化 .....	49

## 第 5 章

### データバックアップのベストプラクティス .....

データのバックアップについて .....	51
バックアップの種類を選択について .....	52
バックアップのベストプラクティス .....	52
バックアップについて .....	53
バックアップの前に .....	53
バックアップ中 .....	55
バックアップの終了後 .....	55
バックアップに関する追加のアドバイス .....	57
バックアップジョブの定義後 .....	57
バックアップジョブのプロパティの表示 .....	58
バックアップ先の選択について .....	58
デュアルブートコンピュータのバックアップについて .....	61

## 第 6 章

### ドライブ全体のバックアップ .....

ドライブベースのバックアップの定義について .....	63
ドライブベースのバックアップの定義 .....	64
[関連するドライブ]オプション .....	66
リカバリポイントの種類オプション .....	67
バックアップ先のオプション .....	68
リカバリポイントのオプション .....	68
詳細なスケジュールオプション .....	70
ドライブベースのバックアップから除外されるファイルについて .....	71
ネットワーク資格情報について .....	71
バックアップ中のコマンドファイルの実行について .....	72
ドライブベースのバックアップの詳細オプション .....	74
ドライブベースのバックアップの圧縮レベル .....	78
<b>Backup Exec System Recovery</b> からのワンタイムバックアップの実行 .....	79
<b>Symantec Recovery Disk</b> からのワンタイムバックアップの実行につい て .....	80
<b>Symantec Recovery Disk</b> からのワンタイムバックアップの実行 .....	81
オフサイトコピーについて .....	85
オフサイトコピーの仕組み .....	85
オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について .....	86
オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について .....	88

	オフサイトコピー先としての FTP サーバーの使用について .....	88
<b>第 7 章</b>	<b>ファイルとフォルダのバックアップ</b> .....	91
	ファイルおよびフォルダのバックアップの定義 .....	91
	ファイルおよびフォルダのバックアップからデフォルトで除外されるフォルダ について .....	93
<b>第 8 章</b>	<b>バックアップジョブの実行と管理</b> .....	95
	既存のバックアップジョブを今すぐ実行 .....	95
	オプションを指定してバックアップを実行 .....	96
	バックアップオプション .....	97
	バックアップ速度の調整 .....	98
	タスクの停止 .....	98
	バックアップの正常終了の検証 .....	99
	バックアップ設定の編集 .....	99
	イベント起動バックアップの有効化 .....	100
	Symantec ThreatCon について .....	100
	バックアップスケジュールの編集 .....	101
	バックアップジョブの無効化 .....	101
	バックアップジョブの削除 .....	102
	コンピュータをバックアップできるユーザーの追加 .....	102
<b>第 9 章</b>	<b>お使いのコンピュータからリモートコンピュータをバックアップ</b> .....	105
	お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ .....	105
	コンピュータリストへのコンピュータの追加 .....	106
	Backup Exec System Recovery エージェントの配備 .....	107
	Windows Server 2003 SP1 でのドメインユーザーに対する権限の付 与 .....	109
	Backup Exec System Recovery Agent の使用 .....	110
	Windows のサービスツールを使った Backup Exec System Recovery Agent の管理について .....	111
	サービスを使用するためのベストプラクティスについて .....	112
	Windows のサービスツールを開く .....	113
	Backup Exec System Recovery Agent サービスの開始または停 止 .....	113
	Backup Exec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作 の設定 .....	115
	Backup Exec System Recovery Agent の依存関係の表示 .....	115
	Backup Exec System Recovery へのアクセスの制御 .....	116

	異なるユーザー権限での Backup Exec System Recovery の実行 .....	118
<b>第 10 章</b>	<b>バックアップの状態の監視 .....</b>	<b>121</b>
	バックアップの監視について .....	121
	コンピュータのハードディスクの再スキャン .....	122
	[ホーム]ページからのバックアップ保護の監視 .....	122
	[状態]ページからのバックアップ保護の監視 .....	124
	SNMPトラップについて .....	128
	Symantec Backup Exec System Recovery 管理情報ベースについて .....	128
	ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートのカスタマイズ .....	128
	ドライブの詳細の表示 .....	129
	ドライブの保護レベルの向上 .....	130
	問題のトラブルシューティングでのイベントログ情報の使用について .....	132
<b>第 11 章</b>	<b>リカバリポイントの内容の検索 .....</b>	<b>133</b>
	リカバリポイントの検索について .....	133
	Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索 .....	134
	Windows エクスプローラからのリカバリポイントのマウント .....	135
	リカバリポイント内のファイルの表示および復元 .....	135
	検索エンジンの使用について .....	136
	リカバリポイントドライブのマウント解除 .....	137
	リカバリポイントドライブのプロパティの表示 .....	137
<b>第 12 章</b>	<b>バックアップ先の管理 .....</b>	<b>139</b>
	バックアップ先について .....	139
	バックアップデータの仕組みについて .....	139
	ドライブベースのバックアップについて .....	140
	ファイルおよびフォルダのバックアップについて .....	140
	リカバリポイントの保存場所の管理 .....	141
	古いリカバリポイントのクリーンアップ .....	141
	リカバリポイントセットの削除 .....	142
	セット内のリカバリポイントの削除 .....	142
	リカバリポイントのコピー .....	143
	ワンタイム仮想変換の実行 .....	145
	仮想変換ジョブの定義 .....	151
	既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合 .....	156
	仮想変換ジョブのプロパティの表示 .....	156
	仮想変換ジョブの進行状況の表示 .....	156



	仮想変換ジョブの編集 .....	156
	仮想変換ジョブの削除 .....	157
	ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について .....	157
	保存されているファイルおよびフォルダのバックアップデータの表 示 .....	158
	保存するファイルのバージョン数を制限する .....	158
	ファイルおよびフォルダのバックアップからの手動によるファイルの削 除 .....	158
	ファイルまたはフォルダのバージョンの確認 .....	159
	バックアップデータの管理の自動化 .....	159
	バックアップ先の移動 .....	160
<b>第 13 章</b>	<b>ファイル、フォルダ、またはドライブ全体の修復</b> .....	<b>163</b>
	消失したデータの修復について .....	163
	ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用したファイルとフォルダ の修復 .....	163
	リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復 .....	165
	リカバリポイントに保存されたファイルやフォルダを開く .....	167
	必要なファイルまたはフォルダの検索について .....	167
	セカンダリドライブの修復 .....	168
	修復オプション .....	169
	LightsOut Restore を使用した復元 .....	170
	LightsOut Restore 処理の概略 .....	171
	LightsOut Restore ウィザードの起動 .....	172
<b>第 14 章</b>	<b>コンピュータの修復</b> .....	<b>177</b>
	コンピュータの修復について .....	177
	Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動 .....	178
	CD からコンピュータをブートする設定 .....	179
	コンピュータを修復する準備 .....	180
	ハードディスクでのエラーの確認 .....	181
	コンピュータの修復 .....	181
	ターゲットドライブとオプションを編集 .....	184
	仮想ディスクファイルからのコンピュータの修復 .....	186
	仮想ディスクの修復オプション .....	188
	Restore Anyware を使用した復元 .....	190
	Restore Anyware の使用 .....	190
	Restore Anyware によるコンピュータの修復 .....	193
	Symantec Recovery Disk によるファイルとフォルダの修復 .....	196
	Symantec Recovery Disk によるコンピュータのファイルとフォルダの 検索 .....	197
	Symantec Recovery Disk でのネットワークツールの使用について .....	198

	ネットワークサービスの起動 .....	198
	リモート修復での <b>pcAnywhere Thin Host</b> の使用 .....	198
	<b>Symantec Recovery Disk</b> 内からのネットワークドライブのマッピング グ .....	200
	ネットワーク接続の設定 .....	201
	リカバリポイントとドライブのプロパティの表示について .....	202
	リカバリポイントのプロパティの表示 .....	202
	リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示 .....	203
	サポートユーティリティについて .....	204
<b>第 15 章</b>	<b>ドライブのコピー</b> .....	205
	ドライブのコピーについて .....	205
	ドライブをコピーする準備 .....	205
	ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー .....	207
	ドライブ間のコピーオプションについて .....	207
<b>第 16 章</b>	<b>Backup Exec System Recovery Granular Restore Option の使用</b> .....	209
	Backup Exec System Recovery Granular Restore Option につい て .....	209
	<b>Granular Restore Option</b> で使用するリカバリポイントを作成する場合の ベストプラクティス .....	210
	バックアップするドライブを指定する方法 .....	210
	<b>Granular Restore Option</b> の起動 .....	211
	<b>Granular Restore Option</b> で実行できる処理 .....	212
	特定のリカバリポイントの内容の確認 .....	213
	<b>Exchange</b> メールの復元について .....	213
	メールボックスの復元 .....	214
	電子メールフォルダの復元 .....	214
	電子メールメッセージの復元 .....	215
	<b>SharePoint</b> ドキュメントの復元 .....	216
	ファイルとフォルダの復元 .....	216
<b>付録 A</b>	<b>検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索</b> .....	219
	検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索について .....	219
	検索エンジンのサポートの有効化 .....	219
	<b>Google</b> デスクトップのデスクトップ検索機能を使用したファイルの修復 .....	221
	<b>Google</b> デスクトップを使用したファイルの検索について .....	222

付録 B	VSS 対応データベースのバックアップについて .....	223
	VSS 対応データベースのバックアップについて .....	223
	Exchange データベースで Backup Exec System Recovery を使う場 合に推奨される方法 .....	224
	VSS 非対応データベースのバックアップについて .....	224
	VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントの手動作成 .....	224
	VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントの自動作成 .....	225
	VSS 非対応データベースのホットリカバリポイントの作成 .....	226
付録 C	Active Directory について .....	227
	Active Directory の役割について .....	227
付録 D	Microsoft の仮想環境のバックアップについて .....	229
	Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて .....	229
	Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元について .....	230
付録 E	Backup Exec System Recovery 2010 と Windows Server 2008 Core について .....	233
	Backup Exec System Recovery 2010 および Windows Server 2008 Core について .....	233
	コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Backup Exec System Recovery 2010 のインストール .....	234
索引	.....	237



# Symantec Backup Exec™ System Recovery 2010 の概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [Symantec Backup Exec System Recovery について](#)
- [Backup Exec System Recovery 2010 の新機能](#)
- [\[詳細\]ページの非表示または表示](#)
- [Backup Exec System Recovery の詳細情報の入手](#)

## Symantec Backup Exec System Recovery について

Symantec Backup Exec System Recovery 2010 は、Windows® システム修復におけるグローバルスタンダードです。この製品を使用すると、企業や IT 部門は、時間をかけず数分でシステム損失または災害から修復することができます。Backup Exec System Recovery 2010 の高速で使いやすいシステム復元機能は、IT 管理者が修復時間目標を達成するのに役立ちます。異なるハードウェアへの完全ベアメタルリカバリも実行でき、サーバー、デスクトップ、またはラップトップコンピュータの仮想環境にも対応しています。無人のリモートサイトのシステムを修復することもできます。

Backup Exec System Recovery 2010 は使用されている Windows システム全体のリカバリポイントを取得します。OS、アプリケーション、システム設定、構成、ファイルなどが含まれ、生産性を低下させることもありません。このリカバリポイントは、SAN、NAS、Direct Attached Storage、RAID、Blu-ray/DVD/CD などのさまざまなメディアやディスクストレージデバイスに簡単に保存できます。システムに障害が発生した場合は、時間がかかりエラーの発生しやすい手動プロセスを実行せずに迅速にシステムを復元できます。

Backup Exec System Recovery 2010 の別のライセンスコピー、または Backup Exec System Recovery 2010 Management Solution (別売り)を使用して、Backup Exec System Recovery 2010 をリモート管理することもできます。Backup Exec System Recovery 2010 Management Solution は、組織全体のシステム修復ジョブを IT 管理者が簡単に表示できる集中管理アプリケーションです。ローカルおよびリモートシステムの修復処理、ジョブ、ポリシーを集中的に配備、変更および維持することができます。また、状態をリアルタイムに監視して、特定された問題を迅速に解決できます。

Backup Exec System Recovery 2010 は、Google™ デスクトップおよび Backup Exec Retrieve 2010 との統合により、IT の介入なしでエンドユーザーファイルを修復します。

統合された Granular Restore Option を使用して、個々の Microsoft® Exchange 電子メール、フォルダおよびメールボックスを短時間で復元できます。

また、Backup Exec System Recovery 2010 の低価格な簡易版として、Backup Exec for Windows Servers System Recovery Option もあります。このソフトウェアは、Backup Exec for Windows Servers ユーザー向けのビルドです。Windows コンピュータのバックアップおよび修復に必要なコンポーネントが含まれています。Backup Exec System Recovery と同じ修復機能が提供されますが、正規版の Backup Exec System Recovery で利用できるその他の一部の機能は提供されません。

## Backup Exec System Recovery 2010 の新機能

Backup Exec System Recovery には多くの強化機能と新機能が用意されています。最新機能と強化機能については次の表を参照してください。

---

**メモ:** 製品のバージョンによっては、利用できない機能もあります。

---

表 1-1 Backup Exec System Recovery 2010 の新機能

機能	説明
仮想形式のサポートの改良	Backup Exec System Recovery では、次の仮想プラットフォームがサポートされるようになりました。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ VMware ESX 3.5i と 4.0i</li><li>■ VMware ESX 3.5 と 4.0</li></ul>
プラットフォームサポートの改良	Backup Exec System Recovery では、次のプラットフォームがサポートされるようになりました。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ Windows 7</li><li>■ Windows Server 2008 R2</li><li>■ Exchange Server 2010</li></ul>

機能	説明
Backup Exec System Recovery 2010 への Granular Restore Option の実装	Backup Exec System Recovery の以前のバージョンでは、別のプロダクトとして Granular Restore Option を購入するように要求されました。Backup Exec System Recovery に Granular Restore Option が含まれるようになりました。追加の購入は必要ありません。  p.209 の「 <a href="#">Backup Exec System Recovery Granular Restore Option について</a> 」を参照してください。

## [詳細]ページの非表示または表示

専門知識がある Backup Exec System Recovery ユーザーは、[詳細]ページを使用して、最も一般的な製品の機能を 1 カ所で確認できます。Backup Exec System Recovery の専門知識があれば、[詳細]ビューからほとんどのタスクを実行できます。

---

**メモ:** [詳細]ページの使用中にマニュアルを参照する場合、最初のいくつかの手順は必要ありません。最初のいくつかの手順は、製品インターフェースの他のページから各機能にアクセスする方法を示しているにすぎないからです。それ以降の手順に従ってください。

---

[詳細]ページを使用しない場合は、非表示にできます。

[詳細]ページを非表示にするまたは表示する方法

- 1 Backup Exec System Recovery を起動します。
- 2 [詳細]ページを非表示にするまたは表示するには、表示メニューで [詳細ページを表示] をクリックします。

## Backup Exec System Recovery の詳細情報の入手

Symantec Backup Exec System Recovery の詳しい情報を参照するには、[ヘルプとサポート] ページにアクセスしてください。インストールした製品バージョンおよび言語によっては、[ヘルプとサポート] ページにより詳しい情報へのワンクリックのアクセスが含まれます。また、このページから製品のヘルプシステム、製品のユーザーズガイドを参照することもできます。さらに、トラブルシューティング情報を見つけることができるシマンテック社のナレッジベースにアクセスすることもできます。

[ヘルプとサポート]へのアクセス方法

- 1 Backup Exec System Recovery を起動します。
- 2 [ホーム]ページで、[ヘルプ]、[ヘルプとサポート]の順にクリックします。



# Backup Exec System Recovery のインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- [インストールの前に](#)
- [Backup Exec System Recovery のインストール](#)
- [Backup Exec System Recovery の更新](#)
- [Backup Exec System Recovery のアンインストールについて](#)

## インストールの前に

作業環境および選択するインストールオプションによってインストール手順が変わる場合があります。この章では、インストール CD からの製品版の Backup Exec System Recovery のインストールに重点を置いて説明します。

Backup Exec System Recovery をインストールする前に、お使いのコンピュータがシステム要件を満たしていることを確認してください。既知の問題については、インストール CD の Readme ファイルを確認してください。

Backup Exec System Recovery Granular Restore Option は、Backup Exec System Recovery 2010 に含まれ、統合されており、そしてデフォルトでインストールされます。Granular Restore Option システムの必要条件のほとんどは Backup Exec System Recovery と同じです。

## システム要件

次の表に、Backup Exec System Recovery が正しく機能するためのシステム要件を示します。

表 2-1 最小システム要件

コンポーネント	最小要件
オペレーティングシステム	<p>次の 32 ビットまたは 64 ビットの Windows オペレーティングシステムがサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows 7</li> <li>■ Windows Vista Ultimate</li> <li>■ Windows Vista Business</li> <li>■ Windows Vista Enterprise</li> <li>■ Windows XP Professional/Home (SP2 以降)</li> <li>■ Windows XP Media Center (SP2 以降)</li> <li>■ Windows Server 2003</li> <li>■ Windows Small Business Server 2003</li> <li>■ Windows Server 2008 (SP1 を含む)</li> <li>■ Windows Server 2008 R2</li> <li>■ Windows Essential Business Server 2008</li> <li>■ Windows Small Business Server 2008</li> </ul>
RAM	<p>次は Backup Exec System Recovery の各コンポーネントのためのメモリの要件です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Backup Exec System Recovery Agent: 512 MB</li> <li>■ Backup Exec System Recovery ユーザーインターフェースおよび Recovery Point Browser: 512 MB</li> <li>■ Symantec Recovery Disk: 1 GB (専用)</li> <li>■ LightsOut Restore: 1 GB</li> </ul>
ハードディスクの空き領域	<p>次は Backup Exec System Recovery と他の領域のためのハードディスク容量の要件です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 製品全体をインストールする場合: すべてのインストールには最大 430 MB が必要 (選択した製品の言語によって異なる)</li> <li>■ Microsoft .NET Framework 2.0: 280 MB (32 ビットコンピュータの場合)、610 MB (64 ビットコンピュータの場合)</li> <li>■ リカバリポイント: リカバリポイントの保存に十分なローカルハードディスクまたはネットワークサーバー上の空き領域。 リカバリポイントのサイズは、バックアップしたデータ量と保存されるリカバリポイントの種類によって異なります。 p.52 の「バックアップのベストプラクティス」を参照してください。</li> <li>■ LightsOut Restore: 2 GB</li> </ul>

コンポーネント	最小要件
CD-ROMドライブまたはDVD-ROMドライブ	<p>ドライブの速度は任意ですが、BIOSからの起動ドライブとして使用できる必要があります。</p> <p>Backup Exec System Recovery は Gear Software の技術を使います。CDライターかDVDライターに互換性があることを検証するには、Gear Software の Web サイトを参照します。</p> <p><a href="http://www.gearsoftware.com/support/recorders/index.cfm">http://www.gearsoftware.com/support/recorders/index.cfm</a></p> <p>お使いのライターの製造元の名前と型番がわかる場合、そのライターに関する情報を確認できます。</p>
ソフトウェア	<p>Microsoft .NET Framework 2.0 以降は、Backup Exec System Recovery を実行するために必要です。</p> <p>.NET Framework がすでにインストールされていなければ、Backup Exec System Recovery がインストールされ、コンピュータが再起動された後、.NET Framework のインストールを求めるプロンプトが表示されます。</p> <p>Granular Restore Option を使用して電子メールを復元できるようにしたい場合 Microsoft Outlook 2003 または 2007 がインストールされていなければなりません。</p>
仮想プラットフォーム(変換済みのリカバリポイント用)	<p>次の仮想プラットフォームがサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ VMware Workstation 4、5、および 6</li><li>■ VMware ESX 3.0、3.5 と 4.0</li><li>■ VMware ESXi 3.5 と 4.0</li><li>■ VMware Server 1</li><li>■ VMware GSX Server 3.x (VMware Server に置き換え)</li><li>■ Microsoft Virtual Server 2005 の R2 以降</li><li>■ Microsoft Hyper-V 1.0 と 2.0</li></ul>

**メモ:** Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server と Windows Small Business Server 2000 は Backup Exec System Recovery 2010 でサポートされません。Windows 2000 のこれらのバージョンでは Backup Exec System Recovery 8.5 を継続して使うことができます。また Backup Exec System Recovery 2010 か Backup Exec System Recovery ソリューションを使用して Windows 2000 コンピュータでバックアップと復元機能をリモートで実行できます。

## サポートされるファイルシステムとリムーバブルメディアについて

Backup Exec System Recovery は次のファイルシステムとリムーバブルメディアをサポートしています。

サポートされるファイルシステム Backup Exec System Recovery は次のファイルシステムをサポートします。

- FAT16、FAT16X
- FAT32、FAT32X
- NTFS
- GUID Partition Table (GPT)
- ダイナミックディスク
- Linux Ext2、Linux Ext3
- Linux スワップパーティション

**メモ:** NTFSドライブは、復元する前に暗号化を解読する必要があります。暗号化された NTFSドライブのリカバリポイントに含まれるファイルは表示されません。

リムーバブルメディア

リカバリポイントはローカル(つまり、Backup Exec System Recovery がインストールされるのと同じコンピュータ)に保存できます。または、ほとんどの Blu-ray、DVD-R(W)、DVD+RW、CD-R、CD-RW レコーダーにリカバリポイントを保存できます。サポートされているドライブについては、Gear Software の Web サイトを参照してください。

<http://www.gearsoftware.com>

Backup Exec System Recovery は、ほとんどの USB デバイス、IEEE 1394 (FireWire) デバイス、REVドライブ、JAZドライブ、Zipドライブ、光磁気デバイスへのリカバリポイントの保存もサポートしています。

## 無効な機能について

Backup Exec System Recovery は、さまざまな市場でのニーズを満たすようにパッケージされています。購入した製品によっては、一部の機能が利用できない場合があります。ただし、マニュアルにはすべての機能が記載されています。購入した製品のバージョンに含まれている機能を確認してください。製品のユーザーインターフェースからアクセスできない機能は、製品のそのバージョンに含まれていない可能性があります。

お使いのバージョンの Backup Exec System Recovery に含まれている機能の詳細は、シマンテック社の Web サイトを参照してください。

## Backup Exec System Recovery Basic Edition について

Backup Exec System Recovery Basic Edition を使用する場合は、Backup Exec System Recovery の正規版にアップグレードしないと次の機能を利用できません。

表 2-2 無効な機能

無効な機能	動作の概要
集中管理	Backup Exec System Recovery 2010 Management Solution で、ネットワーク内にインストールされている Backup Exec System Recovery をリモートで監視および管理できます。リモートでデータのバックアップや修復を行う機能も含まれています。
リカバリポイントセット	ドライブの初回の完全バックアップを取得します。その後のバックアップでは、完全バックアップ実行以降のドライブ上のデータに対する変更のみが取得されます。この機能を使用しない場合は、ドライブの単体リカバリポイント(完全バックアップ)のみを作成できます。
ハードディスクドライブをコピーするウィザード	ハードディスクドライブのすべての内容を 2 台目のハードディスクドライブにコピーします。
Blu-ray/DVD/CD のサポート	コンピュータを Blu-ray、DVD、または CD メディアに直接バックアップします。または、リカバリポイントを Blu-ray、DVD、または CD メディアへコピーします。
LightsOut Restore	ファイルシステムが正常に動作している場合は、コンピュータの現在の状態に関係なく、離れた場所からコンピュータを復元できます。
リカバリポイントのインデックス付け	検索エンジンで、各リカバリポイントに含まれているすべてのファイル名にインデックス付けできます。ファイル名にインデックス付けすると、検索エンジンを使用して復元するファイルを検索できます。
Google デスクトップ™ のサポート	Google デスクトップを使用して、リカバリポイントに保存されているファイルを検索し修復します。
Backup Exec Retrieve のサポート	Backup Exec Retrieve を使用して、リカバリポイントに保存されているファイルを検索し修復します。
ファイルおよびフォルダのバックアップ	選択したファイルまたはフォルダをバックアップ対象とするように、バックアップを制限できます。
オフサイトコピー	リカバリポイントをコピーし、1 つまたは 2 つの場所に保存します。

これらの機能を有効にするには、Backup Exec System Recovery の正規版のアップグレードライセンスを購入する必要があります。

Symantec Backup Exec System Recovery 2010 Basic Edition は、地域によって利用できない場合があります。詳しい情報が必要な場合、またはアップグレードライセンスを購入する場合は、最寄のリセラーにお問い合わせください。

<http://www.symantec.com/backupexec/>

## ライセンス認証を延期する場合

ライセンスキーのインストールを先延ばしする場合でも、60日の評価期間中、Backup Exec System Recovery のすべての機能を使用できます。

Backup Exec System Recovery のコンポーネントである Symantec Recovery Disk は、評価版の有効期限が切れたり評価版がなくても利用可能です。ただし、Symantec Recovery Disk の次の機能を使用するには、有効なライセンスキーが必要です。

- コンピュータのバックアップウィザード  
p.80 の「[Symantec Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について](#)」を参照してください。
- [Restore Anyware を使用して別のハードウェアに修復]を使用して、仮想ディスク (.vmdk または .vhd) を物理コンピュータに復元する、コンピュータの修復ウィザード  
p.190 の「[Restore Anyware を使用した復元](#)」を参照してください。

Backup Exec System Recovery の60日の評価期間は、ソフトウェアで次の操作のいずれかを行った時点から開始します。

- ドライブベースまたはファイルとフォルダのバックアップの定義
- コンピュータの修復
- ドライブのコピー
- 増分リカバリポイントの統合
- ドライブベースまたはファイルとフォルダのバックアップの実行
- スケジュールされた仮想ディスク変換ジョブの定義
- スケジュールされた仮想ディスク変換ジョブの実行
- 仮想ディスクへのワンタイム変換ジョブの定義

製品の評価版を使用している場合も、60日後に有効期間が終了します。ただし、評価期間が終了するまですべての機能を使用できます。評価期間の終了後は、製品を購入するか、または評価版をアンインストールする必要があります。ライセンスは、いつでも(評価期間の終了後でも)ソフトウェアを再インストールせずに購入できます。

---

**メモ:** コンピュータ製造元でプリインストール済みの製品の場合、評価版の有効期限は90日間です。インストール時の製品のライセンスまたはアクティブ化のページに評価版の有効期限が示されます。

---

p.26 の「[Backup Exec System Recovery のアクティブ化を後で行う](#)」を参照してください。

# Backup Exec System Recovery のインストール

開始する前に、Backup Exec System Recovery のインストールの要件とシナリオを確認してください。

p.17 の「[システム要件](#)」を参照してください。

---

**メモ:** インストール中に、コンピュータを再起動する必要がある場合があります。コンピュータの再起動の後で適切な機能性を確認します。Backup Exec System Recovery をインストールしたときにログオンするために使った同じユーザーの資格情報を使用して再びログオンすることによって、これを確認できます。

---

**警告:** Symantec Recovery Disk CD には、コンピュータの修復に必要なツールが含まれています。Symantec Recovery Disk をどのように取得したかは購入した製品のバージョンによって異なります。たとえば、Symantec Recovery Disk は製品とは別の CD または製品 CD のいずれかに含まれています。CD は安全な場所に保管してください。

---

## Backup Exec System Recovery をインストールする方法

- 1 管理者アカウントまたは管理者権限があるアカウントのいずれかを使用してコンピュータにログオンします。
- 2 Symantec Backup Exec System Recovery 製品 CD をコンピュータのメディアドライブに挿入します。  
インストールプログラムが自動的に起動します。
- 3 インストールプログラムが起動しない場合は、コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。  

```
<drive>:¥autorun.exe
```

  
ここで、<drive> はメディアドライブのドライブ文字です。
- 4 インストールプログラムの起動画面で [Backup Exec System Recovery のインストール] をクリックします。
- 5 [使用許諾契約] パネルで、ライセンス契約に目を通し、同意する場合は [使用許諾契約の条項に同意します] をクリックします。
- 6 次のいずれかを実行します。
  - [使用許諾契約] パネルで、インストールを始めるために [今すぐインストール] をクリックします。
  - [使用許諾契約] パネルで、[カスタムインストール] をクリックし、オプションを選択または選択解除してインストール対象を決定し、[今すぐインストール] をクリックします。

インストールオプションには次のオプションが含まれます。

Backup and Recovery Service	コンピュータのバックアップまたは修復に必要な基本サービスです。
Recovery Point Browser	リカバリポイントを使用して、ファイルやフォルダの参照、マウント、コピー、検証、復元を行うことができます。
ユーザーインターフェース	<b>Backup Exec System Recovery</b> サービスとの対話に必要な製品のユーザーインターフェースをインストールします。  <b>Agent の配備 - Backup Exec System Recovery</b> をインストールしたコンピュータで、リモート修復管理のために他のコンピュータに <b>Backup Exec System Recovery Agent</b> を配備できます。  <b>Granular Restore Option</b> リカバリポイントを開き、 <b>Microsoft Exchange</b> のメールボックス、フォルダと個々のメッセージを復元できます。また <b>Microsoft SharePoint</b> ドキュメント、構造化されていないファイルとフォルダも復元できます。
CD/DVD のサポート	CD/DVD への直接バックアップおよびカスタム <b>Symantec Recovery Disk CD</b> の作成に必要です。この機能を使用するには、書き込み型 CD/DVD ドライブが必要です。
LiveUpdate	製品の最新の更新プログラムを適用し、シマンテックソフトウェアを最新の状態に保ちます。

- 7 インストールが完了したら、[完了]をクリックします。
- 8 製品 CD をメディアドライブから取り出してから、[はい]をクリックしてインストールウィザードを終了し、コンピュータを再起動します。  
  
[いいえ] をクリックすると、コンピュータを再起動するまで **Backup Exec System Recovery** を実行できません。

## インストールの完了

製品のインストール後、製品のライセンスの取得またはアクティブ化を求めるメッセージが表示されます。**LiveUpdate** を実行して製品の更新をチェックしてから、最初のバックアップを設定できます。

---

**メモ:** コンピュータ製造元でプリインストール済みの製品の場合、評価版の有効期限は 90 日間です。[後でライセンスをインストールする]ラベルを参照してください。

---



## インストールを完了する方法

- 1 [ようこそ]の画面で、[次へ]をクリックします。

コンピュータ製造元によって製品がインストールされている場合、Backup Exec System Recovery の初回実行時に、[ようこそ]のページが表示される場合があります。

- 2 次のいずれかを実行します。

- [製品をすでに購入済みで、ライセンスキーを持っている]をクリックします。

---

**メモ:**ライセンスキーは、製品 CD ジャケットの裏面に記載されています。ライセンスキーは大切に保管してください。Backup Exec System Recovery をインストールするときに使用する必要があります。

---

- ライセンスのアクティブ化を延期するには、[後でアクティブ化する]をクリックします。評価版の有効期限が終了すると、製品は動作しなくなります。  
p.22 の「[ライセンス認証を延期する場合](#)」を参照してください。

- Backup Exec System Recovery の評価版からライセンスキーを購入する場合は、[Symantec Global Store]をクリックします。

- ライセンスのアクティブ化を 60 日間延期するには、[後でライセンスをインストールする]をクリックします。60 日経過すると、製品は動作しなくなります。  
p.22 の「[ライセンス認証を延期する場合](#)」を参照してください。

- Volume Incentive Program (VIP) Activation キーを持っている場合は、対応するスペースに、証明書に記載されているキーを入力します。

- 3 [次へ]をクリックします。

- 4 次の操作を実行します。

- [LiveUpdate の実行]をクリックして、製品の出荷以降の更新をチェックします。

- インストール処理が完了したら、[簡単セットアップを起動]をクリックして、[簡単セットアップ]ウィンドウを表示します。(このオプションはデスクトップ版の Backup Exec System Recovery では利用できません。)

- Google デスクトップを使用して修復するファイルおよびフォルダのリカバリポイントを検索する場合、[Google デスクトップによるファイルとフォルダの修復を有効にする]をクリックします。

このオプションを選択した場合、Backup Exec System Recovery はリカバリポイントの作成時に各ファイルを自動的にカタログ化します。Google デスクトップでは、このカタログを使用して名前でファイルを検索できます。ファイルの内容にはインデックス付けされません。

---

**メモ:**このオプションは、Google デスクトップがすでにコンピュータにインストールされている場合にのみ利用できます。Google デスクトップを後でインストールする場合、インストール後に検索エンジンのサポートを有効にできます。

---

- 5 [終了]をクリックします。

## Backup Exec System Recovery のアクティブ化を後で行う

評価版の有効期限が終了する前に Backup Exec System Recovery のアクティブ化を行わなかった場合は、ソフトウェアが動作しなくなります。ただし、評価版の有効期限の終了後は、いつでも製品をアクティブ化することができます。

### Backup Exec System Recovery を後でアクティブ化する方法

- 1 ヘルプメニューの[ライセンスキーの入力]をクリックします。
- 2 画面の指示に従います。

## 最初のバックアップの設定について

セットアップウィザードで[簡単セットアップを起動]チェックボックスを選択解除していない限り、[簡単セットアップ]ウィンドウが表示されます。セットアップウィザードで簡単セットアップを実行していない場合、このウィンドウは、[バックアップの実行または管理]ウィンドウを初めて開いたときに表示されます。

---

**メモ:** サーバー版の Backup Exec System Recovery では[簡単セットアップ]ウィンドウは利用できません。

---

[簡単セットアップ]ウィンドウが表示されたら、ドライブとファイルおよびフォルダのバックアップのデフォルト設定に従います。または、設定のどれかをクリックして編集を行います。

新しいバックアップをすぐに実行する場合は、[今すぐバックアップを実行]を選択し、[OK]をクリックします。

## Backup Exec System Recovery の更新

インターネット接続を使用すれば、お使いの製品のバージョンに必要なソフトウェアの更新プログラムを受け取ることができます。LiveUpdate は Symantec LiveUpdate サーバーに接続し、お使いの各シマンテック製品の更新プログラムを自動的にダウンロードしてインストールします。

LiveUpdate は、製品をインストールした直後に実行します。定期的に LiveUpdate を実行して、更新プログラムを入手してください。

### Backup Exec System Recovery を更新する方法

- 1 ヘルプメニューの [LiveUpdate を実行] をクリックします。
- 2 [LiveUpdate] ウィンドウで、[開始] をクリックして更新プログラムを選択します。  
画面の指示に従います。
- 3 インストールが完了したら、[閉じる] をクリックします。  
一部のプログラムの更新では、変更を反映するために、コンピュータの再起動が必要な場合があります。

## Backup Exec System Recovery のアンインストールについて

Backup Exec System Recovery を以前のバージョンの製品からアップグレードする場合は、インストールプログラムによって自動的に以前のバージョンがアンインストールされます。必要に応じて、手動でアンインストールすることもできます。

ソフトウェアのアンインストール方法については各オペレーティングシステムの手順に従ってください。



# コンピュータの修復の確認

この章では以下の項目について説明しています。

- [コンピュータの修復の確認について](#)
- [Symantec Recovery Disk のテスト](#)
- [ドライバの検証が失敗した場合](#)
- [カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成](#)

## コンピュータの修復の確認について

Windows が正常に起動または実行しない場合、Symantec Recovery Disk CD を使用して、コンピュータを修復できます。コンピュータのネットワークカードとハードディスクの実行に必要なドライバが、リカバリディスクに含まれている必要があります。

コンピュータを修復するのに必要なドライバがあることを確認するために、Symantec Recovery Disk で利用可能な [ドライバの検証の実行] ツールを使うことができます。ドライバ検証ツールでは、Symantec Recovery Disk CD 上のハードウェアドライバと、コンピュータのネットワークカードとハードディスクの実行に必要なドライバが比較されます。

コンピュータのネットワークインターフェースカードまたはストレージコントローラに対して変更を加えた場合は、必ずドライバ検証テストを実行してください。

p.30 の「[ドライバの検証が失敗した場合](#)」を参照してください。

---

**メモ:** ドライバ検証ツールまたは Symantec Recovery Disk は無線ネットワークアダプタ用のドライバをサポートしていません。

---

## Symantec Recovery Disk のテスト

Symantec Recovery Disk CD をテストして、修復環境がコンピュータ上で正常に実行されることを確認しておく必要があります。

---

**メモ:** Symantec Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品 CD に含まれるか、または別の CD として提供されます。Symantec Recovery Disk が含まれている CD は安全な場所に保管してください。

---

Symantec Recovery Disk CD をテストすると、次のような問題を識別して解決できます。

- Symantec Recovery Disk を起動できない  
p.180 の「[CD からブートするようにコンピュータを設定する方法](#)」を参照してください。
- コンピュータ上のリカバリポイントにアクセスするのに必要なストレージドライブがない
- Symantec Recovery Disk を実行するためにシステムに関する情報が必要である  
p.30 の「[ドライブの検証が失敗した場合](#)」を参照してください。

### Symantec Recovery Disk をテストする方法

- 1 ドライブ検証ツールを実行して、コンピュータのネットワークカードとストレージデバイスに対して Symantec Recovery Disk が実行可能かどうかをテストします。
- 2 Symantec Recovery Disk CD を使用してコンピュータを起動します。  
p.178 の「[Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動](#)」を参照してください。
- 3 Symantec Recovery Disk を起動したら、次のいずれかを実行します。
  - リカバリポイントがネットワークに保存されている場合は、ネットワークに保存されているリカバリポイントの模擬復元を実行してネットワークの接続をテストします。
  - リカバリポイントがコンピュータに保存されている場合は、ローカルに保存されているリカバリポイントの模擬復元を実行して、ローカルハードディスクドライブの接続をテストします。

## ドライブの検証が失敗した場合

ドライブ検証テストは、コンピュータで使用されているすべてのストレージデバイスとネットワークカードのドライブが Symantec Recovery Disk で利用可能かどうかを検証します。ドライブがリカバリディスクに含まれている場合、検証されたことを示すメッセージが表示されます。ドライブがリカバリディスクに含まれていない場合、[ドライブの検証結果]ダイアログボックスが表示されます。

適切なドライブにアクセスできないと、Symantec Recovery Disk の実行中にデバイスを  
使用できません。そのため、コンピュータの修復に必要なリカバリポイントがネットワークま  
たはローカルハードディスクドライブに保存されている場合は、リカバリポイントにアクセス  
できない場合があります。

その場合、ドライブを検索して CD またはフロッピーディスクにコピーするか、カスタム  
Symantec Recovery Disk CD を作成します。

p.31 の「[カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成](#)」を参照してください。

## カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成

ドライブの検証が正常に行われ Symantec Recovery Disk CD が動作しているように見  
える場合でも、カスタム Symantec Recovery Disk CD を作成する必要があります。カス  
タム CD には、コンピュータで現在使用しているネットワークドライブおよびストレージデバ  
イスドライブが含まれています。それにより、緊急時にコンピュータの復元に必要なリカバ  
リポイントに確実にアクセスできるようになります。

---

**メモ:** カスタム Symantec Recovery Disk CD を作成するには、書き込み型  
Blu-ray/DVD/CD-RW ドライブが必要です。

---

### カスタム Symantec Recovery Disk CD を作成する方法

- 1 利用可能にするすべてのストレージデバイスとネットワークデバイスを接続し、電源  
を入れます。
- 2 Backup Exec System Recovery を起動します。
- 3 Symantec Recovery Disk CD をメディアドライブに挿入します。  
必要に応じて、Symantec Recovery Disk CD を配置したメディアドライブへのパス  
を指定するか、またはメディアドライブを参照します。
- 4 [タスク]>[カスタム Recovery Disk CD を作成]をクリックします。
- 5 [次へ]をクリックします。

6 次を指定します。

ディスクラベル	Symantec Recovery Disk のラベルに使う名前を入力します。
Symantec Recovery Disk を CD/DVD に書き込む	カスタマイズした Symantec Recovery Disk をメディアに保存する場合は、このオプションを選択して、使用するメディア書き込み装置をリストボックスで選択します。
Symantec Recovery Disk のコピーを保存する (ISO ファイル)	カスタマイズした Symantec Recovery Disk を .iso ファイルとして保存する場合は、このオプションを選択して、作成されたファイルの保存先となるパスを指定します。

7 [次へ]をクリックします。

8 含めるストレージドライバおよびネットワークドライバのリストを確認して、ドライバの追加や不要なドライバの削除を行います。

9 [起動オプション]ペインで、それぞれのリストから、デフォルトのキーボードレイアウト、表示言語、およびタイムゾーンを選択します。

10 [次へ]をクリックします。

11 [オプション]ペインで、次の操作を実行します。

ネットワークサービスを自動的に開始	LightsOut Restore によってコンピュータを修復するときに、ネットワーク接続を自動的に開始させる場合は、このオプションを選択します。
動的 IP	ネットワーク構成を追加しなくてもネットワーク接続ができるようにするには、このオプションをクリックします。復元するときにネットワーク上で DHCP サーバーが利用可能であることがわかっている場合、このオプションをクリックできます。
静的 IP	特定のネットワークアダプタと固有のアドレスが設定されているネットワークに接続するには、このオプションを選択します。修復するときに DHCP サーバーがない(または DHCP サーバーが利用不能である)ことがわかっている場合は、このオプションをクリックします。



Symantec pcAnywhere を自動的に開始

Symantec Recovery Disk を起動するときに、Symantec pcAnywhere Thin Host を自動的に起動させるには、このオプションを選択します。

[設定] をクリックして、pcAnywhere のログオン資格情報と次の省略可能なパラメータを指定します。

■ ホスト名

[ホスト名] フィールドに、ホストに対して使用する名前を入力します。

ホスト名をコンピュータと同じ名前に設定する場合は、このボックスを空白にしておくことができます。

■ 暗号化レベル

ホストとリモートコンピュータ間のデータストリームを暗号化するには、[暗号化レベル] リストで次のいずれかを選択します。

■ なし

ホストとリモートコンピュータ間で、データストリームの暗号化が行われません。

■ pcAnywhere

第三者が容易に解読できないように、数学アルゴリズムを使用してデータをスクランブル処理します。

このオプションは、pcAnywhere がサポートしているあらゆるオペレーティングシステムで利用可能です。

■ 共通

暗号キーを使用してデータをエンコードおよびデコードします。

このオプションは、Microsoft CryptoAPI をサポートしているあらゆる Windows オペレーティングシステムで利用可能です。

12 [次へ] をクリックします。

- 13 [ライセンス]設定ペインで、カスタマイズした Symantec Recovery Disk 内でライセンスを付与された機能(「コンピュータのバックアップ」と呼ばれるコールドイメージ機能など)を有効にする方法を指定します。
- 14 [終了]をクリックします。

---

**警告:** 新しいカスタム Symantec Recovery Disk CD は必ずテストしてください。テストでは、その CD を使ってコンピュータを起動できること、およびリカバリポイントを含んでいるドライブにアクセスできることを確認します。

p.30 の「[Symantec Recovery Disk のテスト](#)」を参照してください。

---

# 始めましょう

この章では以下の項目について説明しています。

- [主な製品コンポーネントについて](#)
- [Backup Exec System Recovery の使用方法](#)
- [Symantec Backup Exec System Recovery の起動](#)
- [Backup Exec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)

## 主な製品コンポーネントについて

Backup Exec System Recovery には、プログラム本体と Symantec Recovery Disk CD の 2 つの主要コンポーネントが含まれます。

表 4-1 主な製品コンポーネント

主なコンポーネント	説明
Backup Exec System Recovery プログラム (ユーザーインターフェース)	Backup Exec System Recovery プログラムでは、コンピュータのバックアップを定義、スケジュール、実行できます。バックアップを実行すると、コンピュータのリカバリポイントが作成されます。このリカバリポイントを使用して、コンピュータ全体または個別のドライブ、ファイル、フォルダを修復できます。また、リカバリポイントの保存場所 (バックアップ先) を管理したり、コンピュータのバックアップの状態を監視して、貴重なデータが定期的にバックアップされていることを確認できます。

主なコンポーネント	説明
Symantec Recovery Disk CD	<p>Symantec Recovery Disk CD を使用すると、修復環境でコンピュータを起動できます。コンピュータのオペレーティングシステムにエラーが発生した場合、Symantec Recovery Disk を使用してシステムドライブ(オペレーティングシステムがインストールされているドライブ)を修復します。</p> <p><b>メモ:</b> Symantec Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品CDに含まれるか、または別のCDとして提供されます。Symantec Recovery Disk が含まれているCDは安全な場所に保管してください。</p> <p>p.177 の「<a href="#">コンピュータの修復について</a>」を参照してください。</p>

## Backup Exec System Recovery の使用方法

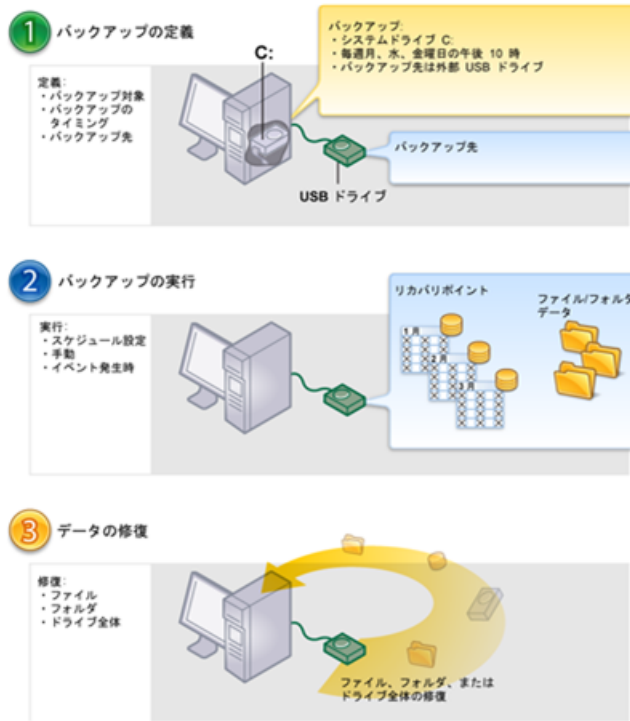
Backup Exec System Recovery でファイル、フォルダ、またはドライブ全体のバックアップを行う場合、バックアップ対象のデータ、バックアップするタイミング、およびバックアップしたデータの保存場所を指定する必要があります。

Backup Exec System Recovery を使用する場合、次の主なタスクを実行します。

- バックアップの定義
- バックアップの実行
- ファイル、フォルダ、またはドライブ全体の修復

次の図を参照して、タスクの関連性を確認してください。

図 4-1 Backup Exec System Recovery の使用



## Symantec Backup Exec System Recovery の起動

Backup Exec System Recovery は、デフォルトでは Windows の Program Files フォルダにインストールされます。インストール時に、プログラムアイコンが Windows のシステムトレイにインストールされます。このアイコンから Backup Exec System Recovery を開くことができます。Windows のスタートメニューで Backup Exec System Recovery を開くこともできます。

### Symantec Backup Exec System Recovery を起動する方法

- ◆ 実行している Windows のバージョンによって、次のいずれかの方法を使用します:
  - Windows のクラシックタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[Backup Exec System Recovery 2010]の順にクリックします。
  - Windows のタスクバーで、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[Backup Exec System Recovery 2010]の順にクリックします。

- Windows のシステムトレイで、**Symantec Backup Exec System Recovery 2010** のトレイアイコンをダブルクリックします。
- Windows のシステムトレイで Backup Exec System Recovery のトレイアイコンを右クリックして、[Symantec Backup Exec System Recovery 2010 を開く]をクリックします。

## フィードバックの送信

Backup Exec System Recovery 2010 に関するフィードバックや考えをシマンテック社にお送りください。

### フィードバックを送信する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
  - [Backup Exec System Recovery 2010]ウィンドウの右上の [意見を送信]をクリックします。
  - [ヘルプ]>[意見を送信]をクリックします。

## Backup Exec System Recovery のデフォルトオプションの設定

[オプション]ダイアログボックスには、次のデフォルト設定を指定するためのいくつかのビューがあります。

オプション	説明
全般	バックアップによってリカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータを作成して保存するデフォルトの場所を指定します。選択した場所がネットワーク上にある場合、ユーザー認証情報を入力します。 <a href="#">p.40 の「デフォルトのバックアップ先の選択」</a> を参照してください。

## オプション

### パフォーマンス

### 説明

バックアップまたは修復処理のデフォルトの速度を指定します。スライダを[高速]の方に移動すると、コンピュータのバックアップまたは修復が高速になります。特にバックアップまたは修復中にコンピュータで作業している場合は、低い速度を選択した方がコンピュータのパフォーマンスが向上します。

**メモ:** バックアップまたは修復中に、そのときのニーズに合わせてデフォルト設定を変更することもできます。

また、ネットワークスロットルを設定して、バックアップによるネットワークパフォーマンスへの影響を制限することもできます。

p.41 の「[コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響の調整](#)」を参照してください。

p.42 の「[ネットワークスロットルの有効化](#)」を参照してください。

### トレイアイコン

システムトレイアイコンのオンとオフを切り替えることができます。また、発生したエラーメッセージのみを表示するか、エラーメッセージとその他の情報(バックアップの完了など)の両方を表示するかを指定できます。

p.43 の「[デフォルトのトレイアイコン設定の調整](#)」を参照してください。

### ファイルの種類

ファイルの種類およびファイルの種類のカテゴリを管理できます。これらは、ファイルおよびフォルダのバックアップに含めるファイルの種類を選択する方法として使用されます。

p.43 の「[ファイルの種類管理](#)」を参照してください。

### Google デスクトップ

Backup Exec System Recovery のインストール時に Google デスクトップをコンピュータにインストールしている場合、[Google デスクトップファイルとフォルダの復元]を有効にすることができます。この機能を有効にすると、検索エンジンのサポートを有効にして作成したリカバリポイント内のファイルを(ファイル名で)検索できます。

Backup Exec System Recovery のインストール時に Google デスクトップをコンピュータにインストールしていない場合、Web サイトへのリンクをクリックすることで、Google デスクトップを無料でダウンロードしてインストールできます。

p.219 の「[検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

### 外部ドライブ

バックアップ先およびオフサイトコピー先として使用される外部ドライブに付けた固有の名前を削除または変更します。

p.45 の「[外部ドライブでのニックネームの使用](#)」を参照してください。

オプション	説明
FTP の設定	<p>オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定を指定します。</p> <p>p.46 の「<a href="#">オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定</a>」を参照してください。</p>
ログファイル	<p>ログに記録する製品メッセージの種類(エラー、警告、情報)や、ログファイルの保存場所を指定したり、ログファイルの最大ファイルサイズを設定できます。</p> <p>p.47 の「<a href="#">Backup Exec System Recovery メッセージのログへの記録</a>」を参照してください。</p>
イベントログ	<p>Windows のイベントログに記録する製品メッセージの種類(エラー、警告、情報)を指定できます。</p> <p>p.47 の「<a href="#">Backup Exec System Recovery メッセージのログへの記録</a>」を参照してください。</p>
SMTP 電子メール	<p>Backup Exec System Recovery による操作の履歴またはエラーメッセージと警告の履歴が必要な場合は、コンピュータ上のログファイルに保存するか、指定したアドレスに電子メールで送信します。</p> <p>p.49 の「<a href="#">製品(イベント)メッセージの電子メール通知の有効化</a>」を参照してください。</p>
SNMP トラップ	<p>Network Management System (NMS) アプリケーションを使用している場合は、SNMP トラップのサポートを有効にすると、NMS アプリケーションに通知を送信できます。</p> <p>p.128 の「<a href="#">SNMP トラップについて</a>」を参照してください。</p>

### Backup Exec System Recovery のデフォルトオプションを設定する方法

- 1 Backup Exec System Recovery を起動します。
- 2 [タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 3 編集するオプションを選択し、必要な変更を行って[OK]をクリックします。

## デフォルトのバックアップ先の選択

バックアップを実行したときに作成されるリカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータのデフォルトの保存先を指定できます。新しいバックアップを定義したときに保存場所の指定を省略した場合、ここで設定した保存場所が使用されます。

### デフォルトのバックアップ先を選択する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [全般]をクリックします。



- 3 [バックアップデータのファイル名の先頭にコンピュータ名を追記]を選択します。  
これは、複数のコンピュータを同じドライブにバックアップする場合に特に役立ちます。たとえば、ラップトップコンピュータとデスクトップコンピュータを同じ USB ドライブまたはネットワークドライブにバックアップする場合です。各バックアップデータファイル名の先頭にコンピュータ名が追加されていると、より簡単に、どのバックアップデータファイルがどのコンピュータのものであるかを特定できます。
  - 4 バックアップ先として使用する新しいサブフォルダを Backup Exec System Recovery で作成する場合は、[バックアップファイルを一意なサブフォルダに保存する]を選択します。
- 
- メモ:** 新しいサブフォルダにはコンピュータと同じ名前が付けられます。たとえば、コンピュータ名が「MyLaptop」である場合、新しいサブフォルダは「¥MyLaptop」という名前になります。
- 
- 5 リカバリポイントやファイルおよびフォルダのバックアップデータを保存するフォルダへのパスを入力するか、[参照]をクリックして保存場所を参照します。  
バックアップ先として、暗号化されたフォルダは使用できません。他のユーザーのアクセスを防止するためにバックアップデータを暗号化する場合は、バックアップを定義または編集するときに[詳細オプション]を参照してください。
  - 6 ネットワーク上の保存場所のパスを入力した場合は、ネットワーク認証に必要なユーザー名とパスワードを入力します。
  - 7 [OK]をクリックします。

## コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響の調整

バックアップの実行中(特に単体リカバリポイントの作成中)にコンピュータで作業している場合は、コンピュータの処理速度が低下することがあります。これは、バックアップを実行するために Backup Exec System Recovery によってコンピュータのハードディスクとメモリリソースが使用されているためです。

バックアップの速度を実際に変更して、作業中のコンピュータへの Backup Exec System Recovery の影響を最小限にすることができます。

### コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響を調整する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [パフォーマンス]をクリックします。
- 3 コンピュータの処理速度を上げる場合は、スライダバーを[低]の方に移動します。

- 4 バックアップをより短時間で終了する場合は、スライダバーを[高速]の方へ移動します。
- 5 [OK]をクリックします。

---

**メモ:**バックアップまたは修復中に、そのときのニーズに合わせてデフォルト設定を変更することもできます。

---

p.98 の「[バックアップ速度の調整](#)」を参照してください。

## ネットワークスロットルの有効化

コンピュータのパフォーマンスの調整と同様に、バックアップによるネットワークパフォーマンスへの影響を制限することもできます。

ネットワークパフォーマンスは多くの要因によって影響を受けます。この機能を使う前に、次の問題について考慮してください。

- ネットワークカード: ネットワークが有線か無線か。ネットワークカードの速度。
- ネットワークバックボーン: ネットワークパイプラインのサイズ。転送速度は **10 MB** をサポートしているか、**1 GB** をサポートしているか。
- ネットワークサーバー: サーバーハードウェアの堅ろう性。サーバーハードウェアのプロセッサ速度。搭載されている **RAM** 容量。RAM の速度。
- バックアップ: 同時にバックアップするようにスケジュールしているコンピュータの数。
- ネットワークトラフィック: バックアップの実行をスケジュールしている時間帯は、ネットワークトラフィックが重いときか、軽いときか。

ネットワークの処理能力がわかっている場合のみ、この機能の使用を検討してください。ネットワークトラフィックが軽いときにバックアップを時間差でスケジュールしている場合は、この機能を使用する必要がないこともあります。複数のコンピュータを同時に、同じネットワークの保存先にバックアップするのは避けてください。

ネットワークのパフォーマンスに関する必要な情報を収集してから、その情報に応じてバックアップをスケジュールします。その後、必要に応じてこの機能を有効にし、環境に合わせて最大ネットワークスループットを設定します。

### ネットワークスロットルを有効にする方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [パフォーマンス]をクリックします。
- 3 [ネットワークスロットルを有効化]を選択します。

- 4 [最大ネットワークスロットル]フィールドに、Backup Exec System Recovery が 1 秒間に送信可能な最大ネットワークスループット (KB) を入力します。
- 5 [OK] をクリックします。

## デフォルトのトレイアイコン設定の調整

システムトレイアイコンのオンとオフを切り替えて、発生したエラーメッセージのみを表示するか、エラーメッセージとその他の情報 (バックアップの完了など) の両方を表示するかを指定できます。

### デフォルトのトレイアイコン設定を調整する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション] の順にクリックします。
- 2 [トレイアイコン] をクリックし、次のいずれかを選択します。

システムトレイアイコンを表示	システムトレイに Backup Exec System Recovery のアイコンを表示します。  その他のオプションを有効または無効にするには、このオプションを選択する必要があります。
未処理のバックアップを表示	スケジュールしていたバックアップが実行されなかった場合に通知します。  バックアップの実行をスケジュールしていた時間にコンピュータの電源が入っていなかった場合などに発生します。
システムトレイに関する質問を表示	データの継続的なバックアップに役立つメッセージを、質問形式で表示します。
状態メッセージを表示	バックアップ操作の状態に関するメッセージ (バックアップの開始の通知や、バックアップ先の空き容量がわずかになったことなどの通知など) を表示します。
エラーメッセージを表示	エラーが発生した場合にエラーメッセージを表示して、データ保護を妨げる可能性がある問題の解決を促します。

- 3 [OK] をクリックします。

## ファイルの種類管理

ファイルおよびフォルダのバックアップを定義する場合、ファイルの種類を指定すると、頻繁に使用するファイルを簡単に処理対象に含めることができます。たとえば、コンピュー

タの音楽ファイルを保存する場合、ファイルおよびフォルダのバックアップを設定して、すべての音楽ファイル(.mp3、.wav など)を処理対象にできます。

最も一般的なファイルの種類と拡張子は、デフォルトで定義されています。必要に応じて、ファイルの種類のカテゴリをさらに定義して、いつでもそのカテゴリを編集できます。たとえば、2つの新しいファイルの拡張子(.pftと.ptp)を使用する必要がある新しいプログラムをインストールした場合、新しいファイルの種類を定義して、そのカテゴリにこの2つのファイルの拡張子を定義できます。その後、ファイルおよびフォルダのバックアップを定義するときに、この新しいカテゴリを選択できます。バックアップを実行すると、拡張子が.pftと.ptpのすべてのファイルがバックアップされます。

### 新しいファイルの種類と拡張子を作成する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [ファイルの種類]をクリックします。
- 3 [ファイルの種類]リストの下部で、[ファイルの種類を追加]([+])ボタンをクリックして、ファイルの種類のカテゴリを追加します。
- 4 新しいファイルの種類のカテゴリを説明する名前を入力して、**Enter**キーを押します。
- 5 [拡張子]リストの下部で、[拡張子の追加]([+])ボタンをクリックし、アスタリスク(\*)およびピリオドを入力してから、定義するファイルの種類と拡張子を入力し、**Enter**キーを押します。
- 6 [OK]をクリックします。

### ファイルの種類と拡張子を編集する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [ファイルの種類]をクリックします。
- 3 [ファイルの種類]リストからファイルの種類を選択し、次のいずれかを実行します。
  - [ファイルの種類を編集]ボタン([-]ボタンの右にある)をクリックして、選択したファイルの種類の名前を編集します。
  - [拡張子]欄内で拡張子を選択し、[拡張子を編集]ボタン([-]ボタンの右にある)をクリックして、拡張子の名前を編集します。
  - [デフォルトのファイルの種類のリストを復元]ボタンまたは[デフォルトの拡張子のリストを復元]ボタンのいずれかをクリックして、デフォルトのファイルの種類または拡張子をすべて復元します。

---

**注意:** 設定したファイルの種類と拡張子がすべて削除されます。これらは、再度手動で追加する必要があります。

---

4 [OK]をクリックします。

#### ファイルの種類(とそのすべての拡張子)を削除する方法

1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。

2 [ファイルの種類]列で、ファイルの種類を選択します。

デフォルトのファイルの種類は削除できません。拡張子は、デフォルトのファイルの種類以外の拡張子以外、すべて削除できます。デフォルトのファイルの種類に拡張子を追加することもできます。

3 [ファイルの種類を削除]([-])ボタンをクリックして、[OK]をクリックします。

同じ手順を使用して、[拡張子]リストからファイルの拡張子を削除します。

## 外部ドライブでのニックネームの使用

バックアップ先またはオフサイトコピー先として Backup Exec System Recovery で使用するドライブに外部ドライブを選択し、複数のドライブを使用している場合、特にドライブを接続するたびに割り当てられるドライブ文字が変更されると、混乱する場合があります。

これらのコピー先の管理をサポートするために、Backup Exec System Recovery では各外部ドライブにニックネームを割り当てることができます。これによってドライブラベルが変更されることはありません。エイリアスは Backup Exec System Recovery がそれらのドライブにアクセスする場合にのみ使用されます。

たとえば、ある週の間だけ、オフサイトコピー先として使用している 2 つの異なる外部ドライブをスワップアウトとします。各ドライブに割り当てられたドライブラベルや、以前に割り当てられたドライブ文字が変更されたかどうかによっては、その時点でどのドライブを使用しているか混乱する可能性があります。

しかし、各ドライブに固有のニックネームを関連付けることによって、Backup Exec System Recovery でドライブを使用する際、割り当てたニックネームが Backup Exec System Recovery のさまざまな場所に表示されます。

---

**メモ:** 各外部ドライブに物理的なラベルを貼り付けて、ドライブ交換のタスクを管理しやすくすることも有効な方法です。

---

たとえば、あるドライブに「Cathy Read」、2 つ目のドライブに「Thomas Read」というニックネームを割り当てた場合、ドライブがコンピュータに接続されるたびに Backup Exec System Recovery に割り当てたニックネームが表示されます。

p.85 の「オフサイトコピーについて」を参照してください。

これらの設定は、[オプション]ダイアログボックスで 1 つのビューにすべてのドライブニックネームを表示させることで、簡単に行えます。このビューから、既存の名前を削除または編集できます。

#### 外部ドライブのニックネームを削除または編集する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [ターゲット]の下の[外部ドライブ]をクリックします。
- 3 リストから外部ドライブを選択し、次のいずれかを実行します。
  - 外部ドライブに関連付けられたニックネームを削除する場合は、[削除]をクリックします。
  - ニックネームを編集する場合は、[名前の変更]をクリックします。

## オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定

File Transfer Protocol (FTP) は、インターネットを介してファイルをコピーする最も簡単で安全な方法です。Backup Exec System Recovery は FTP クライアントとして機能し、重要なデータのセカンダリバックアップとしてリカバリポイントをリモート FTP サーバーにコピーします。

[オプション]ダイアログボックスでは、FTP の基本的な設定を行い、リカバリポイントが確実に FTP サーバーにコピーされるようにすることができます。

### オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定を行う方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [ターゲット]の下の[FTP の設定]をクリックします。
- 3 次の表を参照して設定を変更します。

接続モード: パッシブ (推奨)	パッシブ(「PASV」と記述される場合もある)モードを使用すると、セキュリティシステムとの競合を回避できます。パッシブモードを使用すると、FTP クライアントは FTP サーバーによって提供される IP アドレスおよびポートへの接続を開くため、一部のファイアウォールおよびルーターではこのモードが必要です。
接続モード: アクティブ	パッシブモードで接続または転送の試行に失敗した場合、またはデータソケットエラーが発生した場合は、アクティブモードを使用します。FTP クライアントがアクティブモードを使用して接続する場合、サーバーは FTP クライアントによって提供される IP アドレスおよびポートへの接続を開きます。
接続試行の制限	Backup Exec System Recovery による FTP サーバーへの接続試行の最大回数を指定します。最大 100 回まで試行できます。
接続試行の上限	Backup Exec System Recovery による FTP サーバーへの接続試行が停止されるまでの秒数を指定します。最大 600 秒(10 分)まで指定できます。
デフォルトポート	接続のリスニングを行う FTP サーバー上のポートを指定します。  FTP サーバーの管理者に相談して、入ってくるデータが指定するポートで確実に受信されるように設定してください。

## Backup Exec System Recovery メッセージのログへの記録

発生時にログに記録する製品メッセージ(エラー、警告、情報)とログファイルの保存場所を指定できます。製品メッセージには、バックアップまたは関連するイベントの状態について役立つ情報が含まれます。また、トラブルシューティングが必要なときに便利な情報も含まれます。

Backup Exec System Recovery ログと Windows アプリケーションログの 2 つのログ記録方法を利用できます。

どちらの方法も[オプション]ページから設定します。

### Backup Exec System Recovery メッセージをログに記録する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [通知]で[ログファイル]をクリックします。
- 3 [優先度およびメッセージの種類]の選択]リストをクリックし、メッセージをログに記録する優先レベルを選択します。

すべてのメッセージ	優先レベルにかかわらず、すべてのメッセージが送信されます。
優先度が中および高のメッセージ	優先順位が中程度のメッセージと高いメッセージのみが送信されます。
優先度の高いメッセージのみ	優先順位が高いメッセージのみが送信されます。
メッセージなし	優先レベルにかかわらず、どのメッセージも送信されません。

- 4 次のオプションを1つ以上選択します。
  - エラー
  - 警告
  - 情報
- 5 [ログファイルの場所]フィールドで、ログファイルを作成して保存する場所へのパスを入力します。  
パスがわからない場合、[参照]をクリックして場所を選択します。
- 6 [最大ファイルサイズ]フィールドで、ログファイルの最大可能サイズ(KB)を指定します。  
新しく発生したログ項目は、ログファイル内の最も古いログ項目と置き換えられるため、ログファイルのサイズは設定した制限内に維持されます。
- 7 [OK]をクリックします。

### Windows のイベントログに記録する製品イベントを設定する方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [通知]で[イベントログ]をクリックします。



- 3 [優先度およびメッセージの種類]リストをクリックし、メッセージをログに記録する優先レベルを選択します。

すべてのメッセージ	優先レベルにかかわらず、すべてのメッセージが送信されます。
優先度が中および高のメッセージ	優先順位が中程度のメッセージと高いメッセージのみが送信されます。
優先度の高いメッセージのみ	優先順位が高いメッセージのみが送信されます。
メッセージなし	優先レベルにかかわらず、どのメッセージも送信されません。

- 4 次のオプションを 1 つ以上選択します。

- エラー
- 警告
- 情報

- 5 [OK]をクリックします。

## 製品 (イベント) メッセージの電子メール通知の有効化

バックアップの実行中にエラーまたは警告が発生した場合に、電子メール通知を指定したメールアドレスに送信できます。

---

**メモ:** SMTP サーバーがない場合は、この機能は利用できません。

---

通知は、システムイベントログとカスタムログファイルにも送られます。カスタムログファイルは、製品のインストールフォルダの **Agent** フォルダ内にあります。

通知が配信されない場合は、SMTP サーバーが正しく動作しているか、設定を確認してください。

### 製品 (イベント) メッセージの電子メール通知を有効にする方法

- 1 Backup Exec System Recovery のメニューバーで、[タスク]、[オプション]の順にクリックします。
- 2 [通知]で[SMTP 電子メール]をクリックします。

- 3 [優先度およびメッセージの種類を選択]リストをクリックし、電子メールを送信する優先レベルを選択します。

すべてのメッセージ	優先レベルにかかわらず、すべてのメッセージが送信されます。
優先度が中および高のメッセージ	優先順位が中程度のメッセージと高いメッセージのみが送信されます。
優先度の高いメッセージのみ	優先順位が高いメッセージのみが送信されます。
メッセージなし	優先レベルにかかわらず、どのメッセージも送信されません。

- 4 次のオプションを1つ以上選択します。

- エラー
- 警告
- 情報

- 5 [送信先アドレス]テキストボックスに、通知の送信先電子メールアドレスを入力します(例: **admin@domain.com**)。
- 6 任意で、[発信元アドレス]テキストフィールドに送信者の電子メールアドレスを入力します。
- 送信者の電子メールアドレスを指定しなかった場合は、製品名が使用されます。
- 7 [SMTP サーバー]テキストボックスで、電子メール通知を送る SMTP サーバーへのパスを入力します(例: **smtpserver.domain.com**)。
- 8 [SMTP 認証]ドロップダウンリストで、指定した SMTP サーバーを認証する方法を選択します。
- 9 SMTP のユーザー名とパスワードを入力します。
- ユーザー名とパスワードがわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。
- 10 [OK]をクリックします。

# データバックアップのベストプラクティス

この章では以下の項目について説明しています。

- データのバックアップについて
- バックアップの種類を選択について
- バックアップのベストプラクティス
- バックアップに関する追加のアドバイス
- バックアップジョブの定義後
- バックアップ先の選択について
- デュアルブートコンピュータのバックアップについて

## データのバックアップについて

コンピュータまたは個々のファイルやフォルダをバックアップするには、次の手順を実行します。

- バックアップの定義
  - バックアップの実行
- p.36の「[Backup Exec System Recovery の使用方法](#)」を参照してください。

バックアップを定義する際に、次の内容を決定します。

- バックアップデータ(ファイルとフォルダ、またはドライブ全体)
- バックアップデータの保存場所(バックアップ先)
- オフサイトコピーを使用して離れた場所にバックアップデータをコピーするかどうか

- バックアップを実行するタイミング(自動または手動)
- リカバリポイントに指定する圧縮レベルと、セキュリティ設定(暗号化とパスワード保護)を有効にするかどうか
- 使用するその他のオプション(必要に応じて各バックアップをカスタマイズ可能)

## バックアップの種類を選択について

バックアップには、次の2種類があります。

- **ドライブベースのバックアップ:** ハードディスクドライブ全体をバックアップします。
- **ファイルおよびフォルダのバックアップ:** 選択したファイルおよびフォルダだけをバックアップします。

次のガイドラインを参考にして、選択するバックアップの種類を判断できます。

**ドライブベースのバックアップ** このバックアップの種類を使用すると、次の作業を実行できます。

- コンピュータのシステムドライブ(通常はオペレーティングシステムを含むCドライブ)のバックアップおよび修復
- セカンダリドライブ(オペレーティングシステムがインストールされているシステムドライブ以外のドライブ)など、特定のハードディスクドライブのバックアップおよび修復
- 消失または破損したファイルまたはフォルダの、特定のリカバリポイントからの修復

**ファイルおよびフォルダのバックアップ** このバックアップの種類を使用すると、次の作業を実行できます。

- マイドキュメントフォルダに保存されている個人専用のファイルなど、特定のファイルおよびフォルダのバックアップおよび修復
- 音楽(.mp3や.wav)または写真(.jpgや.bmp)など、特定の種類のファイルのバックアップおよび修復
- 特定のリカバリポイントからの特定のバージョンのファイルの修復

p.53の「[バックアップの前に](#)」を参照してください。

## バックアップのベストプラクティス

コンピュータをバックアップする場合は、次の情報を参照してください。

- 「[バックアップの前に](#)」
- 「[バックアップ中](#)」

## ■ 「バックアップの終了後」

## バックアップについて

コンピュータをバックアップする場合、2種類のバックアップから選択します。

- ドライブベースのバックアップ: ハードディスクドライブ全体をバックアップします。
- ファイルおよびフォルダのバックアップ: 選択したファイルおよびフォルダだけをバックアップします。

どちらのバックアップの種類を選択するかは、保護するデータとバックアップデータ(リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータ)に必要な保存領域によって異なります。

次の表に、各バックアップの種類の子な使用方法を示します。

バックアップの種類	使用方法
ドライブベースのバックアップ	<ul style="list-style-type: none"><li>■ コンピュータのバックアップおよび修復(システムドライブ、通常はCドライブ)</li><li>■ 特定のハードディスクドライブのバックアップおよび修復(セカンダリドライブ、システムドライブ以外のドライブ)</li><li>■ 消失または破損したファイルまたはフォルダの、リカバリポイントによる修復</li></ul>
ファイルおよびフォルダのバックアップ	<ul style="list-style-type: none"><li>■ マイドキュメントフォルダに保存されている個人専用のファイルなど、特定のファイルおよびフォルダのバックアップおよび修復</li><li>■ 音楽(.mp3や.wav)または写真(.jpgや.bmp)など、特定の種類のファイルのバックアップおよび修復</li></ul>

## バックアップの前に

最初のバックアップの実行を定義する前に、次のようなベストプラクティスを考慮してください。

コンピュータの電源が入っている時間にバックアップをスケジュールする。バックアップが行われるときに、コンピュータの電源が入っており、Windowsが起動している必要があります。そうでない場合、コンピュータの電源が入るまで、スケジュールされたバックアップは行われません。その後、未処理のバックアップの実行を求めるメッセージが表示されます。

p.52の「バックアップの種類を選択について」を参照してください。

セカンダリハードディスクをバックアップ先として使用する。

リカバリポイントは、プライマリハードディスク(Cドライブ)以外のハードディスクに保存してください。これにより、プライマリハードディスクで障害が発生した場合にも、システムを確実に修復できます。

p.58の「バックアップ先の選択について」を参照してください。

バックアップ先として外部ドライブを使用することを検討する。

外部ドライブを使用すると、バックアップデータの移動がより簡単になります。重要なデータを特定の場所から移動する必要がある場合、外部ドライブを取り外して持ち出すことができます。

p.85の「オフサイトコピーについて」を参照してください。

外部ドライブにニックネームを付けて、外部ドライブの識別を簡単にする。

各外部ドライブにニックネームを割り当て、バックアップするコンピュータごとのバックアップデータの保存先を追跡することができます。ドライブ文字は、外部ドライブをコンピュータから切断またはコンピュータに接続するたびに變更される可能性があるため、ニックネームを使用することによって **Backup Exec System Recovery** の実行時に使用しているドライブを常に確実に把握することができます。

ニックネームを使用しても、ドライブのボリュームラベルは變更されません。ニックネームは **Backup Exec System Recovery** の使用時にドライブの識別に役立つだけです。

また、ニックネームはドライブに固定されるため、**Backup Exec System Recovery** の別のコピーが実行されている2台目のコンピュータにドライブを接続すると、ニックネームが表示されます。

**メモ:** 割り当てたニックネームで粘着ラベルを各ドライブに貼り付けることも考慮してください。

p.45の「外部ドライブでのニックネームの使用」を参照してください。

オフサイトコピーを使用する。

可搬ストレージデバイスまたはリモートサーバーのいずれかに最新のリカバリポイントをコピーするには、オフサイトコピーを使用します。リカバリポイントを可搬ハードディスクにコピーすることにより、オフィスを離れる際にデータのコピーを持ち出すことができます。

p.85の「オフサイトコピーについて」を参照してください。

定期的な間隔で頻繁にバックアップを実行する。

バックアップを定義する際に、頻繁に実行するようにスケジュールを設定して、少なくとも最近2か月間のリカバリポイントを保存します。

p.101の「[バックアップスケジュールの編集](#)」を参照してください。

p.64の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

個人用データは、Windowsや他のソフトウェアプログラムをインストールしたドライブとは別のドライブに保存する。

オペレーティングシステムやソフトウェアのプログラムは、個人用のデータとは別に保管してください。これにより、リカバリポイントを作成する速度が上がり、復元する情報の量も少なくなります。たとえば、Windowsの実行やソフトウェアプログラムのインストールと実行には、Cドライブを使用してください。個人用ファイルやフォルダの作成、編集、保存には、Dドライブを使用してください。

ドライブを管理するための他のヒントについては、[www.symantec.com/jp/](http://www.symantec.com/jp/)のシマンテック社のWebサイトを参照してください。

作成したリカバリポイントを検証し、動作が安定していることを確認する。

バックアップを定義する際に、リカバリポイントを検証するオプションを選択して、消失したデータの修復にリカバリポイントを使用できるようにしてください。

p.52の「[バックアップの種類を選択について](#)」を参照してください。

## バックアップ中

コンピュータで作業中にバックアップが開始された場合、コンピュータの処理速度が低下することがあります。Backup Exec System Recoveryは、バックアップを実行するために多くのシステムリソースを必要とします。処理速度が低下した場合、作業が終わるまでバックアップの速度を落としてコンピュータのパフォーマンスを向上させることができます。

p.98の「[バックアップ速度の調整](#)」を参照してください。

## バックアップの終了後

バックアップが終了した後で、次のようなベストプラクティスを考慮してください。

リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータの内容を確認する。

[状態]ページを確認して、バックアップが実行され、問題がないことを確認する。

古いバックアップデータを削除して、保存領域を管理する。

コンピュータの各ドライブに適用されている保護レベルを確認する。

リカバリポイントのバックアップコピーを保管する。

リカバリポイントの内容を定期的にチェックして、重要なデータのみがバックアップされていることを確認します。

ファイルおよびフォルダのバックアップを使用する場合、[ホーム]または[タスク]ページで[ファイルを修復]をクリックします。次に、[検索]をクリックし、バックアップに含まれるすべてのファイルの最新バージョンを表示します。

p.167の「[リカバリポイントに保存されたファイルやフォルダを開く](#)」を参照してください。

[状態]ページを定期的に確認してください。[詳細]ページでイベントログを確認することもできます。

イベントログには、イベントが発生したときにログが記録され、さらにバックアップ中またはバックアップ後に発生したバックアップおよびエラーが記録されます。

[詳細]ページのタブがない場合、[表示]、[詳細ページを表示]の順にクリックします。

**メモ:** バックアップの状態および他のメッセージもシステムトレイに表示されます。そのため、バックアップの状態を確認するために製品を起動する必要もありません。

p.99の「[バックアップの正常終了の検証](#)」を参照してください。

古いリカバリポイントを削除して、ハードディスクの空き領域を増やします。

また、ファイルおよびフォルダのバックアップによって作成されるファイルのバージョン数を減らします。

p.141の「[リカバリポイントの保存場所の管理](#)」を参照してください。

p.157の「[ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)」を参照してください。

[状態]ページを定期的にチェックして、定義したバックアップが各ドライブに適用されていることを確認します。

リカバリポイントのバックアップコピーを安全な場所に保存してください。たとえば、ネットワーク上の任意の場所に保存したり、別の場所で長期的に保管するためにCD、DVD、テープを使用することもできます。

p.143の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。



## バックアップに関する追加のアドバイス

定義したバックアップを実行する場合、次のアドバイスを参考にしてください。

- スケジュールされたバックアップを開始するのに、**Backup Exec System Recovery** が実行中である必要はありません。バックアップを定義した後で、**Backup Exec System Recovery** を終了できます。
- バックアップ対象のコンピュータは、電源が入っており、**Windows** が起動している必要があります。
- 定義したバックアップは、後で編集または実行できるように自動的に保存されます。
- バックアップ中は、ディスクのデフラグプログラムを実行しないでください。リカバリポイントの作成に要する時間が大幅に延び、予期しないシステムリソースの問題が発生することがあります。
- 相互に依存する複数のドライブがある場合、そのようなドライブは同一のバックアップに含めてください。これにより、最大限の保護を行うことができます。
- 複数のドライブを定義した同一のバックアップに含めることで、実行するバックアップの合計数を減らします。これにより、作業の中断を最小限にすることができます。
- 進行状況とパフォーマンスの機能を使用して、コンピュータのパフォーマンスに対するバックアップの影響を減らします。たとえば、プレゼンテーションの途中でスケジュールされたバックアップが開始された場合、バックアップの速度を下げ、処理リソースをプレゼンテーションプログラムに割り当てることができます。
- バックアップ中に、コンピュータの電源管理機能が **Backup Exec System Recovery** と競合することがあります。  
たとえば、一定の時間が経過したらコンピュータが休止状態になるように設定されていることがあります。スケジュールされたバックアップ中には、電源管理機能を無効にしてください。
- バックアップが中断された場合、再実行してください。
- バックアップの作成中に問題が発生した場合、コンピュータの再起動が必要となる場合があります。

## バックアップジョブの定義後

定義したバックアップジョブは、後で編集または実行できるように自動的に保存されます。

バックアップを定義して、その実行をスケジュールしたら、**Backup Exec System Recovery** を終了することができます。バックアップを開始するために、プログラムを実行している必要はありません。

ただし、バックアップが行われるときに、コンピュータの電源が入っており、**Windows** が起動している必要があります。そうでない場合、コンピュータの電源が入るまで、スケジュール

ルされたバックアップは行われません。その後、未処理のバックアップの実行を求めるメッセージが表示されます。

## バックアップジョブのプロパティの表示

バックアップジョブを開かずに、定義済みのバックアップの設定および構成を確認することができます。

### バックアップジョブのプロパティの表示方法

- 1 [ホーム]ページで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理]ウィンドウでバックアップジョブを選択し、[タスク]、[プロパティ]の順にクリックします。

## バックアップ先の選択について

リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータの保存先は、以下の情報を考慮して決めてください。

---

**メモ:** バックアップ先として CD または DVD を使用する場合 (非推奨) は、ディスク上のサブフォルダにバックアップすることはできません。CD や DVD のルートにバックアップデータを作成する必要があります。

---

次の表に、バックアップ先を選択するときに考慮する必要がある情報を示します。

表 5-1 バックアップ先の選択

バックアップ先	考慮する項目
ローカルハードディスクドライブ、USBドライブ、FireWireドライブ (推奨)	この方法のメリットは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 高速にバックアップおよび修復できる</li> <li>■ 無人バックアップをスケジュールできる</li> <li>■ ディスク領域に繰り返し上書きが可能で低コストである</li> <li>■ 別の場所で保管できる</li> <li>■ ハードディスクドライブ領域を他の用途のために確保できる</li> </ul> リカバリポイントをバックアップ対象と同じドライブに保存することは可能ですが、次の理由からお勧めできません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ リカバリポイントの数またはサイズが大きくなると、通常の使用に使用できるディスク容量が少なくなる。</li> <li>■ リカバリポイントはそれ以降のそのドライブのリカバリポイントに含まれることになるため、リカバリポイントのサイズが増大する。</li> <li>■ 致命的なエラーがそのコンピュータに発生した場合は、同じハードディスク上の別のドライブにリカバリポイントを保存してある場合でも、必要なリカバリポイントを修復できない可能性がある。</li> </ul>
ネットワークフォルダ	コンピュータがネットワークに接続されている場合は、リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータをネットワークフォルダに保存できます。 <p>ネットワークフォルダにバックアップするには、通常そのフォルダをホストしているコンピュータへの認証を行う必要があります。コンピュータがネットワークドメインの一部となっている場合、ドメイン名、ユーザー名、パスワードを入力する必要があります。たとえば、<code>domain¥username</code> のように入力します。</p> <p>ワークグループ内のコンピュータに接続している場合、リモートコンピュータ名とユーザー名を入力する必要があります。たとえば、<code>remote_computer_name¥username</code> のように入力します。</p>

バックアップ先	考慮する項目
CD-RW/DVD-RW	<p>バックアップデータをリムーバブルメディアに保存する際、バックアップするのに複数のメディアが必要な場合は、ファイルが自動的に正しいサイズに分割されます。</p> <p>複数のドライブのバックアップでは、同じメディア上に複数のドライブのリカバリポイントを保存する領域を確保できる場合でも、各ドライブのリカバリポイントはメディア上に単体で保存されます。</p> <p>この方法を使用する場合は、バックアップをスケジュールできません。</p> <p><b>メモ:</b> CD-RW または DVD-RW をリカバリポイントの保存場所として使用すると、処理中にディスクを交換する必要があるため、最適な方法とはいえません。</p>

次の表に、バックアップ先の種類と、それぞれの長所と短所を示します。

表 5-2 バックアップ先の長所と短所

バックアップ先	長所	短所
ハードディスクドライブ (推奨)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 高速にバックアップおよび修復できる</li> <li>■ 無人バックアップをスケジュールできる</li> <li>■ ディスク領域に繰り返し書き込みが可能で低コストである</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 他の用途で使用できるドライブ領域が減る</li> <li>■ ハードディスクドライブが故障した場合は、データが消失する可能性がある</li> </ul>
ネットワークドライブ (推奨)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 高速にバックアップおよび修復できる</li> <li>■ 無人バックアップをスケジュールできる</li> <li>■ ディスク領域に繰り返し書き込みが可能で低コストである</li> <li>■ ローカルハードディスクドライブが故障した場合にデータを保護できる</li> <li>■ 既存のネットワークバックアップ方法を使用して、データを別の場所に保管できる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Symantec Recovery Disk から復元するには、ネットワークインターフェースカードドライブがサポートされている必要がある</li> <li>■ バックアップおよびデータの復元を実行するユーザーに適切な権限を割り当てる必要がある</li> </ul>

バックアップ先	長所	短所
リムーバブルメディア(ローカル)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ハードディスクドライブが故障した場合にデータを保護できる</li> <li>■ 別の場所での保管に最適である</li> <li>■ ハードディスクドライブ領域を他の用途のために確保できる</li> </ul>	

## デュアルブートコンピュータのバックアップについて

デュアルブートコンピュータでもバックアップは可能です。**Backup Exec System Recovery** を実行しているオペレーティングシステムに隠しドライブ(パーティション)があっても、問題なくバックアップできます。

ドライブのバックアップを実行すると、各ドライブの内容全体がリカバリポイントで取得されます。ドライブを復元すると、修復されたドライブからブートできるようになります。

---

**メモ:** コンピュータを復元したシステムから元の構成と同じようにブートするには、オペレーティングシステムのブート情報を含むすべてのドライブをバックアップしてから復元する必要があります。

**Backup Exec System Recovery** を両方のオペレーティングシステムにインストールし、その両方で共有ドライブを管理するように設定している場合は、共有データドライブの増分バックアップを作成することはできません。

---

デュアルブートシステムで **Backup Exec System Recovery LightsOut Restore** 機能を使用すると、問題が発生する場合があります。デュアルブートシステムでは、これらの機能はサポートされていません。

これは、**Backup Exec System Recovery Restore Anywhere** 機能の場合も同じです。



# ドライブ全体のバックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- [ドライブベースのバックアップの定義について](#)
- [ドライブベースのバックアップの定義](#)
- [ドライブベースのバックアップの圧縮レベル](#)
- [Backup Exec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行](#)
- [Symantec Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について](#)
- [オフサイトコピーについて](#)
- [オフサイトコピーの仕組み](#)

## ドライブベースのバックアップの定義について

ドライブベースのバックアップは、ハードディスクドライブ全体のスナップショットを取得し、保存されているすべての情報を後で取得できるように取り込みます。ファイル、フォルダ、デスクトップ設定、プログラム、およびオペレーティングシステムのすべてがリカバリポイントに取り込まれます。これによって、リカバリポイントを使用して個々のファイルやフォルダ、またはコンピュータ全体を復元できます。

データを確実に保護するには、ドライブベースのバックアップを定義し、定期的にバックアップを実行してください。

デフォルトでは、スケジュールされた単体リカバリポイントまたはリカバリポイントセットの名前には、001.v2i、002.v2iのように連番が付加されます。リカバリポイントセットの名前には、\_i001.iv2i、\_i002.iv2iのように連番が付加されます。たとえば、ベースリカバリポイントの名前が CathyReadF001.v2i の場合、最初の増分リカバリポイントの名前は CathyReadF001\_i001.iv2i になります。

p.64 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

## ドライブベースのバックアップの定義

ハードディスクドライブ全体のスナップショットを作成するようにドライブベースのバックアップを定義してください。

### ドライブベースのバックアップを定義する方法

- 1 [ホーム]ページまたは[タスク]ページで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理]ウィンドウで、[新しく定義]をクリックします。  
バックアップをまだ定義していない場合は、[簡単セットアップ]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [コンピュータのバックアップ]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 4 バックアップするドライブを1つ以上選択し、[次へ]をクリックします。  
複数のドライブを選択する場合は、**Ctrl** キーを押しながら選択します。  
目的のドライブが表示されない場合、[隠しドライブを表示]を選択します。
- 5 [関連するドライブ]ダイアログボックスが表示されたら、適切なオプションを設定し、次に[次へ]をクリックします。それ以外の場合は次の手順にスキップします。  
p.66の「[\[関連するドライブ\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 バックアップで作成するリカバリポイントの種類を選択します。  
p.67の「[リカバリポイントの種類のオプション](#)」を参照してください。
- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [バックアップ先]パネルで、必要なオプションを選択してください。  
p.68の「[バックアップ先のオプション](#)」を参照してください。  
バックアップ先として、暗号化されたフォルダは使用できません。他のユーザーのアクセスを防止するために、バックアップデータを暗号化することができます。
- 9 (省略可能) バックアップ保護を強化するために、離れた場所に保存するリカバリポイントのコピーを作成する場合は、次の操作を実行します。
  - [追加]をクリックし、[オフサイトコピーの有効化]を選択します。
  - 外部オフサイトコピー先のドライブをコンピュータに接続するたびに、リカバリポイントがそのドライブに自動的にコピーされるようにする場合は、[外部オフサイトコピー先のドライブに接続するときにコピーの開始を確認するメッセージを表示する]オプションを選択します。
  - [参照]をクリックし、オフサイトコピー先を確認します。



- 2つ目のコピー先を追加する場合は、[オフサイトコピー先を追加]をクリックし、コピー先のパス(ローカルフォルダ、ネットワークパス、FTP アドレスなど)を指定します。
  - [OK]をクリックします。  
 p.85の「[オフサイトコピーについて](#)」を参照してください。
- 10 [次へ]をクリックします。
- 11 [オプション]パネルで、目的のリカバリポイントオプションを設定します。  
 p.68の「[リカバリポイントのオプション](#)」を参照してください。
- 12 (省略可能)[詳細]をクリックし、目的の詳細オプションを設定し、[OK]をクリックして[オプション]パネルに戻ります。  
 p.74の「[ドライブベースのバックアップの詳細オプション](#)」を参照してください。
- 13 (省略可能)リカバリポイント作成処理の間にコマンドファイルを実行する場合は[コマンドファイル]をクリックし、コマンドファイルオプションを設定し、[OK]をクリックして[オプション]パネルに戻ります。
- 必要に応じて、リカバリポイントの作成中に段階的に実行するコマンドファイル(.exe、.cmd、.bat)をリストから選択し、コマンドの実行時間(秒)を指定できます。  
 p.72の「[バックアップ中のコマンドファイルの実行について](#)」を参照してください。
- 14 [次へ]をクリックします。
- 15 次のいずれかを実行します。
- 先に手順6でリカバリポイントの種類としてリカバリポイントセットを選択した場合は、次の手順にスキップします。
  - リカバリポイントの種類として単体リカバリポイントを選択した場合は、[自動的にリカバリポイントを作成]リストで次のいずれかのオプションを選択します。[次へ]をクリックして選択したオプションを確認し、[終了]をクリックします。

スケジュールなし	手動で実行した場合にのみ、バックアップが実行されます。
毎週	指定した曜日の開始時刻にバックアップが実行されます。  このオプションを選択すると、[保護する曜日を選択]フィールドが表示されます。
毎月	指定した日付の開始時刻にバックアップが実行されます。  このオプションを選択すると、[保護する日にちを選択]フィールドが表示されます。

一度だけ実行

指定した日付と時刻に一度だけバックアップが実行されます。

このオプションを選択すると、[単一のリカバリポイントを作成]フィールドが表示されます。

- 16** バックアップをスケジュールに従って自動的に実行する場合は、[スケジュール]を選択して、開始時刻を入力し、バックアップを実行する曜日を選択します。
- 手動で開始した場合にのみバックアップを実行する場合は、[スケジュール]のチェックマークをはずして次の手順にスキップします。
- 17** (省略可能) [カスタム] ボタンをクリックし、新しいリカバリポイントセットを起動する頻度を指定します。
- たとえば[毎月]を選択した場合、新しいベースリカバリポイントは、新しい各月で実行される最初のバックアップ時に作成されます。
- 18** 特定のイベントに対応してバックアップを開始するイベントトリガの設定など、スケジュールの詳細オプションを設定するには、[詳細]をクリックし、必要なオプションを設定します。
- p.70の「[詳細なスケジュールオプション](#)」を参照してください。
- 19** [OK]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 20** (省略可能) 新しいバックアップをすぐに行う場合は、[今すぐバックアップを実行]をクリックします。
- 一度だけ実行するオプションを選択して単体リカバリポイントを設定した場合、このオプションは利用できません。
- 21** 選択したオプションを確認し、[終了]をクリックします。

## [関連するドライブ]オプション

[関連するドライブ]ウィザードパネルは、このパネルにリストされているドライブの1つ以上を使うように構成されたアプリケーションが含まれているドライブを最初に選択したときのみ表示されます。そのようなアプリケーションには次のものがあります：

- Windows Server 2008 R2 with Hyper-V
- ドメインコントローラ
- オペレーティングシステムがインストールされているドライブとは別のドライブにあるブート構成データベース (Windows Vista と Windows 7)

接続された Microsoft 仮想ハードディスク (VHD) をバックアップしたい場合にはホストドライブ用と接続された VHD 用に別のバックアップジョブを作成する必要があります。たとえば、VHD のホストがドライブ C にあり、接続された VHD がドライブ D である場合、ドラ

イブ C のバックアップジョブとドライブ D のバックアップジョブを作成する必要があります。また、別の接続された VHD 内で入れ子になっている接続された VHD はバックアップできません。

p.229 の「Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて」を参照してください。

データドライブ (オペレーティングシステムがインストールされていない任意のドライブ) のデータを暗号化するために Microsoft BitLocker ドライブ暗号化を使用すると、ロックされたデータドライブは Backup Exec System Recovery で処理されないことに注意してください。代わりに、BitLocker で暗号化されたドライブをバックアップするには、そのドライブをロック解除する必要があります。

通常、事前選択されているオプション [関連するすべてのドライブを追加] を受け入れてください。そうすることによって、もし復元を将来実行する必要がある場合、正常に修復を実行することができます。特定の関連ドライブを選択解除すると、修復が不完全に実行されるか、正常に完了しない場合があります。

## リカバリポイントの種類オプション

リカバリポイントセットと単体リカバリポイントは、利用可能な 2 つのリカバリポイントの種類オプションです。各オプションの種類は次の表に記述されています。

表 6-1 リカバリポイントの種類オプション

オプション	説明
リカバリポイントセット (推奨)	<p>追加のリカバリポイントがあるベースリカバリポイントを実行スケジュールします。追加のリカバリポイントには、前回のリカバリポイント以降にコンピュータに加えられた増分変更のみが含まれます。</p> <p>増分リカバリポイントは、ベースリカバリポイントより高速に作成できます。また、単体リカバリポイントより使用する保存領域が小さくなります。</p> <p><b>メモ:</b> 各ドライブに定義できるリカバリポイントセットは 1 つのみです。選択したドライブを既存のバックアップに割り当て、リカバリポイントの種類として [リカバリポイントセット] を指定している場合、[リカバリポイントセット] オプションは利用できません。また、リカバリポイントセットに含めることができないマウントされていないドライブを選択した場合も、このオプションは利用できません。</p>
単体リカバリポイント	<p>選択したドライブ全体の単体のコピーを作成します。通常、特にバックアップを複数回実行する場合、このバックアップの種類はより多くの保存領域を必要とします。</p>

## バックアップ先のオプション

次の表は[バックアップ先]ページのオプションを記述したものです。

表 6-2 バックアップ先のオプション

オプション	説明
[フォルダ]フィールド	<p>リカバリポイントを保存する場所を示します。</p> <p><b>Backup Exec System Recovery</b> でこの場所に十分な空き領域がないことが検出された場合、警告が表示されます。十分な領域がある別の場所を選択してください。</p>
[編集]	<p>[編集]ボタンはネットワークにあるバックアップ先を選択した場合にのみアクティブになります。バックアップ先がネットワークにあれば、ネットワークアクセスのために必要なユーザー名とパスワードを指定できるダイアログボックスを表示するために[編集]ボタンをクリックできます。これはネットワーク共有にリカバリポイントを保存する場合にも適用されます。</p> <p><b>p.71</b> の「<a href="#">ネットワーク資格情報について</a>」を参照してください。</p>
[リカバリポイントファイル名のカスタマイズ]	<p>リカバリポイントの名前を変更できます。リカバリポイントの名前を変更するには[名前の変更]をクリックし、次に新しいファイル名を入力してください。</p> <p>デフォルトのファイル名は、コンピュータ名の後にドライブ文字が付加されたものです。</p>
[追加]	<p>最大2つのオフサイトコピー先を追加できます。</p> <p>オフサイトコピーを使用すると、バックアップが完了するたびに、最新のリカバリポイントが、外部ドライブなどの可搬ストレージデバイス、ローカルエリアネットワーク接続を介したリモートサーバー、リモートFTPサーバーのいずれかに自動的にコピーされます。</p> <p><b>p.85</b> の「<a href="#">オフサイトコピーについて</a>」を参照してください。</p>

## リカバリポイントのオプション

次の表は[オプション]ページのリカバリポイントのオプションを記述したものです。

表 6-3 リカバリポイントのオプション

オプション	説明
[名前]	<p>バックアップの名前を入力します。</p> <p><b>メモ:</b> このオプションは Symantec Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。</p>
[圧縮]	<p>リカバリポイントの圧縮レベルとして、次のいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ なし</li> <li>■ 標準</li> <li>■ 中</li> <li>■ 高</li> </ul> <p>p.78 の「<a href="#">ドライブベースのバックアップの圧縮レベル</a>」を参照してください。</p> <p>圧縮率は、ドライブに保存されているファイルの種類によって異なります。</p>
[作成後のリカバリポイントを検証]	<p>リカバリポイントまたはファイルセットが有効か破損しているかを自動的にテストする場合に選択します。</p>
[このバックアップに保存するリカバリポイントセット数を制限]	<p>このバックアップに保存するリカバリポイントセット数を制限する場合に選択します。リカバリポイントセット数を制限すると、リカバリポイントが保存されているハードディスクドライブに空き領域がなくなるリスクを軽減できます。新しいリカバリポイントセットは、バックアップ先ドライブ上の最も古いセットと置き換えられます。</p> <p>このオプションはリカバリポイントセットを作成する場合にのみ表示されます。</p> <p><b>メモ:</b> このオプションは Symantec Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。</p>

オプション	説明
[検索エンジンのサポートを有効化]	<p>Google デスクトップなどの検索エンジンで、各リカバリポイントに含まれているすべてのファイル名にインデックス付けする場合に選択します。ファイル名にインデックス付けすると、検索エンジンを使用して復元するファイルを検索できません。</p> <p>このオプションは、NTFS ファイルシステム専用です。</p> <p>p.219の「<a href="#">検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索について</a>」を参照してください。</p> <p><b>メモ:</b> このオプションは Symantec Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。</p>
[システムファイルと一時ファイルを含める]	<p>リカバリポイントをクライアントコンピュータ上に作成する際に、オペレーティングシステムファイルと一時ファイルに対しても、インデックス付けサポートを有効にする場合に選択します。</p> <p><b>メモ:</b> このオプションは Symantec Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。</p>
[詳細]	<p>p.74の「<a href="#">ドライブベースのバックアップの詳細オプション</a>」を参照してください。</p>
コマンドファイル	<p>p.72の「<a href="#">バックアップ中のコマンドファイルの実行について</a>」を参照してください。</p>
[説明]テキストボックス	<p>リカバリポイントの説明を入力します。説明を任意に記述して、リカバリポイントの内容の識別に利用できます。</p>

## 詳細なスケジュールオプション

次の表は詳細なスケジュールオプションを記述したものです。

表 6-4 詳細なスケジュールオプション

オプション	説明
スケジュール (バックアップ時刻)	<p>次の操作を 1 つ以上実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ [スケジュール]をクリックし、バックアップを実行する日付と開始時刻を選択します。</li> <li>■ 保護するデータを頻繁に編集する場合、[1日に複数回実行]を選択します。 また、バックアップの最大間隔と1日にバックアップを実行する回数を指定します。</li> <li>■ [自動的に最適化]リストをクリックし、バックアップ先で使用するディスク領域の管理に役立つ最適化の頻度を選択します。</li> <li>■ [新しいリカバリポイントセットを開始]リストをクリックし、新しいリカバリポイントセットを起動する頻度を選択します。 [カスタム]をクリックし、選択するオプションをカスタマイズします。</li> </ul>
イベントトリガ (全般) (ThreatCon レスポンス)	<p>バックアップを自動的に開始するイベントの種類を選択します。</p> <p>p.100の「<a href="#">イベント起動バックアップの有効化</a>」を参照してください。</p>

## ドライブベースのバックアップから除外されるファイルについて

次のファイルは、ドライブベースのバックアップから意図的に除外されています。

- hiberfil.sys
- pagefile.sys

これらのファイルには、大量のディスク領域を占有する一時データが含まれています。これらのファイルは不要であり、システムが完全に修復された後にコンピュータシステムに悪影響を与えることはありません。

これらのファイルの名前がリカバリポイントに表示される場合でも、それは単なる存在情報です。データは保存されていません。

## ネットワーク資格情報について

ネットワーク上のコンピュータに接続する際は、そのネットワークへの認証をすでに行っている場合でも、ネットワークにアクセスするためのユーザー名とパスワードを入力する必要があります。これは Backup Exec™ System Recovery 2010 サービスがローカルシステムアカウントとして実行されるためです。

ネットワーク資格情報を入力する場合、次のルールが適用されます。

- 接続するコンピュータがドメイン上にある場合、ドメイン名、ユーザー名、パスワードを入力します。例:`domain¥username`
- ワークグループ内のコンピュータに接続している場合、リモートコンピュータ名とユーザー名を入力します。例:`remote_computer_name¥username`
- ドライブをマッピングした場合、サービスが異なるコンテキストで実行され、マッピングしたドライブを認識できないため、このダイアログボックスでユーザー名とパスワードを入力する必要がある場合があります。

ツールメニューで[オプション]を選択すると、ネットワーク資格情報を含む、デフォルトのバックアップデータ保存先を設定できます。これによって、ジョブの作成時、指定した場所がデフォルトでダイアログボックスに表示されるようになります。別のオプションを使用すると、企業の特定のバックアップユーザーアカウントを作成し、このアカウントを使うように Backup Exec™ System Recovery 2010 サービスを設定できます。

## バックアップ中のコマンドファイルの実行について

バックアップ中にコマンドファイル(.exe、.cmd、.bat)を使用できます。コマンドファイルを使用すると、Backup Exec System Recovery をコンピュータで実行中の他のバックアップルーチンと統合できます。またコマンドファイルを使用して、コンピュータのドライブを使う他のアプリケーションと統合することができます。

---

**メモ:** notepad.exe などのグラフィカルユーザーインターフェースが含まれるコマンドファイルを実行することはできません。そのようなコマンドファイルを実行すると、バックアップジョブが失敗します。

---

リカバリポイントの作成中、次の任意の段階でコマンドファイルを実行できます。

- スナップショット作成前に実行
- スナップショット作成後に実行
- リカバリポイント作成後に実行

また、コマンドファイルを実行できる時間(秒)を指定できます。

コマンドファイルをデフォルトの保存場所以外の場所に保存する場合は、保存場所を指定することができます。また、ジョブごとに保存場所を指定することも、複数のコンピュータで共有できる保存場所を指定することもできます。ネットワーク上の場所を指定すると、ネットワーク資格情報の入力を求められます。

コマンドファイルの実行は、バックアップを実行する VSS 非対応データベースを停止および再起動するときに最もよく使用されます。



バックアップ中に **Visual Basic** スクリプトファイル (.VBS) を使用する場合は、スクリプトを実行するバッチファイル (.BAT) を作成します。たとえば、以下の構文を含む **STOP.BAT** というバッチファイルを作成します。

```
Cscript script_filename.vbs
```

Cscript は **Visual Basic** スクリプトファイル名に先行します。

---

**警告:** コマンドファイルはユーザーによる操作なしで実行されるため、実行中にユーザーインターフェースは表示されません。すべてのコマンドファイルを、バックアップ中に使用する前に、**Backup Exec System Recovery** とは別にテストすることをお勧めします。

---

バックアップが開始されると、指定した段階でコマンドファイルが実行されます。コマンドファイルの実行中にエラーが発生した場合、または(段階に関係なく)コマンドファイルが指定した時間内に完了しない場合、バックアップは停止します。必要に応じてコマンドファイルが終了し、エラー情報がログに記録され、表示されます。

次の表に、リカバリポイント作成の段階を示します。

表 6-5 リカバリポイント作成の段階

段階	説明
スナップショット作成前に実行	<p>バックアップの開始後、リカバリポイントが作成される前の段階です。この段階では、リカバリポイントの作成プロセスを準備するためのコマンドを実行できます。たとえば、ドライブを使用している実行中のアプリケーションを終了できます。</p> <p><b>メモ:</b> このオプションを使用する場合は、コマンドファイルにエラー修復機能が組み込まれていることを確認してください。コマンドファイルにエラー修復機能がないと、VSS 非対応データベースやリソース集約型アプリケーションなど、この段階で停止する必要があるサービスが、コンピュータで再起動されない可能性があります。コマンドファイルでエラーが発生すると、リカバリポイント作成プロセスがすぐに停止する場合があります。その場合、他のコマンドファイルは実行されません。</p> <p>p.36 の「<a href="#">Backup Exec System Recovery の使用方法</a>」を参照してください。</p>

段階	説明
スナップショット作成後に実行	<p>スナップショットが作成された後の段階です。この段階では、リカバリポイントの作成中にサービスがドライブに対して通常の処理を再開することを許可するコマンドを実行できます。</p> <p>データベースは一時的にバックアップ状態になりますが、スナップショットの作成は数秒で済みます。最小数のログファイルが作成されます。</p>
リカバリポイント作成後に実行	<p>リカバリポイントファイルが作成された後の段階です。この段階では、リカバリポイント自体を処理するコマンドを実行できます。たとえば、リカバリポイントをオフラインの場所にコピーできます。</p>

## ドライブベースのバックアップの詳細オプション

ドライブベースのバックアップを定義すると、次の詳細オプションを設定できます。

表 6-6 ドライブベースのバックアップの詳細オプション

オプション	説明
リカバリポイントを複数ファイルに分割して圧縮保存	<p>リカバリポイントを複数の小さいファイルに分割し、各ファイルの最大サイズ(MB)を指定します。</p> <p>たとえば、リカバリポイントをバックアップ先から ZIP ディスクにコピーする場合は、ZIP ディスクのサイズに従って最大ファイルサイズ 100 MB を指定します。</p>
SmartSector™ コピーの無効化	<p>SmartSector 技術を使用すると、データを含むハードディスクセクタのみがコピーされるため、コピー処理を高速化することができます。ただし、データの有無に関係なく、すべてのセクタを元のレイアウトのままコピーすることが望ましい場合もあります。</p> <p>使用セクタだけでなく未使用セクタもコピーできます。そのため、コピー処理に要する時間が長くなり、リカバリポイントのサイズが大きくなります。</p>
コピー中は不良セクタを無視	<p>ハードディスクに不良セクタがある場合でも、バックアップを実行できます。ほとんどの場合、ドライブに不良セクタはありませんが、ハードディスクの老朽化とともに問題が発生する可能性は高まります。</p>

オプション	説明
<p>VSS の完全バックアップの実行</p>	<p>Microsoft Exchange Server 2003 または Microsoft SQL のような VSS 対応アプリケーションに使用されます。</p> <p>このオプションでは次の操作が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ VSS ストレージの完全バックアップを実行する。</li> <li>■ 自身のトランザクションログを確認するために VSS 要求を送信する。</li> </ul> <p>VSS は、どのトランザクションがデータベースに対してすでにコミットされているかを判断し、それらのトランザクションを切り捨てます。特に、トランザクションログを切り捨てると、ファイルサイズを処理しやすいように保ち、ファイルが使うハードディスクドライブの容量を制限するのに役立ちます。</p> <p>このオプションを選択しない場合、バックアップは VSS ストレージでそのまま行われます。ただし、VSS はバックアップ後、自動的にトランザクションログを切り捨てません。</p> <p><b>メモ:</b> このオプションは Symantec Recovery Disk の [コンピュータをバックアップ] 機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。</p>
<p>パスワードを使用する</p>	<p>リカバリポイントの作成時に、リカバリポイントにパスワードを設定します。パスワードには標準文字列を含めることができます。パスワードには、拡張文字列や記号を含めることができません。ASCII で文字コードの値が 128 以下になる文字を使用してください。</p> <p>バックアップを復元するとき、またはリカバリポイントの内容を表示するときに、このパスワードの入力を求められます。</p>
<p>暗号化を使用</p>	<p>リカバリポイントデータを暗号化して、リカバリポイントをさらに強力で保護します。</p> <p>次の暗号化レベルから選んでください:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 標準 (8 文字以上のパスワード)</li> <li>■ 中 (16 文字以上のパスワード)</li> <li>■ 高 (32 文字以上のパスワード)</li> </ul>

## バックアップの詳細オプションの編集

最初にバックアップを定義したときに選択した詳細オプションは、バックアップを定義した後でも編集できます。

### バックアップの詳細オプションを編集する方法

- 1 [ホーム]ページまたは[タスク]ページで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択し、[設定を編集]をクリックします。
- 3 [次へ]を2回クリックします。
- 4 [詳細]をクリックします。
- 5 [詳細オプション]ダイアログボックスで変更を行い、[OK]をクリックします。  
p.74の「[ドライブベースのバックアップの詳細オプション](#)」を参照してください。
- 6 [次へ]を3回クリックし、[終了]をクリックします。

## リカバリポイントの暗号化について

Advanced Encryption Standard (AES) により、作成またはアーカイブするリカバリポイントを暗号化して、データのセキュリティを強化することができます。ネットワーク上に保存しているリカバリポイントを、権限のないユーザーのアクセスや使用から保護する場合、暗号化を使用する必要があります。

以前のバージョンの Symantec LiveState Recovery または Backup Exec System Recovery で作成されたリカバリポイントを暗号化することもできます。ただし、暗号化されたリカバリポイントファイルは、現在のバージョンでしか読み出せなくなります。

Recovery Point Browser からのファイルのプロパティの表示によってリカバリポイントの暗号化レベルをいつでも確認できます。

暗号化レベルには、128 ビット、192 ビット、256 ビットの 3 つがあります。ビット数が高いほど長いパスワードが使用され、データのセキュリティが高くなります。

次の表に、ビット数に対応するパスワードの文字数を示します。

表 6-7 パスワードの文字数

ビット数(暗号化レベル)	パスワードの文字数
128(標準)	8 文字以上
192(中レベル)	16 文字以上
256(高レベル)	32 文字以上

正しいパスワードを入力しなければ、暗号化されたリカバリポイントに対してアクセスまたは復元を行うことはできません。

---

**警告:** パスワードは安全な場所に保管してください。パスワードは、大文字と小文字を区別します。パスワードで暗号化されたリカバリポイントに対してアクセスまたは復元を行う場合、**Backup Exec System Recovery** によってパスワードの入力を求められるため、大文字と小文字を区別して入力します。正しいパスワードを入力しなかった場合、またはパスワードを忘れた場合は、リカバリポイントを開くことができません。

シマンテック社のテクニカルサポートでは暗号化されたリカバリポイントを開くことができません。

---

暗号化レベルを高く設定するだけでなく、パスワードの形式を複雑にすることで、データのセキュリティを高めることができます。

適切なセキュリティを確保するには、以下のルールに従ってパスワードを作成してください。

- 同じ文字を続けない(例: BBB、88)
- 一般的な単語を使用しない
- 少なくとも 1 つの数字を含める
- 大文字と小文字を混合する
- 少なくとも 1 つの特殊記号 ({}[],.<>,:;"'/?/¥`~!@#\$\$%^&\*()\_+=) を含める
- 定期的に変更する

## リカバリポイントの整合性の検証

バックアップ定義ウィザードの[オプション]ページで[作成後のリカバリポイントを検証]オプションを選択した場合、次のことが行われます。

- **Backup Exec System Recovery** によって、リカバリポイントを構成するすべてのファイルを開くことができるかどうかを検証されます。
- また、リカバリポイントの内部データ構造が、利用できるデータに適合しているかどうかもチェックされます。

作成時に圧縮レベルを選択した場合は、リカバリポイントを元のファイルと同じデータ量に正しく圧縮解除できるかどうかもチェックされます。

---

**メモ:** [作成後のリカバリポイントを検証]オプションを使用すると、リカバリポイントの作成に 2 倍の時間がかかります。

---

必要に応じて、バックアップの作成時にリカバリポイントの整合性を自動的に検証することもできます。

p.74 の「[ドライブベースのバックアップの詳細オプション](#)」を参照してください。

#### リカバリポイントの整合性を検証する方法

- 1 [ツール] ページで、[Recovery Point Browser を実行] をクリックします。
- 2 リカバリポイントを選択し、[OK] をクリックします。
- 3 Recovery Point Browser のツリーパネルで、リカバリポイントを選択します。  
たとえば、C\_Drive001.v2i などを選択します。
- 4 ファイルメニューで、[リカバリポイントの検証] をクリックします。  
[リカバリポイントを検証] オプションを利用できない場合は、リカバリポイントのマウントを解除する必要があります。リカバリポイントを右クリックして、[リカバリポイントのマウント解除] をクリックします。
- 5 検証が完了したら、[OK] をクリックします。

#### バックアップの進行状況の表示

実行中のバックアップの進行状況を表示して、バックアップが終了するまでの残り時間を確認できます。

#### バックアップの進行状況を表示する方法

- ◆ バックアップの実行中に、表示メニューで[進行状況とパフォーマンス] をクリックします。

## ドライブベースのバックアップの圧縮レベル

リカバリポイントの作成中、バックアップしているドライブに保存されているファイルの種類によって、圧縮結果が異なる場合があります。

次の表に、利用可能な圧縮レベルを示します。

表 6-8 圧縮レベル

圧縮レベル	説明
なし	空き容量が十分にある場合に使用します。ただし、バックアップの保存先がアクセスの多いネットワークドライブである場合には、高い圧縮レベルを使用した方が圧縮しない場合よりもネットワークを介して書き込むデータの量が少なくなるため、短時間で処理できます。

圧縮レベル	説明
標準(推奨)	低い圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 40% 圧縮します。これがデフォルトの設定です。
中	中程度の圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 45% 圧縮します。
高	高い圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 50% 圧縮します。リカバリポイントの作成に最も時間がかかります。  高い圧縮率でのリカバリポイントの作成には、通常よりも CPU に高い負荷がかかる場合があります。コンピュータ上でのその他の処理も遅くなる場合があります。その場合は、Backup Exec System Recovery の動作速度を調整することによって、同時に実行する他のリソース集約型アプリケーションのパフォーマンスを向上させることができます。

## Backup Exec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行

ワンタイムバックアップを使用すると、Backup Exec System Recovery から単体リカバリポイントを作成するバックアップをすばやく定義して実行できます。ワンタイムバックアップウィザードを使用して、バックアップを定義します。ウィザードが完了するとバックアップが実行されます。バックアップの定義は保存されず、後で使用することはできません。単体リカバリポイントは、後で使用できます。

この機能は、重要なイベントの前にすばやくコンピュータまたは特定のドライブをバックアップする必要がある場合に役立ちます。たとえば、新しいソフトウェアをインストールする前に、ワンタイムバックアップを実行できます。また、新しいコンピュータセキュリティの脅威について学習する際にも実行できます。

Symantec Recovery Disk を使用して、ワンタイムのコールドバックアップを作成することもできます。

p.80 の「Symantec Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について」を参照してください。

### Backup Exec System Recovery からワンタイムバックアップを実行する方法

- 1 [タスク] ページで、[ワンタイムバックアップ] をクリックします。
- 2 [次へ] をクリックします。
- 3 バックアップするドライブを 1 つ以上選択し、[次へ] をクリックします。

- 4 [関連するドライブ]ダイアログボックスが表示されたら、適切なオプションを設定し、次に[次へ]をクリックします。それ以外の場合は次の手順にスキップします。  
p.66の「[関連するドライブ]オプション」を参照してください。
- 5 [バックアップ先]パネルで、適切なオプションを選択してください。  
p.68の「バックアップ先のオプション」を参照してください。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [オプション]パネルで適切なオプションを選択します。  
p.68の「リカバリポイントのオプション」を参照してください。
- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 必要に応じて、リカバリポイントの作成中に段階的に実行するコマンドファイルをリストから選択します。次に、停止する前に実行するコマンドの実行時間(秒)を指定します。  
  
コマンドファイルを **CommandFiles** フォルダに追加した場合は、[戻る]をクリックしてから[次へ]をクリックして、各段階のリストのファイルを確認する必要があります。  
p.72の「バックアップ中のコマンドファイルの実行について」を参照してください。
- 10 [次へ]をクリックします。
- 11 [終了]をクリックして、バックアップを実行します。

## Symantec Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について

有効なライセンスキーがあれば、Symantec Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]という新機能を使用して、単体リカバリポイントを作成できます。これはコールドバックアップまたはオフラインバックアップとも呼ばれ、**Backup Exec System Recovery** やそのエージェントをインストールしなくてもパーティションのリカバリポイントを作成できます。

コールドバックアップでは、バックアップが行われるときにすべてのファイルが閉じられます。デスクトップまたはサーバーで更新中またはアクセス中である可能性があるデータは、コピーしません。コールドバックアップは、特にデータベースで役立ちます。バックアップ中は、ファイルの書き込みやアクセスが全く行われないので、完全なリカバリポイントが取得されます。

また、次のいずれかに該当する場合、Symantec Recovery Disk CD を使用してリカバリポイントを作成することもできます。

- 一定レベルの破損により、コンピュータ上で **Windows** を起動できない。
- **Backup Exec System Recovery** が、**Windows** オペレーティングシステムで実行中に正常に機能しない。



- 修復する前に、損傷したシステム状態のバックアップをとっておきたい。たとえば、サーバーまたはデスクトップの損傷が重大な場合、Symantec Recovery Disk CD を使ってシステムに残っているものをバックアップすることができます。そして単体リカバリポイントを復元した後で、修復できるものを修復します。

---

**メモ:** Symantec Recovery Disk を使用して作成したリカバリポイントは、Restore Anyware を使用して異なるハードウェアに復元されます。

---

Symantec Recovery Disk CD からバックアップを作成する場合、次のシナリオに限り、有効なライセンスキーを要求されます。

- Backup Exec System Recovery がインストールされていないコンピュータのバックアップを作成するために、Symantec Recovery Disk CD のオリジナルの出荷版を使用する場合。
- Symantec Recovery Disk のオリジナルの出荷版を使用してバックアップしようとしているコンピュータには、Backup Exec System Recovery がインストールされているがライセンスは付与されていない場合。
- ライセンスのない Backup Exec System Recovery (60 日間評価版) をインストールしたコンピュータで、カスタム Symantec Recovery Disk CD を作成する場合。その場合は、カスタム Symantec Recovery Disk CD を使って、Backup Exec System Recovery をインストールしていないコンピュータのバックアップを作成することができます。  
p.31 の「[カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成](#)」を参照してください。
- カスタマイズした Symantec Recovery Disk CD を作成した時点で、ライセンスキーの追加を選択しなかった場合。

## Symantec Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行

有効なライセンスキーがあれば、Symantec Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用して、単体リカバリポイントを作成できます。これはコールドバックアップまたはオフラインバックアップとも呼ばれ、Backup Exec System Recovery やそのエージェントをインストールしなくてもパーティションのリカバリポイントを作成できます。

### Symantec Recovery Disk からワンタイムバックアップを実行する方法

- 1 USB デバイス (外付けハードディスクドライブなど) にリカバリポイントを保存する場合、まずデバイスを接続します。
- 2 バックアップするコンピュータで Symantec Recovery Disk CD を起動します。  
p.178 の「[Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動](#)」を参照してください。
- 3 [ホーム] パネルで、[コンピュータをバックアップ] をクリックし、[次へ] をクリックします。

- 4 メッセージが表示されたら、有効なライセンスキーを入力し、[次へ]をクリックします。
- 5 バックアップするドライブを1つ以上選択し、[次へ]をクリックします。
- 6 [バックアップ先]パネルで、必要なオプションを設定し、[次へ]をクリックします。

[フォルダ]フィールド

単体リカバリポイントを保存する場所を参照して、指定できます。

[ネットワークドライブの割り当て]

リカバリポイントを保存するコンピュータのUNCパスを使用して、ネットワークドライブをマッピングできます。

たとえば、`¥¥computer_name¥share_name` や `¥¥IP_address¥share_name` のように入力します。

[リカバリポイントファイル名]フィールド

リカバリポイントのファイル名を編集できます。これをするには、ドライブを選択し、[名前の変更]をクリックし、新しいファイル名を入力し、そして次に[OK]をクリックしてください。

7 [オプション]パネルで、リカバリポイントの必要な圧縮レベルを設定します。

なし	空き容量が十分にある場合に使用します。ただし、バックアップの保存先がアクセスの多いネットワークドライブである場合には、高い圧縮レベルを使用した方が圧縮しない場合よりもネットワークを介して書き込むデータの量が少なくなるため、短時間で処理できます。
標準 (推奨)	低い圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 <b>40%</b> 圧縮します。これがデフォルトの設定です。
中	中程度の圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 <b>45%</b> 圧縮します。
高	高い圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 <b>50%</b> 圧縮します。リカバリポイントの作成に最も時間がかかります。  高い圧縮率でのリカバリポイントの作成には、通常よりも CPU に高い負荷がかかる場合があります。コンピュータ上でのその他の処理も遅くなる場合があります。その場合は、 <b>Backup Exec System Recovery</b> の動作速度を調整することによって、同時に実行する他のリソース集約型アプリケーションのパフォーマンスを向上させることができます。

8 リカバリポイントの作成後に、リカバリポイントが有効かどうかを検証する場合は、[作成後のリカバリポイントを検証]を選択します。

9 [説明]テキストボックスに、リカバリポイントと関連付ける説明を入力します。

10 [詳細]をクリックします。

11 [詳細オプション]パネルで、必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

複数ファイルに分割してアーカイブ	リカバリポイントを複数の小さいファイルに分割し、各ファイルの最大サイズ (MB) を指定できます。  たとえば、リカバリポイントをバックアップ先から ZIP ディスクにコピーする場合は、ZIP ディスクのサイズに従って最大ファイルサイズ <b>100 MB</b> を指定します。
------------------	--

SmartSector コピーの無効化

SmartSector 技術を使用すると、データを含むハードディスクセクタのみがコピーされるため、コピー処理を高速化することができます。ただし、データの有無に関係なく、すべてのセクタを元のレイアウトのままコピーすることが望ましい場合もあります。

使用セクタだけでなく未使用セクタもコピーできます。そのため、コピー処理に要する時間が長くなり、リカバリポイントのサイズが大きくなります。

コピー中には不良セクタを無視

ハードディスクに不良セクタがある場合でも、バックアップを実行できます。ほとんどの場合、ドライブに不良セクタはありませんが、ハードディスクの老朽化とともに問題が発生する可能性は高まります。

パスワードを使用する

リカバリポイントの作成時に、リカバリポイントにパスワードを設定します。パスワードには標準文字列を含めることができます。パスワードには、拡張文字列や記号を含めることができません。ASCIIで文字コードの値が128以下になる文字を使用してください。

バックアップを復元するとき、またはリカバリポイントの内容を表示するときに、このパスワードの入力を求められます。

暗号化を使用

リカバリポイントデータを暗号化して、リカバリポイントをさらに強力に保護します。

次の暗号化レベルから選んでください:

- 標準(8文字以上のパスワード)
- 中(16文字以上のパスワード)
- 高(32文字以上のパスワード)

12 [次へ]をクリックします。

13 [終了]をクリックして、バックアップを実行します。

14 バックアップが終了したら、[閉じる]をクリックして Symantec Recovery Disk のメインウィンドウに戻ります。

## オフサイトコピーについて

セカンダリハードディスクへのデータのバックアップは、情報資産の保護への重要な第1歩です。ただし、データの安全性を確保するには、オフサイトコピーを使用します。この機能によって、可搬ストレージデバイス、ネットワーク上のリモートサーバー、リモートFTPサーバーのいずれかに最新の完全なリカバリポイントをコピーします。

採用する方法にかかわらず、リカバリポイントのコピーを離れた場所に保存することは、万が一オフィスにアクセスできなくなった場合に備え不可欠な冗長性を保持することになります。オフサイトコピーによって、リモートコピーが確保され、データ保護が倍に強化されます。

p.85の「[オフサイトコピーの仕組み](#)」を参照してください。

p.86の「[オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について](#)」を参照してください。

p.88の「[オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について](#)」を参照してください。

p.88の「[オフサイトコピー先としてのFTPサーバーの使用について](#)」を参照してください。

## オフサイトコピーの仕組み

新しいドライブベースのバックアップジョブを定義する場合は、オフサイトコピーを有効にして、設定します。または、既存のバックアップジョブを編集することにより、オフサイトコピーを有効にすることができます。

オフサイトコピーを有効にする場合は、オフサイトコピー先を2つまで指定します。バックアップジョブによるリカバリポイントの作成が終了すると、オフサイトコピーによって少なくとも1つのオフサイトコピー先が利用可能かどうか検証が行われます。続いて、新しいリカバリポイントがオフサイトコピー先にコピーされます。

最新のリカバリポイントが最初にコピーされ、続いて次に新しいリカバリポイントがコピーされます。2つのオフサイトコピー先を設定している場合は、オフサイトコピーによって、最初に追加されたコピー先にリカバリポイントがコピーされます。あるオフサイトコピー先が利用できない場合、2つ目のコピー先があれば、オフサイトコピーはそのコピー先にリカバリポイントのコピーを試みます。どちらのコピー先も利用できない場合、オフサイトコピーは次にオフサイトコピー先が利用可能になった時点でリカバリポイントのコピーします。

たとえば、バックアップジョブが午後6時に実行されるように設定し、オフサイトコピー先として外部ドライブを設定したとします。ただし、午後5時30分に退社するときには、安全のためにドライブを持ち出しています。バックアップジョブが午後6時20分に完了すると、オフサイトコピー先ドライブが利用できずコピー処理が中止されたことがBackup Exec System Recoveryによって検出されます。翌朝、ドライブをコンピュータに接続し直しま

す。Backup Exec System Recovery によってオフサイトコピー先ドライブの存在が検出され、自動的にリカバリポイントのコピーが開始されます。

オフサイトコピーはシステムリソースをわずかしか使用しないように設計されているため、コピー処理はバックグラウンドで実行されます。この機能を使用すると、システムリソースにほとんどまたはまったく影響を与えずに、コンピュータで作業を続けることができます。

オフサイトコピー先のディスク領域が不足すると、オフサイトコピーによって最も古いリカバリポイントが識別されて削除され、最新のリカバリポイント用の領域が確保されます。その後、オフサイトコピー先に現在のリカバリポイントがコピーされます。

p.86の「[オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について](#)」を参照してください。

p.88の「[オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について](#)」を参照してください。

p.88の「[オフサイトコピー先としてのFTPサーバーの使用について](#)」を参照してください。

p.64の「[ドライブベースのバックアップを定義する方法](#)」を参照してください。

p.99の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

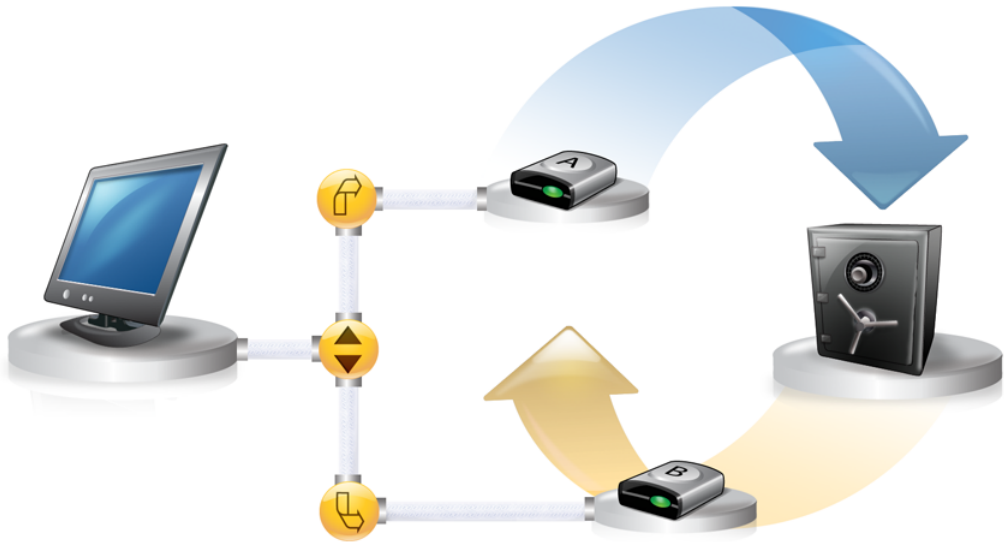
## オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について

外部ドライブをオフサイトコピー先として使用します。この方法を使用すると、オフィスを離れる際にデータのコピーを持ち出すことができます。2つの外付けハードディスクドライブを使用することで、オンサイトとオフサイトの両方で最新のデータのコピーを確実に保存しておくことができます。

たとえば、月曜日の朝に、システムドライブの新しいバックアップジョブを定義するとします。バックアップジョブの種類としてリカバリポイントセットを選択します。外部ドライブ(A)を1番目のオフサイトコピー先として設定し、別の外部ドライブ(B)を2番目のオフサイトコピー先として設定します。週末を除く毎日午前0時にバックアップジョブを実行するようにスケジュールを設定します。また、リカバリポイントの暗号化を有効にし、持ち出すデータを権限のないユーザーのアクセスから保護します。

p.76の「[リカバリポイントの暗号化について](#)」を参照してください。

月曜日の夜にオフィスを離れる前に、ドライブAを接続し、ドライブBを持ち帰ります。



火曜日の朝には、月曜日のベースリカバリポイントがドライブ A に正常にコピーされています。その日の終わりに、ドライブ A を取り外して安全のために持ち帰ります。

水曜日の朝には、ドライブ B をオフィスに持って来ます。ドライブ B を接続すると、Backup Exec System Recovery ではドライブ B がオフサイトコピー先であることが検出されます。その後、Backup Exec System Recovery によって自動的に月曜日の夜のベースリカバリポイントと火曜日の夜の増分リカバリポイントのコピーが開始されます。水曜日の終わりには、ドライブ B を持ち帰り、ドライブ A と一緒に安全な場所に保管します。

これで、2カ所の物理的に異なる場所に、リカバリポイントの複数のコピーが保存されます。すなわち、オフィスのバックアップ先に保存された元のリカバリポイントと、オフサイトコピー先ドライブに保存された同じリカバリポイントのコピーです。オフサイトコピー先ドライブは、自宅の安全な場所に保管されます。

次の木曜日の朝、ドライブ A をオフィスに持って行き接続します。火曜日と水曜日の夜のリカバリポイントが自動的にドライブ A にコピーされます。

---

**メモ:** ニックネームを各ドライブに付けることができる、外部ドライブの名付け機能の使用を検討してください。その後、一致する物理的なラベルを各外部ドライブに付けて、ドライブ交換のタスクを管理しやすくします。

---

p.45 の「外部ドライブでのニックネームの使用」を参照してください。

ドライブ A または B のいずれかを接続するたびに、最新のリカバリポイントがドライブに追加されます。この方法により、元のバックアップ先ドライブに障害が発生したり修復不可能になった場合に、複数のリカバリポイントを使ってコンピュータを修復することができます。

オフサイトコピー先として外部ドライブを使用すると、バックアップデータのコピーが2カ所の物理的に異なる場所に確実に保存されることになります。

## オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について

オフサイトコピー先として、ローカルエリアネットワークサーバーを指定することもできます。使用するサーバーにアクセスできる必要があります。ローカルドライブをサーバーにマッピングするか、または有効な UNC パスを指定する必要があります。

たとえば、1 番目のオフサイトコピー先として、ローカルの外部ドライブを設定するとします。次に、そのオフィスとは別の物理的な場所にあるサーバーを特定します。2 番目のオフサイトコピー先としてそのリモートサーバーを追加します。バックアップが発生すると、リカバリポイントは最初に外付けハードディスクドライブにコピーされ、次にリモートサーバーにコピーされます。

リモートサーバーが一定期間利用不能になると、最後の接続以降に作成されたすべてのリカバリポイントがオフサイトコピーによってコピーされます。利用可能なすべてのリカバリポイントを保存する領域がない場合は、オフサイトコピーによって最も古いリカバリポイントがネットワークサーバーから削除され、最新のリカバリポイント用の領域が確保されます。



## オフサイトコピー先としての FTP サーバーの使用について

オフサイトコピー先としてのネットワークパスの使用は、サーバーの使用に似ています。FTP サーバーへの有効な FTP パスを指定する必要があります。



また、この方法が正しく動作するためには、**Backup Exec System Recovery** に正確な **FTP** 接続情報を入力する必要があります。オフサイトコピーが正しく設定されている場合、オフサイトコピーによって **FTP** サーバー上の指定したディレクトリにリカバリポイントがコピーされます。サーバーが一定期間利用不能になると、最後の接続以降に作成されたすべてのリカバリポイントがオフサイトコピーによってコピーされます。利用可能なすべてのリカバリポイントを保存する領域がない場合は、オフサイトコピーによって最も古いリカバリポイントまたはリカバリポイントセットが **FTP** サーバーから削除され、最新のリカバリポイント用の領域が確保されます。

p.46 の「[オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定](#)」を参照してください。





# ファイルとフォルダのバックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- [ファイルおよびフォルダのバックアップの定義](#)
- [ファイルおよびフォルダのバックアップからデフォルトで除外されるフォルダについて](#)

## ファイルおよびフォルダのバックアップの定義

ファイルおよびフォルダのバックアップを定義して実行すると、バックアップするファイルおよびフォルダのコピーが作成されます。コピーは、圧縮形式に変換され、指定した保存場所にあるサブフォルダに保存されます。保存場所は、デフォルトでは、リカバリポイントの保存に使用されているバックアップ先です。

### ファイルおよびフォルダのバックアップを定義する方法

- 1 [ホーム]ページで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理]ウィンドウで、[新しく定義]をクリックします。  
バックアップをまだ定義していない場合は、[簡単セットアップ]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [選択したファイルとフォルダをバックアップ]を選択し、[次へ]をクリックします。

- 4 バックアップに含めるファイルおよびフォルダを選択し、[次へ]をクリックします。

ファイルの種類を選択すると、**Backup Exec System Recovery** は、バックアップ対象のファイルを検索してバックアップ対象にします。ファイルの種類が、あらかじめ定義されたリストに含まれていない場合は、[ファイルの種類を追加]をクリックします。フォルダまたは個々のファイルを手動で選択することもできます。

---

**メモ:** Windows Vista を除くすべてのバージョンの Windows のマイドキュメントフォルダには、デフォルトで、マイピクチャとマイミュージックの 2 つのサブフォルダがあります。これらのフォルダには、別の場所にあるフォルダへのショートカットだけが含まれ、実際のファイルは含まれません。そのため、マイドキュメントとすべてのサブフォルダをバックアップ対象に含めても、画像ファイルと音楽ファイルはバックアップされません。

画像ファイルおよび音楽ファイルをバックアップするには、ファイルが実際に保存されているフォルダをバックアップ対象にしてください。Windows Vista の場合、これらのフォルダは、ドキュメント(以前のマイドキュメント)と同じレベルにあります。

---

- 5 [名前]フィールドに、新しいバックアップの名前を入力します。
- 6 [説明(オプション)]フィールドに、新しいバックアップの説明を入力します。
- 7 [参照]をクリックし、バックアップデータを保存するフォルダを検索するか、またはデフォルトの場所に従います。

---

**メモ:** バックアップ先として、暗号化されたフォルダは使用できません。他のユーザーのアクセスを防止するためにバックアップデータを暗号化する場合、次の手順を参照してください。

---

- 8 詳細オプションを追加または編集するために、[詳細]をクリックし、次のいずれかを実行してください:
- [パスワードを使用する]をクリックし、パスワードを入力します。  
パスワードには標準文字列を使用します。拡張文字列や記号を使用することはできません。バックアップの復元または内容の表示を行う前に、このパスワードを入力する必要があります。
  - セキュリティを強化する場合は、[AES暗号化を使用]をクリックして、ファイルデータを暗号化します。  
また、必要な暗号化のレベルを指定するのにドロップダウンメニューを使うこともできます。
  - [除外]グループボックスで、バックアップに含めるフォルダのチェックマークをはずします。

通常、一覧表示されているフォルダは、個人のファイルまたはフォルダを保存するためには使用されません。システムドライブ (通常はCドライブ) のドライブベースのバックアップを定義して実行すると、これらのフォルダがバックアップされません。

p.93の「ファイルおよびフォルダのバックアップからデフォルトで除外されるフォルダについて」を参照してください。

- 9 [OK]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 10 バックアップをスケジュールに従って自動的に実行する場合は、[スケジュール]をクリックします。  
 手動で開始した場合にのみバックアップを実行する場合は、[スケジュール]のチェックマークをはずします。
- 11 開始時刻を入力し、バックアップを実行する曜日を選択します。
- 12 特定のイベントに対応してバックアップを開始するイベントトリガの設定など、スケジュールの詳細オプションを設定するには、[詳細]をクリックし、必要なオプションを設定します。  
 p.71の表6-4を参照してください。
- 13 [次へ]をクリックして、選択したバックアップオプションを確認します。
- 14 バックアップに含めるファイルの総数とサイズを確認するには、[プレビュー]をクリックします。

---

**メモ:** ファイルおよびフォルダのバックアップに含まれるデータ量によっては、プレビュー処理に数分かかる場合があります。

---

- 15 新しいバックアップをすぐ実行する場合は、[今すぐバックアップを実行]をクリックし、[終了]をクリックします。

## ファイルおよびフォルダのバックアップからデフォルトで除外されるフォルダについて

次のフォルダおよびその内容は、ファイルおよびフォルダのバックアップから自動的に除外されます。

- Windows フォルダ
- Program Files フォルダ
- 一時ファイルのフォルダ
- インターネット一時ファイルのフォルダ

通常、これらのフォルダは、個人のファイルまたはフォルダを保存するためには使用されません。ただし、システムドライブ (通常はCドライブ) のドライブベースのバックアップを定義して実行すると、これらのフォルダがバックアップされます。

p.91 の「[ファイルおよびフォルダのバックアップの定義](#)」を参照してください。

ファイルおよびフォルダのバックアップを定義する際に、これらのフォルダを含めることができます。

# バックアップジョブの実行と管理

この章では以下の項目について説明しています。

- 既存のバックアップジョブを今すぐ実行
- オプションを指定してバックアップを実行
- バックアップ速度の調整
- タスクの停止
- バックアップの正常終了の検証
- バックアップ設定の編集
- イベント起動バックアップの有効化
- バックアップスケジュールの編集
- バックアップジョブの無効化
- バックアップジョブの削除
- コンピュータをバックアップできるユーザーの追加

## 既存のバックアップジョブを今すぐ実行

これは、新しい製品をインストールする前に、インストールに問題が発生した場合に備えて、最新のリカバリポイントがあることを確認する場合に特に役立ちます。また、多数のファイルを変更した場合に、スケジュールされた通常のバックアップを待たずに作業をバックアップする場合にも便利です。

既存のバックアップはいつでも実行できます。

---

**メモ:** 必要に応じて、定義したバックアップを使用せずに、すばやく特定のドライブのバックアップを実行できます。

p.79の「[Backup Exec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。

新しいソフトウェアプログラムのインストールなどのイベントがコンピュータで発生したときに、自動的にバックアップを実行するように Backup Exec System Recovery を設定できます。

p.100の「[イベント起動バックアップの有効化](#)」を参照してください。

バックアップを実行する際に、実行中のパーティション作成ソフトウェア (Norton PartitionMagic など) がある場合は、すべて終了する必要があります。また、バックアップ中はディスクデフラグソフトウェアを実行しないでください。

バックアップをスケジュールに従って自動的に実行するように設定することもできます。

p.101の「[バックアップスケジュールの編集](#)」を参照してください。

---

#### システムトレイから既存のバックアップを今すぐ実行する方法

- 1 Windows デスクトップで、Backup Exec System Recovery のシステムトレイアイコンを右クリックします。
- 2 [今すぐバックアップを実行]をクリックします。
- 3 バックアップジョブをクリックして、バックアップを開始します。  
メニューに[ジョブはありません]と表示された場合は、Backup Exec System Recovery を起動してバックアップを定義します。

#### Backup Exec System Recovery 内から既存のバックアップを今すぐ実行する方法

- 1 [ホーム]ページで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 リストからバックアップを選択し、[今すぐ実行]をクリックします。

## オプションを指定してバックアップを実行

既存のドライブベースのバックアップを迅速に実行し、そのバックアップで通常とは別の種類のリカバリポイントを作成する場合は、「オプションを指定してバックアップを実行」機能を使用します。

これは、既存のバックアップジョブを実行した場合に、作成されるリカバリポイントが、最後にバックアップジョブを実行したときに作成されたリカバリポイントの種類によって決定されるという点で固有のオプションです。通常とは別の種類のリカバリポイントを作成するにはこのオプションを使用します。



---

**メモ:** このオプションを使用しても、定義済みのバックアップの設定は変更されません。この処理を行うには、バックアップを開いてその設定を手動で編集する必要があります。

---

p.101 の「[バックアップスケジュールの編集](#)」を参照してください。

p.99 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

#### オプションを指定してバックアップを実行する方法

- 1 [ホーム] ページで、[バックアップの実行または管理] をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理] ウィンドウで、実行するドライブベースのバックアップジョブを選択します。
- 3 [詳細]、[オプションを指定してバックアップを実行] の順にクリックします。
- 4 [オプションを指定してバックアップを実行] ページで望ましいオプションを選択してください。

---

**メモ:** バックアップの現在の状態によって、1 つまたは複数のオプションが無効になっている場合があります。たとえば、まだバックアップを実行していない場合は、最初のオプション[最新変更分の増分リカバリポイント]を選択できません。これは、ベースリカバリポイントがまだ作成されていないためです。

---

p.97 の「[バックアップオプション](#)」を参照してください。

- 5 [OK] をクリックして、バックアップジョブを実行し、選択した種類のリカバリポイントを作成します。

## バックアップオプション

[最新変更分の増分リカバリポイント]、[新しいリカバリポイントセット]と[単体リカバリポイント]は利用可能な3つのオプションです。各オプションの種類は次の表に記述されています。

表 8-1 バックアップオプション

オプション	説明
最新変更分の増分リカバリポイント	バックアップですでにベースリカバリポイントを作成していて、最後のバックアップ以降にドライブに対して行われた変更のみ取得する場合は、このオプションを選択します。
新しいリカバリポイントセット	完全にリカバリポイントセットを新しく作成する場合は、このオプションを選択します。このオプションを選択すると、ベースリカバリポイントが作成されます。

オプション	説明
単体リカバリポイント	ドライブ全体の完全なスナップショットである単体リカバリポイントを作成するには、このオプションを選択します。  通常とは別のバックアップ保存場所を指定するには、[参照]をクリックします。

## バックアップ速度の調整

コンピュータの速度、搭載されているメモリ容量、バックアップ中に実行しているプログラムの数によっては、コンピュータの速度が低下する場合があります。

バックアップ実行によるコンピュータのパフォーマンスへの影響を手動で調整して、現在のニーズに合わせることができます。この機能は、コンピュータで作業しているときに、バックアッププロセスによって作業速度が低下するのを回避するために役立ちます。

### バックアップの速度を調整する方法

- 1 バックアップの実行中に、表示メニューで[進行状況とパフォーマンス]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
  - バックアップの速度を下げ、コンピュータの速度を上げる場合は、スライダを[低]の方へドラッグします。
  - バックアップをできるだけ早く終了する場合やコンピュータで大量の作業をしていない場合は、スライダを[高速]の方へドラッグします。
- 3 完了したら、[非表示]をクリックして[進行状況とパフォーマンス]ダイアログボックスを閉じます。

## タスクの停止

すでに開始されているリカバリポイントタスクや復元タスクを停止することができます。

### 現在のタスクを停止する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
  - ツールメニューで、[現在の操作をキャンセル]をクリックします。
  - ツールメニューで[進行状況とパフォーマンス]を選択し、[キャンセル操作]を選択します。
  - Windows のシステムトレイで Symantec Backup Exec System Recovery のトレイアイコンを右クリックして、[現在の操作をキャンセル]をクリックします。

## バックアップの正常終了の検証

バックアップが完了してから、[状態]ページでバックアップの正常終了を検証し、消失または破損したデータを修復できます。

[状態]ページには、コンピュータの各ドライブの状態に対応したスクロール可能なカレンダーが表示されます。このカレンダーを使用すると、バックアップを実行した日時やバックアップの種類をすばやく確認できます。また、今後のバックアップのスケジュールも確認できます。

p.124 の「[\[状態\]ページからのバックアップ保護の監視](#)」を参照してください。

---

**メモ:** ドライブベースのバックアップを定義する際に、作成したリカバリポイントを検証するオプションを選択してください。

バックアップするデータ量によっては、バックアップが完了するまでの所要時間が大幅に延びます。バックアップが完了すると、リカバリポイントが有効であることが確認できます。

---

p.77 の「[リカバリポイントの整合性の検証](#)」を参照してください。

### バックアップの正常終了を検証する方法

- 1 [状態]ページの[バックアップ]カレンダーで、バックアップを実行した日付にアイコンが表示されていることを確認します。
- 2 バックアップアイコンをマウスで指して、バックアップの状態を確認します。

## バックアップ設定の編集

既存のバックアップの設定を編集できます。[設定を編集]機能を使用すると、バックアップ定義ウィザードの主なページにアクセスできます。リカバリポイントの種類を変更するオプションを除く、すべての設定を編集できます。

### バックアップ設定を編集する方法

- 1 [ホーム]ページまたは[タスク]ページで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択します。
- 3 [設定を編集]をクリックします。
- 4 バックアップの設定を変更します。

p.64 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.91 の「[ファイルおよびフォルダのバックアップの定義](#)」を参照してください。

## イベント起動バックアップの有効化

Backup Exec System Recovery では、特定のイベントを検出して、そのイベントの発生時にバックアップを実行できます。

たとえば、新しいソフトウェアをインストールする際にコンピュータを保護するために、Backup Exec System Recovery で新しいソフトウェアのインストールを検出したときにバックアップを実行できます。コンピュータに悪影響を与える問題が発生した場合、このリカバリポイントを使用して、コンピュータをインストール前の状態に復元できます。

Backup Exec System Recovery を設定して、次のイベントが発生したときにバックアップを自動的に実行できます。

- アプリケーションのインストール
- 特定のアプリケーションの起動
- ユーザーの Windows へのログオン
- ユーザーの Windows からのログオフ
- ドライブに追加されたデータ量が指定した値 (MB) を超過した場合  
このオプションは、ファイルおよびフォルダのバックアップでは利用できません。

### イベント起動バックアップを有効にする方法

- 1 [ホーム] ページまたは [タスク] ページで、[バックアップの実行または管理] をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択し、[スケジュールを変更] をクリックします。
- 3 [イベントトリガ] の [全般] をクリックします。
- 4 検出するイベントを選択し、[OK] をクリックします。

## Symantec ThreatCon について

ThreatCon はシマンテック社のセキュリティの脅威早期警告システムです。シマンテック社が各種の脅威を確認すると、ThreatCon チームは脅威レベルを調整します。この調整によって、ユーザーおよびシステムに適切な警告が送信され、データおよびシステムが攻撃から保護されます。

選択したバックアップジョブに対して Symantec ThreatCon トリガを有効にすると、Backup Exec System Recovery によって脅威レベルの変更が検出されます。このとき、コンピュータはインターネットに接続されていなければなりません。脅威レベルが ThreatCon レベルに達するか超過すると、Symantec ThreatCon を有効にしたバックアップジョブが自動的に開始されます。これにより、コンピュータが最新の脅威によって影響を受けた場合にデータの修復に使用するリカバリポイントが作成されます。

---

**メモ:** コンピュータがオンラインでない場合、オンラインの脅威には影響されません。ただし、コンピュータをインターネットに接続している間中、コンピュータは脅威にさらされることになります。オンラインにする場合もオフラインにする場合も、Symantec ThreatCon を有効にしたり無効にしたりする必要はありません。Symantec ThreatCon は、オンラインの場合に機能し、オフラインの場合に機能しないだけです。

---

Symantec ThreatCon について詳しくは <http://www.symantec.com/ja/jp/index.jsp> を参照してください。

## バックアップスケジュールの編集

定義したバックアップのスケジュールプロパティを編集して、日時を調整できます。

### バックアップスケジュールを編集する方法

- 1 [ホーム] ページで、[バックアップの実行または管理] をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択します。
- 3 [スケジュールを変更] をクリックします。
- 4 スケジュールを変更して、[OK] をクリックします。

## バックアップジョブの無効化

バックアップを無効にして、後で再度有効にすることができます。バックアップを無効にした場合、スケジュールを定義していてもバックアップは実行されません。また、イベント起動のバックアップも実行されず、手動でバックアップを実行することもできません。

定義したバックアップは削除できます (リカバリポイントは削除できません)。

p.102 の「[バックアップジョブの削除](#)」を参照してください。

### バックアップジョブを無効にする方法

- 1 [ホーム] ページまたは [タスク] ページで、[バックアップの実行または管理] をクリックします。
- 2 無効にするバックアップを選択します。
- 3 タスクメニューで、[バックアップを無効にする] をクリックします。

バックアップを再度有効にするには、この手順を繰り返します。ただし、この場合は、[バックアップを無効にする] メニュー項目の代わりに [バックアップを有効にする] をクリックします。

## バックアップジョブの削除

不要になったバックアップジョブを削除できます。

バックアップジョブを削除しても、リカバリポイントまたはファイルおよびフォルダのバックアップデータは保存場所から削除されません。バックアップジョブのみが削除されます。

p.141 の「[リカバリポイントの保存場所の管理](#)」を参照してください。

### バックアップジョブを削除する方法

- 1 [ホーム] ページで、[バックアップの実行または管理] をクリックします。
- 2 1 つ以上のバックアップを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 [はい] をクリックします。

## コンピュータをバックアップできるユーザーの追加

セキュリティ設定ツールを使用して、コンピュータ上のどのユーザーが **Backup Exec System Recovery** の主な機能にアクセスし、設定できるかを制御することができます。

たとえば、**Windows** の制限付きアカウントのすべてのユーザーは、既存のバックアップジョブは実行できますが、新しいジョブを作成したり既存のジョブを編集したりすることはできません。しかしながら、セキュリティ設定ツールを使用すれば、制限付きユーザーアカウントに管理者権限を付与することができます。管理者権限を付与されたユーザーは、**Backup Exec System Recovery** への完全なアクセス権を持ち、バックアップジョブを作成、編集、削除、実行できるようになります。

---

**メモ:** デフォルトでは、すべてのユーザーが既存のバックアップジョブを実行できます。ただし、管理者アカウントのユーザーのみがバックアップジョブの作成、編集、削除を行うことができます。

---

### コンピュータをバックアップできるユーザーを追加する方法

- 1 **Windows** のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール] の順にクリックします。  
**Windows Vista** の場合は、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec]、[セキュリティ設定ツール] の順にクリックします。
- 2 [追加] をクリックします。
- 3 [選択するオブジェクト名を入力してください] フィールドで、追加するユーザーまたはグループの名前を入力します。
- 4 [OK] をクリックします。

- 5 ユーザーまたはグループを削除するには、ユーザーまたはグループを選択し、[削除]をクリックします。
- 6 [OK]をクリックして変更を反映し、セキュリティ設定ツールを閉じます。

**ユーザーまたはグループのアクセス権を設定する方法**

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。  
 Windows Vista と Windows 7 の場合は、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 [グループ名またはユーザー名]ボックスからユーザーまたはグループを選択します。
- 3 次のオプションを選択します。

権限	許可	拒否
フルコントロール	ユーザーまたはグループに、Backup Exec System Recovery のすべての機能への完全なアクセス権を付与する場合に選択します。ユーザーには、既存のジョブも含め、バックアップジョブを作成、編集、削除する権限が与えられます。	ユーザーまたはグループに対して、Backup Exec System Recovery の機能への管理者アクセス権を禁止する場合に選択します。既存のバックアップジョブは実行できますが、バックアップジョブの作成、編集、削除はできません。
状態のみ	ユーザーまたはグループに対して、Backup Exec System Recovery の機能への管理者アクセス権を禁止する場合に選択します。既存のバックアップジョブは実行できますが、バックアップジョブの作成、編集、削除はできません。	[状態のみ]を拒否した場合、ユーザーまたはグループは Backup Exec System Recovery のどの機能にもアクセスできません。

- 4 [OK]をクリックして変更を反映し、セキュリティ設定ツールを閉じます。





# お使いのコンピュータからリモートコンピュータをバックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- [お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ](#)
- [コンピューターリストへのコンピュータの追加](#)
- [Backup Exec System Recovery エージェントの配備](#)
- [Backup Exec System Recovery Agent の使用](#)
- [Windows のサービスツールを使った Backup Exec System Recovery Agent の管理について](#)
- [サービスを使用するためのベストプラクティスについて](#)
- [Backup Exec System Recovery へのアクセスの制御](#)

## お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ

Backup Exec System Recovery を使用すると、自宅や会社のネットワーク上にある別のコンピュータに接続して、バックアップを実行できます。必要な数だけコンピュータを管理できますが、同時に管理できるのは 1 台のみです。

---

**メモ:** ライセンスは、管理するコンピュータごとに購入する必要があります。評価期間の60日間だけ、エージェントをライセンスなしで配備できます。その後リモートコンピュータの管理を続行するには、ライセンスを購入してインストールする必要があります。**Symantec Global Store** で追加のライセンスを購入できます。次の **Web** サイトを参照してください:

<http://www.symantecstore.jp/index.asp>

---

まず、コンピュータの名前または IP アドレスをコンピュータリストに追加します。次に、**Backup Exec System Recovery Agent** をリモートコンピュータに配備します。エージェントがインストールされると、リモートコンピュータは自動的に再起動します。コンピュータが再起動したら、コンピュータに接続できます。接続すると、**Backup Exec System Recovery** 製品のインターフェースが、リモートコンピュータの状態に応じて変化します。いつでも管理対象を切り替えて、ローカルコンピュータを管理することができます。

## コンピュータリストへのコンピュータの追加

リモートコンピュータのドライブをバックアップするには、対象となるコンピュータをコンピュータリストに追加しておく必要があります。これによって、お使いのコンピュータとリストにあるその他のコンピュータをすばやく切り替えることができます。

### コンピュータリストにコンピュータを追加する方法

- 1 メニューバーで、[コンピュータ]、[追加]の順にクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
  - コンピュータの名前を入力する
  - コンピュータの IP アドレスを入力する  
ドメインではなくワークグループ環境で操作している場合は、[参照]ボタンを使って、管理するコンピュータの名前を選択して手動で指定する必要があります。
- 3 コンピュータの名前や IP アドレスがわからない場合は、[参照]をクリックして追加するコンピュータを検索し、[OK]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックし、コンピュータリストにコンピュータを追加します。

### ローカルコンピュータを追加する方法

- 1 **Backup Exec System Recovery** メニューバーで、[コンピュータ]、[ローカルコンピュータの追加]の順にクリックします。
- 2 [OK]をクリックします。

### コンピュータリストからコンピュータを削除する方法

- 1 Backup Exec System Recovery メニューバーで、[コンピュータ]、[リストの編集]の順にクリックします。
- 2 削除するリモートコンピュータを選択してマイナス(-)記号をクリックし、[OK]をクリックします。

---

**メモ:** コンピュータリストからコンピュータを削除しても、エージェントはコンピュータからアンインストールされません。オペレーティングシステムのアンインストールプログラムを実行する必要があります。

---

## Backup Exec System Recovery エージェントの配備

エージェント配備機能を使用して、コンピュータリスト上のコンピュータに Backup Exec System Recovery Agent を配備できます。エージェントのインストール後は、Backup Exec System Recovery から直接バックアップジョブを作成できるようになります。

---

**メモ:** Windows Vista ではセキュリティが強化されているため、Windows Vista に Backup Exec System Recovery Agent を配備するには、セキュリティ設定を変更する必要があります。エージェントを Windows Vista から別のコンピュータに配備しようとすると、同じ問題が発生します。製品 CD を使用して、対象のコンピュータにエージェントを手動でインストールできます。

---

---

**メモ:** インストール中にエージェント配備オプションの選択を解除した場合、この機能は利用できません。インストールを再び実行して[変更]オプションを選択することで、機能を有効にできます。

---

Symantec Recovery Disk でコンピュータの修復ウィザードまたは Recovery Point Browser を実行するには、コンピュータがメモリの最小要件を満たしている必要があります。

---

**メモ:** 製品の多言語バージョンをインストールする場合、Symantec Recovery Disk を実行するには 768 MB 以上のメインメモリが必要です。

---

コンピュータがワークグループ環境で設定されている場合、エージェントを配備する前にローカルコンピュータを準備します。

### ワークグループ環境のコンピュータにエージェントを配備する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]を右クリックして、[エクスプローラ]を選択します。
- 2 ツールメニューで、[フォルダ オプション]、[表示]の順にクリックします。
- 3 [表示]タブで、リストの最後までスクロールして、[簡易ファイルの共有を使用する]チェックボックスが選択されていないことを確認し、[OK]をクリックします。
- 4 Windows の[コントロール パネル]で、[Windows ファイアウォール]をクリックします。  
Windows Server 2008を実行している場合は、[設定の変更]をクリックする必要があります。  
ある場合もあります。
- 5 [例外]タブをクリックし、[ファイルとプリンタの共有]を選択して[OK]をクリックします。

---

**メモ:** エージェントのインストールを続行する前に、実行中のアプリケーションがあれば終了します。[再起動]チェックボックスにチェックマークを付けている場合、インストールウィザードの完了時に、コンピュータが自動的に再起動します。

---

### Backup Exec System Recovery Agent を配備する方法

- 1 Backup Exec System Recovery メニューバーで[コンピュータ]をクリックし、メニューからコンピュータを選択します。  
エージェントをインストールするコンピュータでの管理者権限が必要です。
- 2 [エージェントの配備]をクリックします。
- 3 [Backup Exec System Recovery Agent の配備]ダイアログボックスで、管理者ユーザー名 (または管理者権限を持つユーザーの名前) とパスワードを指定します。  
ワークグループ環境では、リモートコンピュータ名を指定する必要があります。IP アドレスを使用してコンピュータに正常に接続できている場合でも、IP アドレスでは指定できません。  
たとえば、「*RemoteComputerNameUserName*」のように入力します。
- 4 エージェントのインストールが完了したときにコンピュータを再起動する場合は、[終了後に再起動]をクリックします。

---

**メモ:** コンピュータが再起動するまで、バックアップは実行できません。再起動が実行される前に作業中のデータを保存するように、ユーザーに警告してください。

---

- 5 [OK]をクリックします。

## Backup Exec System Recovery エージェントを手動でインストールする方法

- 1 Backup Exec System Recovery 製品 CD をコンピュータのメディアドライブに挿入します。

インストールプログラムが自動的に起動します。

- 2 インストールプログラムが起動しない場合は、Windows のタスクバーで[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順に選択し、次のコマンドを入力して[OK]をクリックします。

```
<drive>:\autorun.exe
```

ここで、<drive> はメディアドライブのドライブ文字です。

Windows Vista で[ファイル名を指定して実行]オプションが表示されていない場合、次の操作を実行します。

- [スタート]ボタンを右クリックして、[プロパティ]を選択します。
- [[スタート]メニュー]タブで、[カスタマイズ]をクリックします。
- リストをスクロールして、[[ファイル名を指定して実行]コマンド]を選択します。
- [OK]をクリックします。

- 3 インストールプログラムの起動画面で[Backup Exec System Recovery のインストール]をクリックします。
- 4 [ようこそ]の画面で、[次へ]をクリックします。
- 5 ライセンス契約に目を通し、同意する場合は[使用許諾契約の条項に同意します]をクリックします。[次へ]をクリックします。
- 6 プログラムファイルのデフォルトのインストール先を変更する場合は、[変更]をクリックし、エージェントをインストールするフォルダを選択し、[OK]をクリックします。
- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [カスタム]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 9 [Backup Exec System Recovery Service]をクリックし、[この機能をローカルのハードディスクドライブにインストールします。]をクリックします。  
この機能はエージェントです。
- 10 他のすべての機能を[この機能を使用できないようにします。]に設定します。
- 11 [次へ]をクリックし、[インストール]をクリックします。

## Windows Server 2003 SP1 でのドメインユーザーに対する権限の付与

ドメイン内のユーザーがドメイン内の Windows Server 2003 SP1 をリモートで管理できるようにするためには、Symantec Backup Exec System Recovery を使ってサーバーを

リモートで管理するすべてのドメインユーザーに対して、サーバー管理者が権限を付与する必要があります。

#### Windows Server 2003 SP1 でドメインユーザーに権限を付与する方法

- 1 dcomcnfg.exe ツールを実行します。
- 2 [コンポーネントサービス]、[コンピュータ]、[マイコンピュータ]の順に移動します。
- 3 [マイコンピュータ]を右クリックして、[プロパティ]を選択します。
- 4 [COM セキュリティ]タブで、[起動とアクティブ化のアクセス許可]の[制限の編集]をクリックします。
- 5 [グループ名またはユーザー名]リストにドメインユーザーを追加し、適切な権限を付与します。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 [コンポーネントサービス]を閉じ、Symantec Backup Exec System Recovery サービスを再起動します。

## Backup Exec System Recovery Agent の使用

Backup Exec System Recovery Agent は、リモートコンピュータ上でデータのバックアップと復元を実際に行う隠れた「エンジン」です。Backup Exec System Recovery Agent はサービスとして機能するため、グラフィカルユーザーインターフェースはありません。

p.111の「[Windows のサービスツールを使った Backup Exec System Recovery Agent の管理について](#)」を参照してください。

p.116の「[Backup Exec System Recovery へのアクセスの制御](#)」を参照してください。

Backup Exec System Recovery Agent は、Windows のシステムトレイに表示されるトレイアイコンを使用して、現在の状態の表示や、一般タスクの実行を行います。たとえば、コンピュータに対して作成されたバックアップジョブの表示、Backup Exec System Recovery Agent への再接続、現在実行中のタスクのキャンセルなどを行うことができます。

保護する各コンピュータで製品 CD からエージェントをインストールすることによって、エージェントを手動でインストールできます。ただし、より効率的な方法として、Backup Exec System Recovery の[エージェントの配備]機能を使って、保護するデータが含まれるドメイン内のコンピュータにエージェントをリモートでインストールできます。

#### Backup Exec System Recovery Agent を使用する方法

- ◆ Windows システムトレイで、次のいずれかを実行します。
  - Backup Exec System Recovery のトレイアイコンを右クリックし、[再接続]を選択してサービスを自動的に再起動します。

バックアップは、サービスが起動するまで実行できません。

- Backup Exec System Recovery がコンピュータにインストールされている場合、Backup Exec System Recovery のトレイアイコンをダブルクリックし、プログラムを起動します。  
エージェントのみがインストールされている場合は、トレイアイコンをダブルクリックしても[バージョン情報]ダイアログボックスが表示されるだけです。
- コンピュータに Backup Exec System Recovery がインストールされている場合は、Backup Exec System Recovery のトレイアイコンを右クリックし、Backup Exec System Recovery Agent の一般タスクのメニューを表示します。

## Windows のサービスツールを使った Backup Exec System Recovery Agent の管理について

Backup Exec System Recovery Agent は、Windows のサービスの 1 つで、バックグラウンドで実行されます。

このエージェントは、次の機能を提供します。

- コンピュータにログオンしているユーザーがいない(または権限のないユーザーしかログオンしていない)場合でも、スケジュールされたバックアップジョブをローカルで実行します。
- 管理者は、他のコンピュータで実行している Backup Exec System Recovery から、企業全体のコンピュータをリモートでバックアップできます。

p.110 の「[Backup Exec System Recovery Agent の使用](#)」を参照してください。

Backup Exec System Recovery の機能を使うには、Backup Exec System Recovery Agent を起動し、正しく設定する必要があります。Windows のサービスツールを使用して、エージェントの管理およびトラブルシューティングを実行できます。

---

**メモ:** Backup Exec System Recovery Agent を管理するには、ローカル管理者としてログオンする必要があります。

---

次の方法で Backup Exec System Recovery Agent を管理できます。

- ローカルおよびリモートコンピュータで Backup Exec System Recovery Agent を開始、停止、または無効にする。  
p.113 の「[Backup Exec System Recovery Agent サービスの開始または停止](#)」を参照してください。
- Backup Exec System Recovery Agent が使用するユーザー名とパスワードを設定する。

p.116の「[Backup Exec System Recovery へのアクセスの制御](#)」を参照してください。

- **Backup Exec System Recovery Agent** を起動できない場合に実行する修復操作を設定する。

たとえば、**Backup Exec System Recovery Agent** を自動的に再起動したり、コンピュータを再起動したりすることができます。

p.115の「[Backup Exec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作の設定](#)」を参照してください。

## サービスを使用するためのベストプラクティスについて

次の表に、サービスを使うためのベストプラクティスを示します。

表 9-1 サービスを使用するためのベストプラクティス

ベストプラクティス	説明
サービスの使用前に[イベント]タブを確認する	[詳細]ビューの[イベント]タブは、特に <b>Symantec Backup Exec System Recovery Agent</b> に関連する問題が発生している場合に、その問題の原因を追跡するのに有効です。問題の原因として考えられる内容について詳しくは[イベント]タブの最新のログエントリを確認してください。
ユーザーによる操作なしに <b>Backup Exec System Recovery Agent</b> が起動していることを確認する	<p><b>Backup Exec System Recovery Agent</b> は <b>Backup Exec System Recovery</b> の起動時に自動的に起動するように設定されています。状態情報を参照すると、<b>Backup Exec System Recovery Agent</b> が起動したことを確認できます。エージェントが起動すると、[タスク]パネルの[状態]領域に、[準備完了]状態を示すメッセージが表示されます。</p> <p><b>Backup Exec System Recovery Agent</b> が自動的に起動するかどうかは、[サービス]を確認することでテストできます。必要に応じて、状態を確認してサービスを再起動できます。[スタートアップの種類]が自動に設定されている場合は、エージェントを再起動してください。</p> <p>p.113の「<a href="#">Backup Exec System Recovery Agent サービスの開始または停止</a>」を参照してください。</p>



ベストプラクティス	説明
Backup Exec System Recovery Agent のデフォルト設定を変更する場合は注意する	デフォルトの Backup Exec System Recovery Agent のプロパティを変更すると、Backup Exec System Recovery を正しく実行できない場合があります。Backup Exec System Recovery Agent の[スタートアップの種類]および[ログオン]のデフォルト設定を変更する際は、注意してください。エージェントは、Backup Exec System Recovery の起動時に自動的に起動し、自動的にログオンするように設定されています。

## Windows のサービスツールを開く

Backup Exec System Recovery Agent を管理するための Windows のサービスツールを開くには、いくつかの方法があります。

### サービスツールを開く方法

- 次のいずれかを実行します。
  - Windows の[コントロールパネル]で、[管理ツール]、[サービス]の順にクリックします。
  - Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順にクリックします。  
[名前]テキストボックスに、「services.msc」と入力して、[OK]をクリックします。
- [名前]列で、サービスのリストをスクロールし、Backup Exec System Recovery (エージェントの名前)を表示します。  
状態は[開始]になっているはずです。  
p.113 の「[Backup Exec System Recovery Agent サービスの開始または停止](#)」を参照してください。

## Backup Exec System Recovery Agent サービスの開始または停止

Backup Exec System Recovery Agent サービスを開始、停止、または再起動するには、管理者または Administrators グループのメンバーとしてログオンする必要があります。コンピュータがネットワークに接続されている場合は、ネットワークポリシー設定によりこれらのタスクを完了できないことがあります。

次の理由で、Backup Exec System Recovery Agent サービスの開始、停止、または再起動が必要になることがあります。

開始または再起動	Backup Exec System Recovery がコンピュータ上の Backup Exec System Recovery Agent に接続できない場合、または Backup Exec System Recovery から再接続できない場合、エージェントを開始または再起動してください。
再起動	Backup Exec System Recovery Agent サービスへのログオンに使ったユーザー名やパスワードを変更した場合、またはセキュリティ設定ツールを使って別のユーザーにコンピュータのバックアップ権限を付与した場合、エージェントを再起動してください。  p.116の「 <a href="#">Backup Exec System Recovery へのアクセスの制御</a> 」を参照してください。
停止	エージェントが原因でコンピュータに問題が生じていると考えられる場合、または一時的にメモリリソースを解放したい場合、そのエージェントを停止できます。  エージェントを停止すると、ドライブベースのバックアップとファイルおよびフォルダのバックアップもすべて実行されなくなります。

Backup Exec System Recovery Agent サービスを停止して Backup Exec System Recovery を起動すると、エージェントは自動的に再起動されます。[状態]は[準備完了]に変わります。

Backup Exec System Recovery の実行中に Backup Exec System Recovery Agent サービスを停止すると、エラーメッセージが表示され、Backup Exec System Recovery がエージェントから切断されます。ほとんどの場合には、[タスク]ペインまたはトレイアイコンで[再接続]をクリックし、Backup Exec System Recovery Agent を再起動できます。

#### Backup Exec System Recovery Agent サービスを開始または停止する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順にクリックします。
- 2 [ファイル名を指定して実行]ウィンドウに、「**services.msc**」と入力します。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [サービス]ウィンドウの[名前]列で、[Backup Exec System Recovery]をクリックします。
- 5 [操作]メニューで、次のいずれかを選択します。
  - 開始
  - 停止
  - 再起動

## Backup Exec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作の設定

Backup Exec System Recovery Agent が開始しない場合のコンピュータの応答を指定できます。

**Backup Exec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作を設定する方法**

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順にクリックします。
- 2 [ファイル名を指定して実行]ウィンドウに、「**services.msc**」と入力します。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [サービス]ウィンドウの[操作]メニューで、[プロパティ]を選択します。
- 5 [修復]タブの[最初のエラー]、[次のエラー]、および[その後のエラー]リストから、操作を選択します。

サービスを再起動する

サービスの再起動が試行されるまでの時間(分数)を指定します。

プログラムを実行する

実行するプログラムを指定します。ユーザー入力が必要なプログラムまたはスクリプトは指定しないでください。

コンピュータを再起動する

[コンピュータの再起動のオプション]をクリックして、コンピュータを再起動するまでの待機時間を指定します。コンピュータを再起動する前に、リモートユーザーに表示するメッセージを作成することもできます。

- 6 [エラー カウントのリセット]テキストボックスに、**Symantec Backup Exec System Recovery Agent** が何日間正常に実行されたらエラーカウントをゼロにリセットするかを指定します。

エラーカウントがゼロにリセットされた場合、次にエラーが発生すると、最初のエラーに設定されている修復操作が実行されます。

- 7 [OK]をクリックします。

## Backup Exec System Recovery Agent の依存関係の表示

Backup Exec System Recovery Agent を正常に実行できるかは、他の必要なサービスに依存します。システムコンポーネントが停止しているか、正常に実行されていない場合、依存関係にあるサービスが影響を受ける可能性があります。

**Backup Exec System Recovery Agent** を開始できない場合は、エージェントが依存しているサービスがインストールされていること、およびそのサービスの[スタートアップの種類]が「無効」に設定されていないことを確認します。

---

**メモ:** 相互に依存しているサービスの[スタートアップの種類]設定を確認するには、サービスを1つ選択して[操作]、[プロパティ]、[全般]の順にクリックします。

---

[依存関係]タブの上のリストボックスには、**Backup Exec System Recovery Agent** を正常に実行するために必要なサービスが表示されます。下のリストボックスには、**Backup Exec System Recovery Agent** を正常に実行するために必要なサービスは含まれていません。

次の表に、**Backup Exec System Recovery Agent** を正常に実行するために必要なサービスと、起動のデフォルト設定を示します。

表 9-2 必要なサービス

サービス	スタートアップの種類
イベントログ	自動
Plug and Play	自動
Remote Procedure Call (RPC)	自動

#### Backup Exec System Recovery Agent の依存関係を表示する方法

- 1 [サービス]ウィンドウの[名前]で、[Backup Exec System Recovery]をクリックします。  
p.113の「[Windows のサービスツールを開く](#)」を参照してください。
- 2 [操作]メニューで、[プロパティ]を選択します。
- 3 [依存関係]タブをクリックします。

## Backup Exec System Recovery へのアクセスの制御

セキュリティ設定ツールを使用して、ユーザーまたはグループに対して、**Backup Exec System Recovery Agent** にアクセスできる権限またはすべての **Backup Exec System Recovery** ユーザーインターフェースに対する権限を許可または禁止できます。

セキュリティ設定ツールを使うときには、**Users** グループに対して付与されている権限があれば、グループ内のメンバにその権限が適用されます。

**メモ:** エージェントサービスは、LocalSystem として、または Administrators グループに属するユーザーによってのみ実行できます。

次の表に、Backup Exec System Recovery Agent を使用するユーザーまたはグループに対して許可または禁止できる権限を示します。

表 9-3 権限オプション

オプション	説明
フルコントロール	ユーザーまたはグループに、すべての Symantec Backup Exec System Recovery 機能に対して、管理者と同等の完全なアクセスを許可します。ユーザーに対して、バックアップの定義、変更、削除、またはリカバリポイントの保存場所の管理を許可しない場合には、フルコントロールを許可しないでください。
状態のみ	ユーザーまたはグループは、状態情報を取得し、バックアップジョブを実行できます。ただし、バックアップジョブを定義、変更、削除したり、製品の他の機能は使用できません。
拒否	ユーザーは、いずれの機能も実行できず、情報も参照できません。Backup Exec System Recovery へのアクセスが拒否されます。

禁止設定は、継承された許可設定より優先されます。たとえば、2つのグループのメンバーであるユーザーが、そのうち1つのグループに対する設定によって権限が禁止されている場合、権限が禁止されます。ユーザー禁止権限は、グループ許可権限に優先されません。

#### ユーザーおよびグループを追加する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 [追加]をクリックします。
- 3 [ユーザーまたはグループの選択]ダイアログボックスで、[詳細設定]をクリックします。
- 4 必要に応じて、[オブジェクトの種類]をクリックして、オブジェクトの種類を選択します。
- 5 必要に応じて、[場所]をクリックして、検索する場所を選択します。
- 6 [今すぐ検索]をクリックし、表示されたリストの中からユーザーおよびグループを選択して、[OK]をクリックします。
- 7 終了したら、[OK]をクリックします。

### ユーザーまたはグループの権限を変更する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 [Symantec Backup Exec System Recovery のアクセス許可]ダイアログボックスで、権限を変更するユーザーまたはグループを選択し、次のいずれかを実行します。
  - 「フルコントロール」の権限を設定するには、選択したユーザーまたはグループに対して[許可]または[拒否]をクリックします。
  - 「状態のみ」の権限を設定するには、選択したユーザーまたはグループに対して[許可]または[拒否]をクリックします。
- 3 終了したら、[OK]をクリックします。

### ユーザーまたはグループを削除する方法

- 1 Windows のスタートメニューで、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 削除するユーザーまたはグループを選択し、[削除]をクリックします。
- 3 終了したら、[OK]をクリックします。

## 異なるユーザー権限での Backup Exec System Recovery の実行

ユーザーの権限が Backup Exec System Recovery の実行に不十分な場合は、適切な権限を持つアカウントで現在ログオンしていなくても、Windows の[別のユーザーとして実行]を使用してそのアカウントで製品を実行することができます。

### Windows で[別のユーザーとして実行]を使用する方法

- ◆ 実行している Windows のバージョンによって、次のいずれかを実行します：
  - Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]の順にクリックします。  
[Backup Exec System Recovery]を右クリックし、[別のユーザーとして実行]を選択します。  
[別のユーザーとして実行]ダイアログボックスで、別のアカウントでログオンするために[次のユーザー]をクリックします。  
[ユーザー名]および[パスワード]フィールドに、使用するアカウント名とパスワードを入力し、[OK]をクリックします。
  - Windows のタスクバーで、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[Backup Exec System Recovery]の順にクリックします。  
必要な権限の追加を求めるメッセージが表示された場合は、[はい]をクリックします。

管理者アカウントのパスワードを入力し、[OK]をクリックします。





# バックアップの状態の監視

この章では以下の項目について説明しています。

- [バックアップの監視について](#)
- [\[ホーム\]ページからのバックアップ保護の監視](#)
- [\[状態\]ページからのバックアップ保護の監視](#)
- [SNMPトラップについて](#)
- [ドライブ\(またはファイルおよびフォルダのバックアップ\)の状態レポートのカスタマイズ](#)
- [ドライブの詳細の表示](#)
- [ドライブの保護レベルの向上](#)
- [問題のトラブルシューティングでのイベントログ情報の使用について](#)

## バックアップの監視について

バックアップを監視して、必要に応じて、消失したデータを効果的に修復できることを確認してください。

[ホーム]ページに、バックアップ保護の全般的な状態が表示されます。[状態]ページでは、保護されているドライブの詳細と、過去および今後のバックアップのカレンダー表示が提供されます。

---

**メモ:** 各ドライブがバックアップされていることを確認するだけでなく、コンピュータをバックアップするためのベストプラクティスを十分に検討して実行する必要があります。

---

## コンピュータのハードディスクの再スキャン

[更新]を使用すると、製品のさまざまなビューに表示されるドライブ情報を更新できます。この機能は、ハードディスクの設定の変更が **Backup Exec System Recovery** にすぐに反映されない場合に役立ちます。たとえば、ハードディスク領域の追加やパーティションの作成を行った場合などです。

[更新]を使用すると、接続されているすべてのハードディスクがスキャンされ、設定が変更されているかどうかを確認されます。また、リムーバブルメディア、メディアドライブ、ベーシックドライブ、ファイルシステム、ハードディスクドライブ文字に関する情報も更新されます。

### コンピュータのハードディスクを再スキャンする方法

- ◆ 表示メニューで[更新]をクリックします。


スキャンの実行中は、製品のウィンドウ下部にステータスバーが表示されます。

## [ホーム]ページからのバックアップ保護の監視

[ホーム]ページの[バックアップの状態]ペインには、コンピュータのバックアップ保護状態の概略が表示されます。たとえば、定義したバックアップに 1 つ以上のドライブが含まれていない場合、バックアップ保護レベルを反映して背景色および状態アイコンが変化します。[状態の詳細]ペインには、推奨される操作が表示されます。

次の表に、[ホーム]ページに表示される各バックアップ保護レベルを示します。

表 10-1 バックアップ保護レベル

アイコン	名称	説明
	バックアップ済み	少なくとも 1 つのドライブベースのバックアップが定義されており、定期的に行われます。  必要に応じて、すべてのドライブ、ファイル、およびフォルダを修復できる状態です。

アイコン	名称	説明
	要注意	<p>バックアップが定義されていますが、スケジュールされていないか、長い間実行されていない可能性があります。既存のリカバリポイントが古い可能性があります。または、定義したバックアップに 1 つ以上のドライブが割り当てられていない可能性があります。</p> <p>部分的に保護されたドライブは修復できますが、リカバリポイントが古い場合、最新のデータは修復されません。</p>
	危険性あり	<p>バックアップが定義されておらず、ドライブを修復するために利用できるリカバリポイントもありません。</p> <p>保護されていないドライブは修復できないため、危険な状態です。</p>
	不明な状態	<p>状態を識別中か、製品のライセンスがないことを示します。</p> <p>しばらく待っても状態が表示されない場合は、製品のライセンスがあることを確認してください。</p>
	レポートなし	<p>このアイコンが表示されているドライブでは、バックアップの状態が監視されていません。または、エラーのみが監視されています。ただし、通知するエラーはありません。</p> <p>状態レポート設定を変更するには、[状態] ページの [状態レポートのカスタマイズ] 機能を使用します。</p>

## [状態]ページからのバックアップ保護の監視






[状態]ページを使用して、バックアップの状態を監視できます。[状態]ページには、コンピュータの各ドライブのリストと、バックアップ履歴を含むカレンダーが表示されます。このカレンダーを使用すると、バックアップを実行した日時やバックアップの種類をすばやく確認できます。また、今後のバックアップのスケジュールも確認できます。ファイルおよびフォルダのバックアップを 1 つ以上定義している場合は、そのバックアップ履歴も表示されます。

**メモ:** 任意のカレンダーアイコンを右クリックして、状況感知型メニューにアクセスできます。これらのメニューから、関連するタスクにすばやくアクセスできます。

次の表に、[バックアップ]カレンダーに表示される各アイコンの意味を示します。

表 10-2 [バックアップ]カレンダーアイコン

アイコン	説明	状態
	1つの単体リカバリポイントの作成を設定したドライブベースのバックアップを表します。このアイコンがバックアップタイムラインに表示されている場合は、ドライブベースのバックアップが実行されるようにスケジュールされていることを意味します。	このアイコンは次の状態で表示されます。  バックアップが実行され、単体リカバリポイントが作成された場合。  バックアップを利用できない場合。  バックアップがスケジュールどおりに実行されなかった場合。この問題は、エラーが発生してバックアップが実行されなかった場合、またはバックアップが完了前に手動でキャンセルされた場合に発生する可能性があります。  ドライブベースのバックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。

アイコン	説明	状態
	<p>増分リカバリポイントの作成を設定したドライブベースのバックアップを表します。これは、ドライブベースのバックアップがバックアップタイムラインに表示されている日付に実行されるようにスケジュールされていることを意味します。</p>	<p>このアイコンは次の状態で表示されます。</p> <p> バックアップが実行され、増分リカバリポイントが作成された場合。</p> <p> バックアップを利用できない場合。</p> <p> バックアップがスケジュールどおりに実行されなかった場合。この問題は、エラーが発生してバックアップが実行されなかった場合、またはバックアップが完了前に手動でキャンセルされた場合に発生する可能性があります。</p> <p> バックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。</p>

アイコン	説明	状態
	<p>ファイルおよびフォルダのバックアップを表します。これは、ファイルおよびフォルダのバックアップがバックアップタイムラインに表示されている日付に実行されるようにスケジュールされていることを意味します。</p>	<p>このアイコンは次の状態で表示されます。</p> <p> バックアップが実行され、ファイルおよびフォルダのバックアップデータが正常に作成された場合。</p> <p> バックアップを利用できない場合。</p> <p> バックアップがスケジュールどおりに実行されなかった場合。この問題は、エラーが発生してバックアップが実行されなかった場合、またはバックアップが完了前に手動でキャンセルされた場合に発生する可能性があります。</p> <p> バックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。</p>

アイコン	説明	状態
	このアイコンが表示されている日付に複数のバックアップが実行されるようにスケジュールされていることを表します。	このアイコンは次の状態で表示されます。  複数のバックアップが実行され、最後のバックアップが正常に実行された場合。  複数のバックアップがスケジュールされていて、少なくとも1つのバックアップを利用できない場合。  複数のバックアップが実行され、最後のバックアップが正常に完了しなかった場合。この問題は、エラーのためにバックアップが実行されなかった場合に発生する可能性があります。  バックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。

[状態]ページからバックアップ保護を監視する方法

- 1 [状態]ページの[バックアップ]カレンダーで、バックアップを実行した日付にアイコンが表示されていることを確認します。
- 2 [ドライブ]列で、表示するドライブを選択します。  
 [状態]ページの下半分に、状態情報が表示されます。
- 3 バックアップアイコンをマウスで指して、バックアップの状態を確認します。
- 4 カレンダーの表示範囲を、次のいずれかの方法により移動することができます。
  - タイトルバーの任意の場所をクリックすると、月単位のカレンダーが表示され、目的の日付へすばやく移動できます。
  - カレンダー下部のスクロールバーを使用すると、日付を前後にスクロールできます。

## SNMPトラップについて

SNMPトラップが Symantec Backup Exec System Recovery で機能するように、コンピュータに Windows SNMP サービスをインストールし、設定する必要があります。

デフォルトでは、Symantec Backup Exec System Recovery は NMS マネージャにトラップを送信することはできません。SNMPトラップをさまざまな優先順位や通知の種類で送信するように Backup Exec™ System Recovery 2010 を設定できます。

### SNMPトラップを送信するように Symantec Backup Exec System Recovery を設定する方法

- 1 ツールメニューから[オプション]をクリックし、次に[通知]、[SNMPトラップ]をクリックしてください。
- 2 [SNMPトラップ]ダイアログボックスでは、トラップの生成に必要な通知の優先度と種類を選択できます。また、送信する SNMPトラップのバージョンも選択できます (V1 か V2)。必要な選択を行い、次に[OK]をクリックしてください。

Backup Exec™ System Recovery 2010 は Windows SNMP エージェントで設定された宛先すべてに SNMPトラップを送信するようになりました。

## Symantec Backup Exec System Recovery 管理情報ベースについて

Symantec Backup Exec System Recovery 管理情報ベース (MIB) は、エンタープライズ MIB で、Backup Exec™ System Recovery 2010 SNMPトラップ定義を含んでいます。すべての NMS アプリケーションに MIB をロードするオプションがあり、Backup Exec™ System Recovery 2010 MIB はそれらのオプションのいずれかを使用してロードできます。MIB をロードしなくても、NMS アプリケーションはトラップを受信して表示しますが、情報テキストでは表示されません。この .MIB ファイルの名前は BESR\_MIB.MIB で、Symantec Backup Exec System Recovery 製品 CD の Support フォルダにあります。

## ドライブ (またはファイルおよびフォルダのバックアップ) の状態レポートのカスタマイズ

Backup Exec System Recovery が特定のドライブ (またはすべてのファイルおよびフォルダのバックアップ) の状態を通知する方法を設定できます。

たとえば、ドライブ D に重要でないデータが含まれているため、それをドライブベースバックアップに含めないように選択した場合、[ホーム] ページの状態では、コンピュータが危険な状態であることが通知され続けます。[ホーム] ページの [バックアップの状態] パネルのドライブ D の状態が識別されないように、Backup Exec System Recovery をドライブ D を無視するように設定できます。

または、未処理のバックアップや失敗したバックアップなどのエラーのみが状態レポートに識別されるように指定できます。



---

**メモ:** 各ドライブのバックアップの状態は、ドライブが一覧表示された製品全体で通知されます。ドライブの状態レポートをカスタマイズすると、状態は、ドライブが **Backup Exec System Recovery** で一覧表示されているすべての場所に反映されます。

---

特定のドライブに割り当てる状態レポートのレベルを決める前に、特定のドライブ（またはファイルおよびフォルダのバックアップに含めたデータ）上の重要なデータの状態を最初に決めてください。

### ドライブ（またはファイルおよびフォルダのバックアップ）の状態レポートをカスタマイズする方法

- 1 [状態] ページで、ドライブ（または[ファイルやフォルダ]）をクリックして選択します。  
[ホーム] ページから[状態レポートのカスタマイズ]をクリックすることもできます。
- 2 [状態レポートのカスタマイズ]をクリックします。
- 3 次のいずれかのオプションを選択します。

完全な状態レポート

[ホーム] および [状態] ページに、選択したドライブ、またはファイルおよびフォルダのバックアップの現在の状態を表示します。

データが重要な場合にこのオプションを選択します。

エラーのみの状態レポート

エラーが発生した場合にのみ、選択したドライブ、またはファイルおよびフォルダのバックアップの現在の状態を表示します。

データが重要な場合にこのオプションを選択します。ただし、このオプションでは、エラーが発生したときに、状態でエラーを通知するだけです。

状態レポートの必要なし

選択したドライブ、またはファイルおよびフォルダのバックアップの状態を表示しません。

データが重要でなく、未処理のバックアップまたは失敗したバックアップを通知する必要がない場合に、このオプションを選択します。

- 4 [OK] をクリックします。

## ドライブの詳細の表示

[詳細] ページを使用して、ハードディスクドライブの詳細を確認できます。  
表示されるドライブの詳細は次のとおりです。

名前	バックアップを定義したときに割り当てた名前。
種類	バックアップを実行したときに作成されるリカバリポイントの種類。
保存先	リカバリポイントの保存場所、またはドライブがバックアップされる場所。
最後の実行	バックアップを最後に実行した日付と時間。
次回実行	スケジュールされたバックアップを次に実行する日付と時間。

#### ドライブの詳細を表示する方法

- 1 [詳細]ページの内容バーで、[ドライブ]タブをクリックします。  
基本ナビゲーションバーに[詳細]ページが表示されていない場合は、[表示]、[詳細ページを表示]の順にクリックします。
- 2 [ドライブ]列でドライブを選択します。
- 3 [ドライブ]表の下の[詳細]セクションを確認します。

## ドライブの保護レベルの向上

ドライブベースのバックアップの状態表示がユーザーに注意を促している場合は、保護レベルを向上するための手順を実行します。

既存のバックアップへのドライブの追加、バックアップのスケジュールの編集、バックアップの設定の編集、または新しいバックアップの定義が必要な場合があります。

p.52 の「[バックアップのベストプラクティス](#)」を参照してください。

## ドライブの保護レベルを向上する方法

- 1 [状態]ページの[ドライブ]列から、注意が必要なドライブを選択します。
- 2 ページ下部の[状態]セクションで、編集するバックアップを右クリックし、次のいずれかのメニュー項目を選択します。

今すぐバックアップを実行	選択したバックアップジョブがすぐに実行されます。
オプションを指定してバックアップを実行	必要なリカバリポイントの種類を選択できる[オプションを指定してバックアップを実行]ダイアログボックスを開きます。リカバリポイントのオプションの種類は増分リカバリポイント、リカバリポイントセットと単体リカバリポイントを含んでいます。
スケジュールを変更	[実行するタイミング]ダイアログボックスが表示されます。バックアップスケジュールを編集できます。
設定を編集	バックアップ定義ウィザードが表示されます。バックアップの定義を編集できます。  このオプションでは、ウィザードの 2 番目のページが表示されます。
バックアップジョブを削除	選択したバックアップが削除されます。  削除されるのはバックアップの定義のみです。バックアップデータ(リカバリポイントや、ファイルおよびフォルダのバックアップデータなど)は削除されません。
バックアップを無効(有効)にする	選択したバックアップを無効(または有効)にします。
新しいバックアップを定義	コンピュータをバックアップするか、または選択したファイルとフォルダをバックアップするかを選択できるバックアップ定義ウィザードを開きます。  このオプションは、[ドライブ]列のドライブがバックアップに割り当てられていない場合に有効です。既存のバックアップに割り当て済みのドライブを選択すると、バックアップ定義ウィザードの[状態]ページを表示するショートカットを使用できます。
バックアップ先を管理	バックアップ先ドライブを指定することも、バックアップ先ドライブの既存のリカバリポイントを削除、コピー、または検索することもできる[バックアップ先を管理]ダイアログボックスを開きます。
状態レポートのカスタマイズ	状態レポートが必要かどうかや、状態レポートの種類を指定できる[状態レポートのカスタマイズ]ウィンドウを開きます。

p.99 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

## 問題のトラブルシューティングでのイベントログ情報の使用について

**Backup Exec System Recovery** で操作 (バックアップジョブの実行時など) を実行すると、イベントが記録されます。プログラムのエラーメッセージも記録されます。

イベントログを使用して、問題の原因を追跡したり、バックアップジョブが正常に完了したことを検証できます。

p.47 の「[Backup Exec System Recovery メッセージのログへの記録](#)」を参照してください。

ログエントリには、**Backup Exec System Recovery** またはユーザーによって行われた多数の操作の成功または失敗についての情報が含まれます。すべての情報およびプログラムのエラーメッセージを 1 カ所で確認できます。

次の情報がイベントログに含まれます。

種類	イベントがエラーメッセージか、またはその他の情報 (バックアップジョブの正常完了など) かを示します。
ソース	メッセージが <b>Backup Exec System Recovery</b> によって生成されたか、または他のプログラムによって生成されたかを特定します。
日付	選択したイベントが発生した正確な日時を表示します。
説明	発生している可能性がある問題のトラブルシューティングに役立つイベントについての追加の詳細情報を示します。

# リカバリポイントの内容の検索

この章では以下の項目について説明しています。

- [リカバリポイントの検索について](#)
- [Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索](#)
- [リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)
- [検索エンジンの使用について](#)
- [リカバリポイントドライブのマウント解除](#)
- [リカバリポイントドライブのプロパティの表示](#)

## リカバリポイントの検索について

Windows エクスプローラから表示できるドライブ文字をリカバリポイントに割り当てることにより、Backup Exec System Recovery を使用してリカバリポイントのファイルを検索できます。

割り当てられたドライブ上で、次のタスクを実行できます。

- ScanDisk (または CHKDSK) の実行
- ウイルスチェックの実行
- 他のドライブへのフォルダやファイルのコピー
- 使用領域や空き領域などのドライブ情報の表示
- マウントしたリカバリポイント内にある簡易プログラムファイルの実行

マッピングされているリカバリポイント内から実行できるプログラムは、レジストリの値、COM インターフェース、ダイナミックリンクライブラリ (DLL) またはその他の同様な依存関係に依存しないプログラムのみです。

マウントしたドライブは、共有ドライブとして設定できます。ネットワークから共有ドライブに接続し、マウントされたリカバリポイント内のファイルやフォルダを復元することができます。

同時に 1 つ以上のリカバリポイントをマウントすることができます。マウントを解除するか、またはコンピュータを再起動するまで、マウントしたドライブはそのまま使用できます。ドライブをマウントしても、ハードディスクの空き領域を新たに消費することはありません。

マウント後も NTFS ボリュームのセキュリティはすべて維持されます。

リカバリポイント内のファイルやフォルダを復元するためにドライブをマウントする必要はありません。

---

**メモ:** リカバリポイントのマウントを解除すると、そのリカバリポイントに書き込まれたデータはすべて失われます。このようなデータには、マウント解除の時点で作成、編集、または削除されていたデータが含まれます。

---

p.134 の「[Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索](#)」を参照してください。

p.137 の「[リカバリポイントドライブのマウント解除](#)」を参照してください。

p.137 の「[リカバリポイントドライブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

## Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索

リカバリポイントの検索を実行する場合、Backup Exec System Recovery はリカバリポイントをドライブとしてマウントして Windows エクスプローラで開きます。

リカバリポイントに含まれる各ドライブについて、マウントされた新しいドライブ文字が作成されます。たとえば、リカバリポイントにドライブ C および D のバックアップが含まれる場合は、新たにマウントされた 2 つのドライブが表示されます (E および F など)。マウントされたドライブには、バックアップされたドライブの元のドライブラベルが含まれます。

### Windows エクスプローラからリカバリポイントを検索する方法

- 1 [タスク] ページで、[バックアップ先を管理] をクリックします。
- 2 検索するリカバリポイントまたはリカバリポイントセットを選択し、[検索] をクリックします。
- 3 複数のリカバリポイントを含むリカバリポイントセットを選択した場合は、[範囲] リストから 1 つのリカバリポイントを選択し、[OK] をクリックします。

## Windows エクスプローラからのリカバリポイントのマウント

Windows エクスプローラでバックアップ先フォルダを開くことで、リカバリポイントをドライブとして手動でマウントすることもできます。

Windows エクスプローラを使用してリカバリポイントの内容を検索できます。たとえば、特定のファイルが最初に保存されていた場所を覚えていない場合は、エクスプローラの検索機能を使用して、ハードディスクドライブでファイルを検索する場合と同様にファイルを検索できます。

### Windows エクスプローラからリカバリポイントをマウントする方法

- 1 Windows エクスプローラで、リカバリポイントを選択します。  
リカバリポイントは、バックアップを定義したときに選択した保存場所に保存されています。
- 2 リカバリポイントを右クリックして、[マウント]を選択します。
- 3 [リカバリポイントのマウント]ウィンドウで、[ドライブラベル]列からマウントするリカバリポイントを選択します。
- 4 [ドライブ文字]リストで、ドライブに関連付ける文字を選択します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 さらに別のドライブをマウントする場合は、前述の手順 1 から 5 を繰り返します。

## リカバリポイント内のファイルの表示および復元

Recovery Point Browser を使用し、リカバリポイント内のファイルを開くことができます。ファイルは、そのファイルの種類に関連付けされているプログラムを使用して開かれます。ファイルの復元は、そのファイルに関連付けされているアプリケーションでファイルを保存したり、Recovery Point Browser の[ファイルを修復]ボタンを使用することでも可能です。

ファイルがプログラムに関連付けされていない場合は、Windows の[ファイルを開くアプリケーションの選択]ダイアログボックスが表示されます。ここで、ファイルを開く適切なプログラムを選択できます。

---

**メモ:** EFS (暗号化ファイルシステム) を使用している NTFS ボリュームは表示できません。

---

### リカバリポイント内のファイルを開く方法

- 1 [ツール] ページで、[Recovery Point Browser を実行] をクリックします。
- 2 バックアップ先フォルダに移動し、参照するリカバリポイントファイルを選択して[開く] をクリックします。
- 3 Recovery Point Browser の左側のツリーパネルでドライブを選択します。

- 4 右側の内容パネルで、表示するファイルが含まれるフォルダをダブルクリックします。
- 5 表示するファイルを右クリックし、[ファイルを表示]を選択します。

拡張子が **.exe**、**.dll**、または **.com** のプログラムファイルを選択した場合は、[ファイルを表示]オプションは利用できません。

#### リカバリポイント内のファイルを復元する方法

- 1 [ツール]ページで、[Recovery Point Browser を実行]をクリックします。
- 2 バックアップ先フォルダに移動し、参照するリカバリポイントファイルを選択して[開く]をクリックします。
- 3 Recovery Point Browser のツリーパネル(左側)でドライブを選択します。
- 4 内容パネル(右側)で、表示するファイルが含まれるフォルダをダブルクリックします。
- 5 次のいずれかを実行します。
  - 表示するファイルを右クリックし、[ファイルを表示]を選択します。  
拡張子が **.exe**、**.dll**、または **.com** のプログラムファイルを選択した場合は、[ファイルを表示]オプションは利用できません(淡色表示)。
  - 1 つ以上のファイルを選択してから、[ファイルを修復]、[修復]の順に選択し、元の場所に復元します。  
既存の(元の)ファイルを上書きするかどうかを尋ねるメッセージが表示されたら、[はい]または[すべてはい]をクリックし、上書きを実行します。

## 検索エンジンの使用について

Google デスクトップのようなデスクトップ検索エンジンがインストールされている場合は、そのような検索エンジンを利用しての検索が可能なりカバリポイントを作成するようにバックアップを設定できます。

---

**メモ:** 組織が Symantec Backup Exec Web Retrieve を使用している場合、ネットワーク管理者によってこの機能がすでに有効に設定されている場合があります。

---

これらの検索エンジンのいずれかをサポートするようにバックアップを設定できます。バックアップを定義するときに、[検索エンジンのサポートを有効化]を選択してください。

p.64 の「[ドライブベースのバックアップを定義する方法](#)」を参照してください。

p.219 の「[検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。



## リカバリポイントドライブのマウント解除

コンピュータを再起動すると、マウントしたリカバリポイントドライブはすべてマウント解除されます。コンピュータを再起動しなくても、ドライブをマウント解除できます。

### Windows エクスプローラでリカバリポイントドライブをマウント解除する方法

- 1 Windows エクスプローラで、マウントされているリカバリポイントを選択します。
- 2 ドライブを右クリックして、[リカバリポイントのマウントを解除]をクリックします。

### Recovery Point Browser を使ってリカバリポイントドライブをマウント解除する方法

- 1 Recovery Point Browser のツリーで、マウントされたリカバリポイントを選択します。
- 2 マウントされたリカバリポイントを右クリックして、[リカバリポイントのマウントを解除]をクリックします。

## リカバリポイントドライブのプロパティの表示

リカバリポイントの次のドライブのプロパティを表示できます。

説明	ユーザーが入力したリカバリポイントの説明。
元のドライブ文字	ドライブに割り当てられていた元のドライブ文字。
クラスタサイズ	FAT、FAT32、または NTFS ドライブのクラスタサイズ(バイト)。
ファイルシステム	ドライブで使用しているファイルシステムの種類。たとえば、FAT、FAT32、または NTFS。
基本/論理	選択したドライブのパーティションの種類。基本パーティションまたは論理パーティションのいずれか。
サイズ	ドライブの総サイズ(MB)。使用領域と空き領域の両方が含まれます。
使用領域	ドライブ内の使用領域の容量(MB)。
未使用領域	ドライブ内の未使用領域の容量(MB)。
不良セクタが含まれています	ドライブ上に不良セクタがあるかどうかを示します。
正常に静止しました	リカバリポイントが作成された時、データベースアプリケーションが正しく静止したかどうかを示します。

### リカバリポイントドライブのプロパティを表示する方法

- 1 **Recovery Point Browser** のツリーパネルで、表示するドライブが含まれているリカバリポイントをクリックします。
- 2 ドライブを選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
  - ファイルメニューで、[プロパティ]を選択します。
  - リカバリポイントを右クリックして、[プロパティ]を選択します。

# バックアップ先の管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [バックアップ先について](#)
- [バックアップデータの仕組みについて](#)
- [リカバリポイントの保存場所の管理](#)
- [ワンタイム仮想変換の実行](#)
- [仮想変換ジョブの定義](#)
- [ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)
- [バックアップデータの管理の自動化](#)
- [バックアップ先の移動](#)

## バックアップ先について

バックアップ先とは、バックアップデータを保存する場所です。

Backup Exec System Recovery には、コンピュータの貴重なディスク領域を他の目的に使用できるように、バックアップ先のサイズを管理する機能が含まれています。

## バックアップデータの仕組みについて

Backup Exec System Recovery には、2 つのバックアップ方法があります。

ドライブベースのバックアップ	システムドライブ (通常は C ドライブ) など、ドライブ全体をバックアップするには、このオプションを使用します。ファイル、フォルダ、またはドライブ全体を復元できます。
----------------	--

ファイルおよびフォルダのバックアップ 選択したファイルおよびフォルダだけをバックアップするには、このオプションを使用します。任意のファイルまたはすべてのファイルをいつでも復元できます。

このオプションに必要なディスク領域は、通常、ドライブベースのバックアップよりも小さくなります。

## ドライブベースのバックアップについて

ドライブベースのバックアップを実行すると、すべての項目のスナップショットが作成され、コンピュータのハードディスクに保存されます。スナップショットはコンピュータにリカバリポイントとして保存されます。リカバリポイントとは、リカバリポイントが作成されたときの状態にコンピュータを復元するための時間上のポイントです。

リカバリポイントの種類は次のとおりです。

単体リカバリポイント(.v2i) 選択したドライブの完全な単体のコピーを作成します。通常、このバックアップはより多くの保存領域を必要とします。

リカバリポイントセット(.iv2i) ベースリカバリポイントが含まれます。ベースリカバリポイントは、単体リカバリポイントと似た、ドライブ全体の完全なコピーです。リカバリポイントセットには、ベースリカバリポイントの作成以降にコンピュータに加えられた変更のみを取得したリカバリポイントも含まれます。

ドライブベースバックアップからはファイルおよびフォルダを修復できますが、特定のファイルまたはフォルダのバックアップは選択できません。ハードディスクドライブ全体がバックアップされます。

## ファイルおよびフォルダのバックアップについて

選択した個人用ドキュメントおよびフォルダのセットを編集または作成する場合や、ハードディスクリソースを使用してコンピュータ全体をバックアップしたくない場合は、ファイルおよびフォルダのバックアップを定義できます。また、定期的に変更するファイルが含まれる1つまたは複数のフォルダを取得する場合にも、ファイルおよびフォルダのバックアップを定義できます。

ファイルおよびフォルダのバックアップで、選択した個々のファイルまたはフォルダをバックアップできます。バックアップするファイルの種類も指定できます。**Backup Exec System Recovery** は、指定した種類のすべてのファイルを検索してバックアップします。たとえば、コンピュータ上の複数の場所に保存されている **Microsoft Word** ドキュメントが存在する場合、**Backup Exec System Recovery** は、すべての **Word** ドキュメント(拡張子が **.doc** のファイル)を検索し、バックアップ対象にします。ファイルの種類のリストを編集して、使用しているソフトウェアに固有の種類をバックアップ対象にすることもできます。

また、Backup Exec System Recovery は、同じファイルの複数のバージョンを保存するので、復元したい変更内容を含むバージョンのファイルを復元できます。ディスク領域の使用を制御するため、保存するバージョンの数を制限することもできます。

## リカバリポイントの保存場所の管理

Backup Exec System Recovery には、バックアップデータの管理をサポートするいくつかの機能があります。重要なのは、バックアップデータがコンピュータのハードディスク領域を大量に使用することを回避することです。同時に、コンピュータ、ファイル、またはフォルダを修復する必要が生じた場合に備えて、十分なバックアップ保護を実現することも重要です。

p.151 の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

p.145 の「[ランタイム仮想変換の実行](#)」を参照してください。

### 手動でリカバリポイント保存場所を管理する方法

- 1 [ツール] ページで、[バックアップ先を管理] をクリックします。
- 2 [バックアップ先を管理] ウィンドウから、次のタスクを実行できます。
  - クリーンアップ  
p.141 の「[古いリカバリポイントのクリーンアップ](#)」を参照してください。
  - 移動  
p.160 の「[バックアップ先の移動](#)」を参照してください。
  - 設定  
p.159 の「[バックアップデータの管理の自動化](#)」を参照してください。
  - 削除  
p.142 の「[リカバリポイントセットの削除](#)」を参照してください。  
p.142 の「[セット内のリカバリポイントの削除](#)」を参照してください。
  - コピー  
p.143 の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。
  - 検索  
p.133 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

## 古いリカバリポイントのクリーンアップ

時間が経つと、不要なリカバリポイントが発生することがあります。たとえば、数か月前に作成されたリカバリポイントがあるが、最新の作業を含む新しいリカバリポイントがあるため、古いものが不要になる場合などです。

p.159 の「[バックアップデータの管理の自動化](#)」を参照してください。

クリーンアップ機能を使用すると、最新のリカバリポイントセットを除くすべてのリカバリポイントを削除して、ハードディスクの空き領域を確保できます。

---

**メモ:** リカバリポイントを削除すると、その時点のポイントからファイルまたはシステム復元にアクセスできなくなります。リカバリポイントを削除する前に、その内容を検索してください。

---

p.135 の「[リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)」を参照してください。

p.133 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

#### 古いリカバリポイントをクリーンアップする方法

- 1 [ツール] ページで、[バックアップ先を管理] をクリックします。
- 2 [クリーンアップ] をクリックします。

最新のリカバリポイントを削除することなく、安全に削除できるリカバリポイントセットが、自動的に選択されます。リカバリポイントセットを選択または選択解除して、削除するものを指定できます。

- 3 [削除] をクリックします。
- 4 [はい] をクリックして削除を確定します。
- 5 [OK] をクリックします。

## リカバリポイントセットの削除

特定のリカバリポイントセットが不要になった場合は、いつでも削除できます。

---

**メモ:** リカバリポイントを削除した後では、その時点のポイントからファイルまたはシステム復元にアクセスできなくなります。

---

#### リカバリポイントセットを削除する方法

- 1 [ツール] ページで、[バックアップ先を管理] をクリックします。
- 2 削除するリカバリポイントセットを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 [はい] をクリックして削除を確定します。
- 4 [OK] をクリックします。

## セット内のリカバリポイントの削除

時間が経つにつれ、リカバリポイントセットに複数のリカバリポイントが作成された場合は、削除して保存領域を確保できます。

[リカバリポイントを削除]オプションを使用して、セットの最初と最後のリカバリポイントの間に作成されたすべてのリカバリポイントを削除できます。

---

**警告:** 削除するリカバリポイントは注意して選択してください。誤ってデータを消失してしまう可能性があります。たとえば、新しいドキュメントを作成し、そのドキュメントがリカバリポイントセットの 3 番目のリカバリポイントで取得されたとします。その後、4 番目のリカバリポイントで取得されたファイルを誤って削除したとします。この場合、3 番目のリカバリポイントを削除すると、バックアップされたバージョンのファイルは永久に失われます。確認したい場合は、リカバリポイントを削除する前にその内容を検索してください。

---

p.135 の「[リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)」を参照してください。

セット内に残すリカバリポイントがわかっている場合は、削除するリカバリポイントを手動で選択できます。

#### セット内のリカバリポイントを削除する方法

- 1 [ツール] ページで、[バックアップ先を管理] をクリックします。
- 2 削除するリカバリポイントセットを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
  - セット内の最初と最後のリカバリポイントを除くすべてを自動的に削除するには、[自動] をクリックします。
  - セット内の削除するリカバリポイントを手動で選択するには、[手動] をクリックします。次に、削除するリカバリポイントを選択します。
  - 選択したセット内のすべてのリカバリポイントを削除するには、[セット内のすべてのリカバリポイントを削除] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックします。

## リカバリポイントのコピー

セキュリティを強化するために、リカバリポイントを他の場所にコピーできます。たとえば、リカバリポイントを、別のハードディスク、ネットワーク上の別のコンピュータ、または DVD や CD などのリムーバブルメディアにコピーできます。その後、作成したコピーを安全な場所に保存できます。

リカバリポイントのアーカイブコピーを作成し、ディスク領域を解放することもできます。たとえば、リカバリポイントを CD や DVD にコピーしてから、元のリカバリポイントを手動で削除できます。リカバリポイントのコピーを検証して、そのコピーがディスク上に存在し、有効であることを確認してください。

### リカバリポイントをコピーする方法

- 1 [ツール] ページで、[バックアップ先を管理] をクリックします。
- 2 リカバリポイントセットまたは単体リカバリポイントを選択し、[コピー] をクリックします。
- 3 コピーするリカバリポイントを選択し、[OK] をクリックします。
- 4 リカバリポイントのコピーウィザードの[ようこそ]のページで、[次へ] をクリックします。
- 5 コピーするリカバリポイントを選択します。

リカバリポイントセットが 1 つのリカバリポイントとして表示されます。リカバリポイントセットに含まれるすべての増分リカバリポイントを表示するには、[すべてのリカバリポイントを表示] を選択します。
- 6 [次へ] をクリックします。
- 7 次のいずれかを実行します。
  - [フォルダ] フィールドに、リカバリポイントをコピーする場所へのパスを入力します。
  - [参照] をクリックしてリカバリポイントをコピーするフォルダを探し、[OK] をクリックします。
- 8 コピーするリカバリポイントの圧縮レベルを選択します。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの圧縮レベル](#)」を参照してください。
- 9 コピーの完了後に、リカバリポイントが有効かどうかを検証する場合は、[作成後のリカバリポイントを検証] を選択します。
- 10 [詳細] をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。

リカバリポイントを複数ファイルに分割して圧縮保存

リカバリポイントを複数の小さいファイルに分割し、各ファイルの最大サイズ (MB) を指定できます。

たとえば、リカバリポイントをバックアップ先から ZIP ディスクにコピーする場合は、ZIP ディスクのサイズに従って 100 MB 以下のファイルサイズを指定します。

パスワードを使用する

このオプションはリカバリポイントにパスワードを設定します。パスワードには標準文字列を使用します。拡張文字列や記号を使用することはできません。ASCII で文字コードの値が 128 以下になる文字を使用してください。

バックアップを復元するとき、またはリカバリポイントの内容を表示するときに、このパスワードの入力を求められます。



暗号化を使用

リカバリポイントデータを暗号化して、リカバリポイントをさらに強力に保護することができます。

次の暗号化レベルを選択できます。

- 標準 (8 文字以上のパスワード)
- 中 (16 文字以上のパスワード)
- 高 (32 文字以上のパスワード)

11 [OK]をクリックします。

12 [次へ]をクリックします。選択したオプションを確認し、[終了]をクリックします。

リカバリポイントのコピーに成功した後は、コンピュータからリカバリポイントを削除できません。

p.142 の「[リカバリポイントセットの削除](#)」を参照してください。

## ワンタイム仮想変換の実行

Symantec Backup Exec System Recovery を使用することにより、物理コンピュータのリカバリポイントを VMware 仮想ディスク、Microsoft 仮想ディスク、または VMware ESX Server に変換できます。仮想ディスクはテストと評価に最適です。

リカバリポイントから作成された仮想ディスクは、次のプラットフォームでサポートされます。

- VMware Workstation 4、5、および 6
- VMware ESX Server 3.0、3.5、3.5i、4.0、と 4.0i
- VMware Server 1
- Microsoft Virtual Server 2005 の R2 以降
- Microsoft Hyper-V 1.0 と 2.0

仮想ディスクへのリカバリポイント変換スケジュールを作成することもできます。

p.151 の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

仮想ディスクへのワンタイムリカバリポイント変換を実行する方法

- 1 [タスク] ページで、[ワンタイム仮想変換] をクリックします。
- 2 作成する仮想ディスクの種類(また、必要に応じてバージョン)を選択し、[次へ] をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
  - ペインの下の方にある[すべてのリカバリポイントを表示]をクリックし、作成日に基づいてリストからリカバリポイントを選択します。

- [表示]で、次のいずれかのリカバリポイントのソースを選択します。

日付	<p>検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ リカバリポイントが検出されない場合、表には何も表示されません。このような場合、ドロップダウンカレンダーを使用して代替の日付を選択できます。</li><li>■ リストからリカバリポイントを選択します。</li></ul>
ファイル名	<p>別のリカバリポイントの場所を参照することができます。たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、またはリムーバブルメディアを参照して、リカバリポイントファイル(.v2i)または増分リカバリポイント(.iv2i)ファイルを選択できます。</p> <p>このオプションを選択して、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ [参照]をクリックして、リカバリポイントを選択し、[開く]をクリックします。</li><li>■ ネットワーク上で保存されているリカバリポイントを選択したら、ネットワーク資格情報を入力します。</li></ul> <p>p.71 の「<a href="#">ネットワーク資格情報について</a>」を参照してください。</p>

## システム

リカバリポイントの保存場所にある現在のシステムインデックスファイルを使います。システムインデックスファイルには、コンピュータのすべてのドライブのリストと、関連付けられた選択可能なリカバリポイントが表示されます。

または、ネットワーク上など、別の場所に存在する代替システムインデックスファイル(.sv2i)を選択できます。システムインデックスファイルを使用することで、複数のリカバリポイントを変換するのにかかる時間が短縮されます。システムインデックスファイルは、リカバリポイントと同時に作成されます。システムインデックスファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。

このオプションを選択して、次のいずれかの操作を実行します。

- [このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用する]をクリックします。  
ドライブ、ソースファイル(.v2i および .iv2i ファイル)、および日付のリストは、コンピュータのリカバリポイントの保存場所にある最新のシステムインデックスファイル(.sv2i)に基づいています。
- [システムインデックスファイルの使用 (\*.sv2i)]をクリックします。  
[参照]をクリックし、代替システムインデックスファイル(.sv2i)を探して選択し、[開く]をクリックします。  
ネットワーク上に保存されているシステムインデックスファイルを選択した場合は、ネットワーク資格情報を入力します。  
p.71 の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。  
リストボックスから変換するリカバリポイントを選択します。

- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 選択した仮想ディスクの形式とバージョン(選択した場合)に基づいて、次のいずれかを実行します。

VMware 仮想ディスクまたは  
Microsoft 仮想ディスクを変換  
形式として選択した場合

- 仮想ディスクのフォルダ  
仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを入力します。
- 参照  
[参照]をクリックし、仮想ディスクファイルを保存するフォルダを選択します。
- ネットワーク資格情報  
ネットワーク上の仮想ディスクのフォルダを選択したら、ネットワーク資格情報を入力します。
- 各ボリュームに 1 つの仮想ディスクを作成  
ボリュームごとに 1 つの仮想ディスクファイルを作成するには、このオプションを選択します。  
このオプションを選択しない場合、各ドライブは変換中にそれぞれのハードディスクドライブ文字の割り当てに対応付けされます。したがって、結果として 1 つの仮想ディスクファイル内に複数のドライブが存在することになります。  
ボリュームが別のディスクに存在する場合、このオプションは利用できません。
- 名前の変更  
表示された仮想ディスクファイルの名前を編集するには、ペインの下部にあるリストでファイル名を選択します。  
[名前の変更]をクリックして、新しいファイル名を入力します。

VMware ESX Server を変換形式として選択した場合

- **ESX Server** 名または IP アドレス  
サーバーの名前または IP アドレスを入力します。
- **ESX Server** の資格情報  
[ESX Server の資格情報] グループボックスで、適切な権限を持つ有効な管理者ユーザー名を入力します。有効なパスワードを入力します。
- 仮想ディスクの保存先  
仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを入力します。
- 名前の変更  
表示された仮想ディスクファイルの名前を編集するには、ペインの下部にあるリストでファイル名を選択します。[名前の変更] をクリックして、新しいファイル名を入力します。

[次へ] をクリックします。

- 変換用の一時的な場所  
ファイルの一時的な場所として使用できる、サーバーの名前または IP アドレスを入力します。
- 一時的な場所の資格情報  
ファイルの一時的な場所としてネットワーク上の場所を選択した場合は、適切な権限を持つ有効な管理者ユーザー名を入力します。有効なパスワードを入力します。

6 [次へ] をクリックします。

7 次のオプションを 1 つ以上選択します。

## Windows Mini-Setup の実行

修復後、コンピュータを再起動するときに **Windows Mini-Setup** を実行する場合は、このオプションを選択します (デフォルト)。

一連のダイアログボックスへの応答のスクリプトを書くテキストベースの応答ファイルが修復中に作成されます。**Mini-Setup** ウィザードが起動すると、この応答が検索され、ウィザードが自動化されます。たとえば、応答ファイルは、ウィザードを介して、ネットワークカードの設定そして他のハードウェアとソフトウェアの設定を自動的にコンピュータに適用できます。

**Windows** をセットアップする場合、60 分以上かかることがある **Windows** のインストールとは違って **Mini-Setup** は約 6 分しかかかりません。エンドユーザー使用許諾契約への同意、プロダクトキー、ユーザー名、会社名の入力などの特定の情報は、応答ファイルを使う **Mini-Setup** によって自動的に適用されます。

代わりに修復の時に次のいずれかの操作をする場合はこのオプションを選択解除します。

- **Mini-Setup** ではなく **Windows** のインストールを実行する場合
- 修復の時に **Mini-Setup** ウィザードによって変更される設定可能なオプションを変更しない場合。これによってコンピュータが修復前の元の状態に確実に修復されます。

**Mini-Setup** について詳しくは **Microsoft** 社のヘルプとサポート **Web** サイトで「**Mini-Setup**」の検索を実行してください。

仮想ディスクを 2 GB の複数の .vmdk ファイルに分割  
仮想ディスクを複数の 2GB の .vmdk ファイルに分割する場合は、このオプションを選択します。

たとえば、仮想ディスクが FAT32 ドライブ (2GB より大きなファイルをサポートしないファイルシステム) に保存されている場合、このオプションを使います。または、仮想ディスクファイルを DVD にコピーしたいが、そのファイルサイズが DVD の容量よりも大きい場合に使います。

**メモ:** このオプションは VMware 専用です。Microsoft 仮想ディスクを変換形式として選択した場合は利用できません。

- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 選択内容の概略を確認します。  
変更が必要な場合は、[戻る]をクリックします。
- 10 [終了]をクリックします。

## 仮想変換ジョブの定義

VMware 仮想ディスクまたは Microsoft 仮想ディスクへのリカバリポイントおよび増分リカバリポイントを変換するスケジュールを作成できます。また VMware ESX Server へリカバリポイントを直接変換することもできます。仮想ディスクはテストと評価に最適です。リカバリポイントから作成された仮想ディスクは、次のプラットフォームでサポートされます。

- VMware Workstation 4、5、および 6
- VMware ESX 3.0、3.5 と 4.0
- VMware ESXi 3.5 と 4.0
- VMware Server 1
- VMware GSX Server 3.x (VMware Server に置き換え)
- Microsoft Virtual Server 2005 の R2 以降
- Microsoft Hyper-V 1.0 と 2.0

スケジュールされた変換では、システムインデックスファイル (.sv2i) を使用してリカバリポイントが仮想ディスクに変換されます。.sv2i ファイルにより、複数のリカバリポイントを変換するのにかかる時間が短縮されます。リカバリポイントが作成されると、.sv2i ファイルと一緒に保存されます。.sv2i ファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元

のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。

また、ワンタイム仮想変換も作成できます。

p.145の「[ワンタイム仮想変換の実行](#)」を参照してください。

p.156の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.156の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。

p.156の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.156の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。

p.157の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

#### 仮想変換ジョブを定義する方法

- 1 [タスク]ページで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 ツールバーで、[新しく定義]をクリックします。
- 3 作成する仮想ディスクの種類(また、必要に応じてバージョン)を選択し、[次へ]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。
  - [このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用する]をクリックします。  
ドライブ、ソースファイル(.v2i および .iv2i ファイル)、および日付のリストは、コンピュータのリカバリポイントの保存場所にある最新のシステムインデックスファイル(.sv2i)に基づいています。
  - [システムインデックスファイルの使用 (\*.sv2i)]をクリックします。  
[参照]をクリックし、代替システムインデックスファイル(.sv2i)を探して選択し、[開く]をクリックします。  
ネットワーク上に保存されているシステムインデックスファイルを選択した場合は、ネットワーク資格情報を入力します。  
p.71の「[ネットワーク資格情報について](#)」を参照してください。  
リストボックスから変換するリカバリポイントを選択します。
- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 選択した仮想ディスクの形式とバージョン(選択した場合)に基づいて、次のいずれかを実行します。



- VMware 仮想ディスクまたは Microsoft 仮想ディスクを変換形式として選択した場合
- 仮想ディスクのフォルダ  
仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを入力します。
  - 参照  
[参照]をクリックし、仮想ディスクファイルを保存するフォルダを選択します。
  - ネットワーク資格情報  
ネットワーク上の仮想ディスクのフォルダを選択したら、ネットワーク資格情報を入力します。
  - 名前の変更  
表示された仮想ディスクファイルの名前を編集するには、ペインの下部にあるリストでファイル名を選択します。  
[名前の変更]をクリックして、新しいファイル名を入力します。
- VMware ESX Server を変換形式として選択した場合
- ESX Server 名または IP アドレス  
サーバーの名前または IP アドレスを入力します。
  - ESX Server の資格情報  
[ESX Server の資格情報]グループボックスで、適切な権限を持つ有効な管理者ユーザー名を入力します。有効なパスワードを入力します。
  - 仮想ディスクの保存先  
仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを入力します。
  - 名前の変更  
表示された仮想ディスクファイルの名前を編集するには、ペインの下部にあるリストでファイル名を選択します。  
[名前の変更]をクリックして、新しいファイル名を入力します。
- [次へ]をクリックします。
- 変換用の一時的な場所  
ファイルの一時的な場所として使用できる、サーバーの名前または IP アドレスを入力します。
  - 一時的な場所の資格情報  
ファイルの一時的な場所としてネットワーク上の場所を選択した場合は、適切な権限を持つ有効な管理者ユーザー名を入力します。有効なパスワードを入力します。

- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 変換ジョブの名前を入力します。または、デフォルトの名前を使用することもできます。
- 9 次のオプションを 1 つ以上選択します。

#### Windows Mini-Setup の実行

修復後、コンピュータを再起動するときに **Windows Mini-Setup** を実行する場合は、このオプションを選択します (デフォルト)。

一連のダイアログボックスへの応答のスクリプトを書くテキストベースの応答ファイルが修復中に作成されます。**Mini-Setup** ウィザードが起動すると、この応答が検索され、ウィザードが自動化されます。たとえば、応答ファイルは、ウィザードを介して、ネットワークカードの設定そして他のハードウェアとソフトウェアの設定を自動的にコンピュータに適用できます。

**Windows** をセットアップする場合、60 分以上かかることがある **Windows** のインストールとは違って **Mini-Setup** は約 6 分しかかかりません。エンドユーザー使用許諾契約への同意、プロダクトキー、ユーザー名、会社名の入力などの特定の情報は、応答ファイルを使う **Mini-Setup** によって自動的に適用されます。

代わりに修復の時に次のいずれかの操作をする場合はこのオプションを選択解除します。

- **Mini-Setup** ではなく **Windows** のインストールを実行する場合
- 修復の時に **Mini-Setup** ウィザードによって変更される設定可能なオプションを変更しない場合。これによってコンピュータが修復前の元の状態に確実に修復されます。

**Mini-Setup** について詳しくは **Microsoft** 社のヘルプとサポート **Web** サイトで「**Mini-Setup**」の検索を実行してください。

仮想ディスクを 2 GB の複数の .vmdk ファイルに分割  
仮想ディスクを複数の 2GB の .vmdk ファイルに分割する場合は、このオプションを選択します。

たとえば、仮想ディスクが FAT32 ドライブ (2GB より大きなファイルをサポートしないファイルシステム) に保存されている場合、このオプションを使います。または、仮想ディスクファイルを DVD にコピーしたいが、そのファイルサイズが DVD の容量よりも大きい場合に使います。

**メモ:** このオプションは VMware 専用です。Microsoft 仮想ディスクを変換形式として選択した場合は利用できません。

10 [次へ]をクリックします。

11 [変換時間]パネルで、次のいずれかを選択し、[次へ]をクリックします。

スケジュールなし  
変換を自ら手動でのみ実行する場合に、このオプションを選択します。

毎週  
選択した曜日の指定した開始時刻に変換を実行する場合は、このオプションを選択します。

- 1日に複数回実行  
一日の間に複数回リカバリポイントを変換する場合は、このオプションを選択してから次のオプションを指定します。
  - 変換の間隔  
次の変換までの経過時間を選択します。
  - 回数  
指定した開始時刻からの変換の実行回数を指定します。

毎月  
指定した月の指定した時刻に変換を実行するには、このオプションを選択します。

一度だけ実行  
指定した日付と時刻に一度だけ変換を実行するには、このオプションを選択します。

12 新しい変換ジョブをすぐに実行する場合は、[今すぐに変換を実行]をクリックします。

13 [終了]をクリックします。

## 既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合

変換ジョブを作成した後、[今すぐ実行]を使って、仮想ディスク形式にオンデマンドのリカバリポイント変換を作成することができます。手動変換がただちに開始されます。

### 既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する方法

- 1 [タスク]ページで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 すぐに実行する変換ジョブの名前を選択します。
- 3 ツールバーで、[今すぐ実行]をクリックします。

## 仮想変換ジョブのプロパティの表示

選択した仮想変換のジョブのプロパティを使って、設定、オプション、および割り当て済みのスケジュールの概略を確認することができます。

### 仮想変換ジョブのプロパティを表示する方法

- 1 [タスク]ページで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 プロパティを表示する変換ジョブの名前を選択します。
- 3 タスクメニューで、[プロパティ]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

## 仮想変換ジョブの進行状況の表示

実行中の仮想変換の進行状況を表示して、変換が終了するまでの残り時間を確認できます。

### 仮想変換ジョブの進行状況を表示する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
  - 表示メニューで[進行状況とパフォーマンス]をクリックします。
  - [タスク]ページで、[仮想変換の実行または管理]をクリックし、表示メニューで[進行状況とパフォーマンス]をクリックしてください。

## 仮想変換ジョブの編集

既存の変換ジョブのスケジュール部分を編集できます。またはジョブのすべての部分を編集できます。

### 仮想変換ジョブを編集する方法

- 1 [タスク] ページで、[仮想変換の実行または管理] をクリックします。
- 2 編集する変換ジョブの名前を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。

スケジュールを変更する方法

ツールバーで、[スケジュールを変更] をクリックします。

変換スケジュールを変更して、[OK] をクリックします。

ジョブの設定を変更する方法

ツールバーで、[設定を編集] をクリックします。

ウィザードの各ペインで必要な変更を行い、次に[終了] をクリックしてください。

## 仮想変換ジョブの削除

不要になり、使わなくなった変換ジョブは削除できます。

変換ジョブを削除しても、リカバリポイントや仮想ディスクは保存場所から削除されません。変換ジョブのみが削除されます。

### 仮想変換ジョブを削除する方法

- 1 [タスク] ページで、[仮想変換の実行または管理] をクリックします。
- 2 削除する 1 つ以上の変換ジョブの名前を選択します。
- 3 ツールバーで、[削除] をクリックします。
- 4 [はい] をクリックして削除を確定します。

## ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について

ドライブベースのバックアップではハードディスクドライブ全体が取得されるため、通常、リカバリポイントのサイズは、ファイルおよびフォルダのバックアップ中に取得されるデータよりもかなり大きくなります。ただし、ファイルおよびフォルダのバックアップの場合も、データを管理しないと多くのディスク領域が占有される可能性があります。たとえば、音声ファイル、ビデオファイル、写真は、通常、大きいファイルです。

保存するバックアップファイルのバージョンの数を決定する必要があります。ファイルの内容を変更する頻度とバックアップを実行する頻度によって、バージョンの数を決定できません。

## 保存されているファイルおよびフォルダのバックアップデータの表示

まず、現在保存しているファイルおよびフォルダのバックアップデータの総量を表示します。

**保存されているファイルおよびフォルダのバックアップデータを表示する方法**

- 1 [ツール]ページで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 他のバックアップ先を選択するには、[ドライブ]リストから、バックアップ先として使用するドライブを選択します。
- 3 [バックアップ先を管理]ウィンドウの下部で、[ファイルとフォルダの保存に使用される領域]フィールドを参照し、現在使用されている保存領域を確認します。

## 保存するファイルのバージョン数を制限する

保存するバックアップファイルのバージョン数を制限して、ファイルおよびフォルダのバックアップデータを管理できます。このような保守を行うことで、ファイルが大きい場合（音声ファイルやビデオファイルなど）に、必要なディスク領域を大幅に減らすことができます。

**保存するファイルのバージョン数を制限する方法**

- 1 [ツール]ページで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 [設定]をクリックします。
- 3 [ファイルとフォルダのバックアップのファイルバージョンを制限]を選択し、1から99までの数値を入力します。
- 4 [バックアップ保存領域のディスク使用率を監視]を選択し、リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータの両方に使用されるディスク領域の総量を指定します。  
p.159の「[バックアップデータの管理の自動化](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

## ファイルおよびフォルダのバックアップからの手動によるファイルの削除

バックアップ先に保存されているファイルを手動で削除できます。

**ファイルおよびフォルダのバックアップからファイルを手動で削除する方法**

- 1 [ホーム]ページまたは[タスク]ページで、[ファイルを修復]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
  - [修復するファイルを検索]フィールドに、削除するファイルの名前を入力し、[検索]をクリックします。
  - ファイルの名前がわからない場合、[検索]をクリックします。バックアップされているすべてのファイルのリストが返されるので、ファイルを参照します。

- 3 [すべてのバージョンを表示]をクリックし、ファイルおよびフォルダのバックアップデータに存在するファイルのすべてのバージョンを表示します。
- 4 削除するファイルを1つ以上選択します。
- 5 右クリックして、[削除]を選択します。

## ファイルまたはフォルダのバージョンの確認

Windows エクスプローラを使用して、ファイルおよびフォルダのバックアップに含まれる利用可能なバージョンの情報を表示できます。

ファイルおよびフォルダのバックアップデータに保存する各ファイルやフォルダに対して、保存するバージョンの数を制限できます。

p.158 の「[保存するファイルのバージョン数を制限する](#)」を参照してください。

### ファイルまたはフォルダのバージョンを確認する方法

- 1 Windows エクスプローラを開きます。
- 2 ファイルおよびフォルダのバックアップに含まれるファイルを選択します。
- 3 ファイルを右クリックして、[バージョンを表示]を選択します。

## バックアップデータの管理の自動化

Backup Exec System Recovery は、バックアップの保存領域を監視し、保存領域の空き容量がなくなると通知を行います。また、しきい値を超えた場合、古いリカバリポイントおよび古いバージョンのファイルを、ファイルおよびフォルダのバックアップから自動的に削除できます。しきい値を指定しない場合は、ディスクの全容量の90%に達するとBackup Exec System Recovery から通知されます。

### バックアップデータの管理を自動化する方法

- 1 [ツール]ページで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 [ファイルとフォルダのバックアップのファイルバージョンを制限]を選択し、1から99までの数値を入力します。
- 3 [バックアップ保存領域のディスク使用率を監視]を選択し、スライダをドラッグし、リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータに使用されるディスク領域の総量を制限します。
- 4 次のいずれかを実行します。
  - 容量を超過したときに通知するだけで、その他の操作は不要な場合、[バックアップの保存領域がしきい値を超過したら警告する]を選択します。
  - 通知せずに、Backup Exec System Recovery でバックアップデータを自動的に管理する場合、[保存場所を自動的に最適化]を選択します。

このオプションを選択すると、**Backup Exec System Recovery** は、古いリカバリポイントを自動的に削除し、設定したしきい値にファイルのバージョン数を制限します。

- 5 次にバックアップを実行するまで変更を反映しない場合、[次のバックアップまで変更を遅延]を選択します。
- 6 [OK]をクリックします。

## バックアップ先の移動

リカバリポイントのバックアップ先を変更し、既存のリカバリポイントを新しい場所に移動できます。たとえば、バックアップデータの保存用に外付けハードディスクドライブを取り付けるとします。この場合、1つ以上のバックアップのバックアップ先を、新しいドライブに変更できます。

新しい場所を選択するとき、既存のリカバリポイントを新しいバックアップ先に移動することもできます。これ以降、選択したバックアップの保存に使用されるリカバリポイントは、新しい場所に作成されます。

---

**メモ:** バックアップ先を新しい内蔵または外付けハードディスクドライブに移動する場合、作業を進める前に、ドライブが正しく取り付けられていることまたは接続されていることを確認します。

---

### バックアップ先を移動する方法

- 1 [ツール]ページで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 [バックアップ先を管理]ウィンドウの[ドライブ]リストから、移動するバックアップ先を含むドライブを選択します。
- 3 [移動]をクリックします。
- 4 [バックアップ先の移動]ダイアログボックスで、次のいずれかを実行します。
  - [新しいバックアップ先]フィールドに、新しいバックアップ先へのパスを入力します。
  - [参照]をクリックして、新しいバックアップ先を選択し、[OK]をクリックします。
- 5 定義されているバックアップのうち、新しいバックアップ先を使用するものを選択します。

定義されているバックアップのうち、移動しないバックアップの選択を解除します。
- 6 このバックアップ先を、今後新しく定義するバックアップのデフォルトのバックアップ先として使用する場合、[デフォルトのバックアップ先として保存]を選択します。
- 7 [OK]をクリックします。



- 8 既存のリカバリポイントを新しいバックアップ先に移動するには、[リカバリポイントを移動]を選択します。
  - [各バックアップの最後のリカバリポイントを移動し、それ以外を削除]を選択します。
  - [すべてのリカバリポイントを新しい保存先に移動]を選択します。
- 9 ファイルおよびフォルダのバックアップデータを新しいバックアップ先に移動する場合、[ファイルのバックアップデータを移動]をクリックします。

元のバックアップ先にファイルおよびフォルダのバックアップデータがない場合、[ファイルのバックアップデータを移動]オプションは選択できません。
- 10 [OK]をクリックします。



# ファイル、フォルダ、またはドライブ全体の修復

この章では以下の項目について説明しています。

- [消失したデータの修復について](#)
- [ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用したファイルとフォルダの修復](#)
- [リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復](#)
- [セカンダリドライブの修復](#)
- [LightsOut Restore を使用した復元](#)

## 消失したデータの修復について

Backup Exec System Recovery は、リカバリポイントまたはファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用して、消失したファイル、フォルダ、ドライブ全体を復元できます。

消失したファイルおよびフォルダを修復するには、リカバリポイントまたはファイルおよびフォルダのバックアップデータが必要です。ドライブ全体を修復するには、リカバリポイントが必要です。消失したファイルまたはフォルダに最近行われた変更を修復するには、変更が行われた時期のバックアップデータが必要になります。

## ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用したファイルとフォルダの修復

ファイルおよびフォルダのバックアップを定義してあれば、ファイルを修復する必要がある場合に、最近のファイルおよびフォルダのバックアップを使用してファイルを修復できます。

Backup Exec System Recovery には、修復するファイルを検索できる検索ツールがあります。

### ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用してファイルとフォルダを修復する方法

- 1 [ホーム] ページまたは [タスク] ページで、[ファイルを修復] をクリックします。
- 2 [ファイルを修復] ウィンドウの左ペインで、検索方法として [ファイルやフォルダ] を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
  - [修復するファイルを検索] 検索ボックスに、復元するファイルまたはフォルダの名前のすべてまたは一部を入力し、[検索] をクリックします。  
たとえば、名前に **recipe** という語を含むファイルまたはフォルダ (**Chocolate Cheesecake Recipes.doc**、**Cathy Read Recipes.xls**、**Recipes for Success.mp3** など) を返すには、**recipe** と入力します。
  - [詳細な検索] をクリックし、検索条件を入力します。次に、[検索] をクリックします。  
標準の検索テキストボックスに戻るには、[基本検索] をクリックします。
- 4 次のいずれかの方法を使用して、検索結果のリストボックスから復元するファイルを選択します。

1 つのファイルを選択する方法	ファイルを 1 回クリックします。
すべてのファイルを選択する方法	<b>Ctrl+A</b> を押します。
隣接しているファイルをまとめて選択する方法	一番上のファイルをクリックし、 <b>Shift</b> キーを押しながら、グループの最後のファイルをクリックします。
隣接していないファイルをまとめて選択する方法	<b>Ctrl</b> キーを押しながら、ファイルを選択します。

- 5 [ファイルを修復] をクリックします。
- 6 [ファイルを修復] ダイアログボックスで、次のいずれかを実行します。
  - バックアップ時にファイルが保存されていた元のフォルダにファイルを復元する場合は、[元のフォルダ] をクリックします。  
フォルダ内のファイルを上書きする場合は、[既存ファイルの上書き] を選択します。このオプションを選択しなかった場合は、ファイル名に番号が追加されます。既存のファイルは変更されません。

---

**注意:** [既存ファイルの上書き] オプションを指定すると、現在のファイル (または指定した場所に保存されている同じ名前のファイル) は復元したファイルに置き換えられます。

---

- **Windows** デスクトップに作成される [修復されたファイル] フォルダにファイルを復元する場合は、[デスクトップの [修復されたファイル] フォルダ] をクリックします。  
このフォルダは、復元中に **Backup Exec System Recovery** によって作成されます。
  - [代替フォルダ] をクリックし、ファイルを復元する場所へのパスを入力します。
- 7 [修復] をクリックします。
  - 8 既存のファイルを置き換えることを確認するメッセージが表示されたら、修復するファイルが正しいことを確認して、[はい] をクリックします。
  - 9 [OK] をクリックします。

## リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復

ドライブベースのバックアップを定義して実行している場合、リカバリポイントを使用してファイルやフォルダを復元できます。

### リカバリポイントを使用してファイルとフォルダを修復する方法

- 1 [ホーム] ページまたは [タスク] ページで、[ファイルを修復] をクリックします。
- 2 [ファイルを修復] ウィンドウの左ペインで、検索方法として [リカバリポイント] を選択します。
- 3 [リカバリポイント] フィールドで選択されているものとは別のリカバリポイントを使用する場合は、[変更] をクリックします。

---

**メモ:** **Backup Exec System Recovery** によってリカバリポイントが検出されない場合は、[リカバリポイントを選択] ダイアログボックスが自動的に表示されます。

---

[リカバリポイントを選択] ダイアログボックスで、[表示] をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。

日付	検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。 リカバリポイントが検出されなかった場合は、表には何も表示されません。この場合、他の [表示] オプションを選択してください。
----	--

ファイル名 外付けハードディスクドライブ (USB) やリムーバブルメディアなど、別の場所を参照して、リカバリポイント(.v2i)ファイルを選択します。

このオプションを選択して、次の操作を実行します。

- [参照]をクリックして、リカバリポイント(.v2iファイル)を選択し、[開く]をクリックします。
- ネットワーク上の場所を選択する場合は、ネットワーク資格情報を入力します。  
p.71の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
- [終了]をクリックします。

システム コンピュータ上のすべてのドライブが一覧表示され、関連付けられているリカバリポイントが示されます。システムインデックスファイル(.sv2i)も選択できます。

このオプションを選択して、次の操作を実行します。

- [参照]をクリックして、リカバリポイント(.sv2i)を選択し、[開く]をクリックします。
- ネットワーク上の場所を選択する場合は、ネットワーク資格情報を入力します。  
p.71の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
- 修復するリカバリポイントを選択します。  
必要に応じて、リストでリカバリポイントの追加、変更、または削除を行います。
- [終了]をクリックします。

- 4 [修復するファイルを検索]フィールドに、復元するファイルまたはフォルダの名前のすべてまたは一部を入力し、[検索]をクリックします。

たとえば、名前に **recipe** という語を含むファイルまたはフォルダ (**Chocolate Cheesecake Recipes.doc**、**Cathy Read Recipes.xls**、**Recipes for Success.mp3** など)を返すには、**recipe** と入力します。

- 5 次のいずれかの方法を使用して、復元するファイルのリストから復元するファイルを選択します。

1つのファイルを選択する方法                      ファイルを1回クリックします。

すべてのファイルを選択する方法                      **Ctrl+A**を押します。

隣接しているファイルをまとめて選択する方法      一番上のファイルをクリックし、**Shift**キーを押しながら、グループの最後のファイルをクリックします。

隣接していないファイルをまとめて選択する方法      **Ctrl**キーを押しながら、ファイルを選択します。

- 6 [ファイルを修復]をクリックします。
  - 7 [ファイルを修復]ダイアログボックスで、次のいずれかを実行します。
    - バックアップ時にファイルが保存されていた元のフォルダにファイルを復元する場合は、[元のフォルダ]をクリックします。  
フォルダ内のファイルを上書きする場合は、[既存ファイルの上書き]を選択します。このオプションを選択しなかった場合は、ファイル名に番号が追加されます。既存のファイルは変更されません。
- 
- 注意:** [既存ファイルの上書き]にチェックマークを付けると、現在のファイル(または指定した場所に保存されている同じ名前のファイル)は復元したファイルに置き換えられます。
- 
- **Windows** デスクトップに作成される[修復されたファイル]という新しいフォルダにファイルを復元する場合は、[デスクトップの[修復されたファイル]フォルダ]をクリックします。
  - [代替フォルダ]をクリックし、復元するファイルを保存する別の場所へのパスを指定します。
- 8 [修復]をクリックします。
  - 9 既存のファイルを置き換えることを確認するメッセージが表示されたら、修復するファイルが正しいことを確認して、[はい]をクリックします。
  - 10 [OK]をクリックします。

## リカバリポイントに保存されたファイルやフォルダを開く

復元するファイルが不明な場合は、**Recovery Point Browser**を使用してファイルを検索し、開いて内容を確認できます。その保存場所から、**Recovery Point Browser**でファイルやフォルダを復元することもできます。

p.135 の「[リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)」を参照してください。

## 必要なファイルまたはフォルダの検索について

リカバリポイントを参照しても復元するファイルまたはフォルダが見つからない場合は、**Backup Exec System Recovery** エクスプローラ機能を使用できます。この機能は、リカバリポイントが作業ドライブであるかのようにドライブ文字の割り当て(リカバリポイントのマウント)を行います。次に、**Windows** エクスプローラの検索機能を使用して、ファイルを検索できます。ファイルをドラッグアンドドロップして復元することもできます。

p.133 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

## セカンダリドライブの修復

セカンダリドライブ上のデータが失われた場合、そのドライブに対応する既存のリカバリポイントを使用して、データを復元できます。セカンダリドライブとは、オペレーティングシステムがインストールされているドライブ以外のドライブです。

---

**メモ:** システムドライブ (通常は C ドライブ) を修復することもできます。

---

たとえば、コンピュータの D ドライブにあるデータが失われた場合は、データが失われたときよりも前の状態に D ドライブを復元できます。

p.177 の「[コンピュータの修復について](#)」を参照してください。

ドライブを修復するには、修復するドライブが含まれるリカバリポイントが必要です。不明な場合は、[状態] ページで、利用できるリカバリポイントを確認します。

p.124 の「[\[状態\] ページからのバックアップ保護の監視](#)」を参照してください。

---

**メモ:** 作業を進める前に、復元するドライブ上で開いているすべてのアプリケーションとファイルを閉じてください。

---

**警告:** ドライブを修復すると、リカバリポイントの復元先であるドライブ上のすべてのデータが、リカバリポイント内のデータに置き換えられます。ドライブ上でデータを変更している場合、ドライブの修復に使用するリカバリポイントの作成以降に行った変更は、すべて失われます。たとえば、リカバリポイントの作成後にドライブ上に新しいファイルを作成した場合、そのファイルは修復されません。

---

### ドライブを修復する方法

- 1 [タスク] ページで、[コンピュータを修復] をクリックします。
- 2 リカバリポイントを選択し、[今すぐ修復] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックします。
- 4 [はい] をクリックします。

### ドライブの修復をカスタマイズする方法

- 1 [タスク] ページで、[コンピュータを修復] をクリックします。
- 2 リカバリポイントを選択し、[今すぐ修復] をクリックします。
- 3 [カスタム] をクリックし、ドライブの修復ウィザードを開始します。
- 4 [次へ] をクリックします。
- 5 次のいずれかを実行します。



- [次へ]をクリックし、選択したリカバリポイントを使用します。
  - [参照]をクリックして別のリカバリポイントを選択し、[次へ]をクリックします。  
ユーザー認証が必要なネットワーク上のリカバリポイントにアクセスする必要がある場合は、ユーザー名とパスワードを入力し、[次へ]をクリックします。
- 6 復元するドライブを選択し、[次へ]をクリックします。
- リカバリポイントの復元に必要な空き領域がドライブ上で足りない場合は、**Shift** キーを押しながら選択すれば、同じハードディスク上に存在する複数の連続した復元先を選択できます。
- 7 リカバリポイントがパスワード保護されている場合は、[パスワード]フィールドにパスワードを入力し、[OK]をクリックします。
- 8 必要な修復オプションを選択してください。
- 利用可能なオプションは、選択した復元先によって異なります。
- p.169 の「[修復オプション](#)」を参照してください。
- 9 [次へ]をクリックして、選択内容を確認します。
- 10 [終了]をクリックし、そして[はい]をクリックしてください。
- ウィザードが **Windows** で修復を行うためにドライブをロックできない場合は(通常は、プログラムがドライブを使用中であるため)、ドライブが使用されないように、ドライブを使用している可能性があるファイルやアプリケーションを終了してから[再試行]をクリックします。
- [再試行]オプションが失敗した場合、**Windows** でドライブの強制的なロックが試行されるように、[無視]をクリックします。[無視]オプションが失敗した場合、修復を続けるために、メッセージに従って **Symantec Recovery Disk CD** を挿入し、手動で修復環境を起動する必要がある場合があります。修復が完了すると、コンピュータは自動的に再起動します。

## 修復オプション

修復のために指定できるオプションを次の表に示します。

オプション	説明
復元前にリカバリポイントを検証	復元する前に、リカバリポイントが有効であるか、または破損しているかを検証します。  このオプションを有効にすると、修復の所要時間が大幅に延びます。
ファイルシステムのエラーを確認	リカバリポイントの復元後に、復元したドライブにエラーがないかどうかをチェックします。

オプション	説明
復元されたドライブのサイズを変更	ターゲットドライブの空き領域のサイズに合わせてドライブを自動的に拡大します。
ドライブをアクティブ (OS ブート用) に設定	復元したドライブをアクティブパーティション (コンピュータの起動ドライブなど) に設定します。  オペレーティングシステムがインストールされているドライブを復元している場合は、このオプションを選択してください。
元のディスク署名を復元	ハードディスクドライブの物理ディスク署名を復元します。  ディスク署名は、 <b>Backup Exec System Recovery</b> がサポートするすべての <b>Windows</b> オペレーティングシステムで用いられています。ディスク署名は、ハードディスクドライブの使用に必要です。  次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ コンピュータのドライブ文字が非定型である (C、D、E など以外の文字が割り当てられている場合)。</li><li>■ リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元している。</li></ul>
パーティションの種類	パーティションの種類を次のように設定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ 基本パーティション: ハードディスクの基本パーティションは最大 4 つに制限されているため、復元の結果ドライブ内のパーティションが 4 つ以下である場合に、[基本パーティション] が選択できます。</li><li>■ 論理パーティション: 5 つ以上のパーティションが必要な場合は、[論理パーティション] を選択します。ハードディスクには、最大容量を超えない範囲で、最大 3 つの基本パーティションに加えて任意の数の論理パーティションが作成できます。</li></ul>
ドライブ文字	パーティションにドライブ文字を割り当てます。

## LightsOut Restore を使用した復元

LightsOut 機能を使用して復元を実行する前に正規版ライセンスで **Symantec Backup Exec System Recovery** をインストールする必要があります。この機能には試用または評価期間はありません。

**Symantec Backup Exec System Recovery** の **LightsOut Restore** 機能は、ファイルシステムが正常に動作している場合は、コンピュータの現在の状態にかかわらず、管理者

が離れた場所からコンピュータを復元することを可能にします。このオプションはオペレーティングシステムのパーティションのフォルダから Symantec 修復環境をブートする方法を提供します。このオプションは、pcAnywhere、Windows ブートメニュー、RILOとDRACのようなハードウェアデバイスの概念に基づき開発されており、管理者はブート処理の間に離れた場所からシステムを制御できます (Windows ブートメニューからの項目の選択を含む)。ハードウェア構成によっては、サーバーのリモート接続機能と Symantec 修復環境を使用して、Web ブラウザを介してリモートサーバーでシステム復元を完了するのに LightsOut Restore を使うことができます。このオプションを使用することで、復元を実行するためにコンピュータに物理的にアクセスするためにかかる時間を節約します。

LightsOut Restore は設定されるとき、システムパーティションのファイルシステムに Symantec 修復環境を直接インストールし、Windows ブートメニュー内に Symantec 修復環境のブートオプションを配置します。このブートメニューオプションが選択されると、システムはシステムパーティションにインストールされたファイルを使用して Symantec 修復環境を直接ブートします。

---

**メモ:** LightsOut Restore 機能を実行するには、少なくとも 1 GB のメモリが必要です。

---

LightsOut Restore を設定し、ブートメニューオプションを追加したら、ハードウェアデバイスを使って離れた場所からシステムに接続できます。接続したら、電源を入れるかまたはシステムを再起動し、ブートメニューから修復環境を選択できます。その後、システムは修復環境をブートします。

デフォルトでは、修復環境が LightsOut Restore の一部としてブートするとき、自動的に pcAnywhere Thin Host が起動されます (これは LightsOut Restore ウィザードを通して変更できます)。pcAnywhere を使って Thin Host に接続し、リモートで修復環境を使ってファイルかパーティション全体を復元できます。

## LightsOut Restore 処理の概略

次は、基本的な LightsOut Restore 処理の概略です。

1. 管理に使われる中央システム (ヘルプデスクのコンピュータなど) に pcAnywhere をインストールします。
2. すべてのサーバーが、RILO や DRAC などのハードウェアデバイスを通じて離れた場所から管理できることを確認します。
3. 保護する必要があるサーバーに Symantec Backup Exec System Recovery をインストールし、必要なリカバリポイントを作成します。
4. Windows のスタートメニューで [プログラム]、[Symantec]、[Backup Exec™ System Recovery 2010] を選択することによって LightsOut Restore ウィザードを実行してください。これによって、Symantec 修復環境がローカルファイルシステムにインストールされ、Windows ブートメニューに、この環境を起動するための項目が追加されます。

5. ファイルかシステムの修復が必要な場合は、**RILO** または **DRAC** デバイスを使ってリモートサーバーに接続し、電源を入れるかまたはシステムを再起動します。
6. リモートサーバーのブート処理中に、ブートメニューから **Symantec** 修復環境を選択してください。すると、リモートサーバーで **Symantec** 修復環境がブートします (この時点で **RILO** または **DRAC** による接続は切断されます)。Symantec 修復環境を起動すると、**LightsOut Restore** ウィザードで無効にした場合を除き、**pcAnywhere Thin Host** が自動的に起動します。
7. **pcAnywhere** を使用してリモートサーバーの **pcAnywhere Thin Host** に接続します。
8. 修復環境を使って、**pcAnywhere** から個々のファイル、またはパーティション全体を復元します。

## LightsOut Restore ウィザードの起動

まだ **Symantec Backup Exec System Recovery** のライセンスを取得していなければ、最初に **LightsOut Restore** ウィザードを実行する時にライセンスファイルか製品のライセンスキーのインストールを求めるプロンプトが表示されます。

### LightsOut Restore ウィザードの起動

- 1 **Windows** で、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec]、[Backup Exec™ System Recovery 2010]、[LightsOut Restore のセットアップ]の順にクリックします。
- 2 製品のライセンスが取得されていない場合は、[ライセンスファイルをインストールする]ダイアログボックスが表示されます。次のいずれかを実行します。
  - ライセンスファイルがある場合は、その場所を参照してください。
  - **Symantec Backup Exec System Recovery** に付属のシリアル番号がある場合は、[ライセンスを取得]をクリックしてください。
  - ライセンスファイルがなければ、製品を購入するために[今すぐ購入]をクリックしてください。
  - 製品のライセンスキーを受け取ったら、適切なフィールドにキーを入力してください。
- 3 前の手順でどのオプションをクリックしたかに応じて、[アクティブ化]をクリックするか、または[後で]をクリックします。
- 4 **Symantec Recovery Disk** のソースの場所を指定するように求められることがあります。**Symantec Backup Exec System Recovery** の製品 CD を使うことができます。場所を指定し、次に[次へ]をクリックしてください。

- 5 [オプション]ダイアログボックスで、ブートメニューが表示される時間を指定できます。デフォルトは 10 秒間です。  
 [Symantec pcAnywhere を有効にする]チェックボックスを選択したままにすると、ネットワーク接続が自動的に開始され、pcAnywhere がロードされます。このチェックボックスのチェックマークを外した場合は、pcAnywhere は自動的に開始されません。
- 6 使いたい IP アドレスのタイプを選択し、次に[次へ]をクリックしてください。
- 7 Symantec 修復環境でサポートされないネットワークドライブとストレージドライブのリストが示されることがあります。現在の Windows のインストールから Symantec 修復環境へコピーするネットワークドライブの横にあるチェックボックスを選択し、見つからないストレージドライブのリストを確認し、次に[次へ]をクリックします。
- 8 見つからないストレージドライブとネットワークドライブのファイルの場所を参照してください。

---

**メモ:** 見つからないネットワークドライブとストレージドライブの場所には、目的のドライブのインストールパッケージが完全に抽出されているパスを指定する必要があります。見つからないストレージドライブが複数ある場合は、見つからないドライブごとに LightsOut Restore ウィザードをもう一度実行する必要があります。また、選択するドライブは Windows Server 2003 との互換性が必要です。

---

- 9 [次へ]をクリックします。
- 10 選択したオプションの概略画面が表示されます。オプションを変更する必要がある場合は[戻る]をクリックします。または選択内容に問題がない場合は[終了]をクリックします。  
 ファイルは Symantec Recovery Disk からコピーされます。コピーが完了した時、LightsOut Restore が正常にインストールされたことを示すダイアログボックスが表示されます。
- 11 [OK]をクリックします。

## Symantec Recovery Disk 用の LightsOut Restore オプション

次の表は Symantec Recovery Disk 用の LightsOut Restore オプションを記述したものです。

オプション	説明
ネットワークサービスを自動的に開始	LightsOut Restore によってコンピュータを修復するときに、ネットワーク接続を自動的に開始させる場合は、このオプションを選択します。

オプション	説明
動的 IP	ネットワーク構成を追加しなくてもネットワーク接続ができるようにするには、このオプションを選択します。復元するときにネットワーク上で DHCP サーバーが利用可能であることがわかっている場合、このオプションをクリックできます。
静的 IP	特定のネットワークアダプタと固有のアドレスが設定されているネットワークに接続するには、このオプションを選択します。修復するときに DHCP サーバー (または DHCP サーバーが利用不能になっている) ことがわかっている場合は、このオプションを選択します。
Symantec pcAnywhere を自動的に開始	<p>Symantec 修復環境を起動するときに、Symantec pcAnywhere Thin Host を自動的に起動させるには、このオプションを選択します。システム復元のトラブルシューティングに役立ちます。</p> <p>[設定] をクリックして、pcAnywhere のログオン資格情報と次の省略可能なパラメータを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ ホスト名 [ホスト名] フィールドに、ホストに対して使用する名前を入力します。ホスト名をコンピュータと同じ名前に設定する場合は、このボックスを空白にしておくことができます。</li><li>■ 暗号化レベル ホストとリモートコンピュータ間のデータストリームを暗号化するには、[暗号化レベル] リストで次のいずれかを選択します。<ul style="list-style-type: none"><li>■ なし ホストとリモートコンピュータ間で、データストリームの暗号化が行われません。</li><li>■ pcAnywhere 第三者が容易に解読できないように、数学アルゴリズムを使用してデータをスクランブル処理します。 このオプションは、pcAnywhere がサポートしているあらゆるオペレーティングシステムで利用可能です。</li><li>■ 共通 暗号キーを使用してデータをエンコードおよびデコードします。 このオプションは、Microsoft CryptoAPI をサポートしているあらゆる Windows オペレーティングシステムで利用可能です。</li></ul></li></ul>

## LightsOut Restore ウィザードを使用した再設定

オプションを再設定する必要がある場合は LightsOut Restore ウィザードを再び実行できます。

### LightsOut Restore Option ウィザードを使用した再設定

- 1 Windows で、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec]、[Backup Exec™ System Recovery 2010]、[LightsOut Restore のセットアップ]の順にクリックします。
- 2 ウィザードの画面で必要な変更を行い、次に[終了]をクリックしてください。
- 3 すべてのファイルを再度コピーする場合は[はい]をクリックしてください。またはシステムの更新に必要な変更のみを行うには[いいえ]をクリックしてください。





# コンピュータの修復

この章では以下の項目について説明しています。

- [コンピュータの修復について](#)
- [Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動](#)
- [コンピュータを修復する準備](#)
- [コンピュータの修復](#)
- [仮想ディスクファイルからのコンピュータの修復](#)
- [Restore Anyware を使用した復元](#)
- [Symantec Recovery Disk によるファイルとフォルダの修復](#)
- [Symantec Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)
- [リカバリポイントとドライブのプロパティの表示について](#)
- [サポートユーティリティについて](#)

## コンピュータの修復について

Windows が正常に起動または実行しない場合、Symantec Recovery Disk CD と利用可能なリカバリポイントまたはリカバリポイントから作成した仮想ディスクを使用して、コンピュータを修復できます。

---

**メモ:** Windows を起動でき、復元するドライブがセカンダリドライブ (システムドライブ以外のドライブ、またはオペレーティングシステムがインストールされているドライブ) の場合、Windows 内からドライブを復元できます。

---

Symantec Recovery Disk CD を使用して修復環境を実行し、一時的に Backup Exec System Recovery の修復機能にアクセスできます。たとえば、コンピュータの修復ウィザードにアクセスしてコンピュータを再起動し、以前の使用可能な状態にすることができます。

---

**メモ:** Backup Exec System Recovery をコンピュータ製造元から購入した場合、修復環境の一部の機能が利用不能な場合があります。たとえば、製造元によってコンピュータのハードディスク上に修復環境がインストールされている場合などです。また、製造元によって、修復環境を起動するためのキーがキーボード上で割り当てられていることもあります。コンピュータを再起動した後、コンピュータ画面に指示が表示されるのを待つか、製造元の説明書を参照してください。

---

## Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動

Symantec Recovery Disk CD を使用すると、Windows オペレーティングシステムを実行できなくなったコンピュータも起動できます。Symantec Recovery Disk は Backup Exec System Recovery に付属します。Symantec Recovery Disk CD を使用してコンピュータをブートすると、簡易バージョンの Windows が起動し、修復環境を実行します。修復環境で、Backup Exec System Recovery の修復機能にアクセスできます。

---

**メモ:** Symantec Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品 CD に含まれるか、または別の CD として提供されます。Symantec Recovery Disk が含まれている CD は安全な場所に保管してください。『Symantec Backup Exec™ System Recovery 2010 ユーザーズガイド』の「ドライバの検証が失敗した場合」を参照してください。

---

**メモ:** Symantec Recovery Disk を実行するには、512 MB 以上のメインメモリが必要です。コンピュータのビデオカードがメインメモリを共有するように設定されている場合は、512 MB を超えて搭載することが必要になる場合があります。

また、製品の多言語バージョンをインストールする場合、Symantec Recovery Disk を実行するには 768 MB 以上のメインメモリが必要です。

---

## Symantec Recovery Disk を使ってコンピュータを起動する方法

- 1 USB デバイスにリカバリポイントを保存する場合、まずデバイス(外付けハードディスクドライブなど)を接続します。

---

**メモ:** コンピュータを再起動する前にデバイスを接続してください。さもなければ、Symantec Recovery Disk はそれを検出しないことがあります。

---

- 2 Symantec Recovery Disk CD をコンピュータのメディアドライブに挿入します。

コンピュータ製造元によって **Backup Exec System Recovery** がインストールされている場合、修復環境がコンピュータのハードディスクドライブにすでにインストールされていることがあります。コンピュータを再起動した後、コンピュータ画面に指示が表示されるのを待つか、製造元の説明書を参照してください。

- 3 コンピュータを再起動します。

CD からコンピュータを起動できない場合、コンピュータのスタートアップ設定を変更しなければなりません。

p.179 の「**CD からコンピュータをブートする設定**」を参照してください。

- 4 **[Press any key to boot from CD or DVD]** というメッセージが表示された直後にいずれかのキーを押すと、Symantec Recovery Disk の起動が開始されます。

---

**メモ:** このメッセージを見逃さないように注意してください。メッセージは、表示されてから短時間で消えてしまいます。このメッセージを見逃した場合、あらためてコンピュータを起動する必要があります。

---

- 5 ライセンス契約に目を通し、**[同意する]** をクリックします。

同意しない場合は、Symantec Recovery Disk を起動することはできません。コンピュータが再起動されます。

## CD からコンピュータをブートする設定

Symantec Recovery Disk を実行するには、コンピュータを CD から起動する必要があります。

### CD からブートするようにコンピュータを設定する方法

- 1 コンピュータの電源をオンにします。
- 2 コンピュータの起動プロセス中に、BIOS セットアップにアクセスするための指示が画面下部に表示されるのを待ちます。  
通常は、Delete キーまたはファンクションキーを押して BIOS のセットアッププログラムを起動する必要があります。
- 3 BIOS のセットアップウィンドウで、[Boot Sequence] を選択し、Enter キーを押します。
- 4 画面上の指示に従い、CD デバイスまたは DVD デバイスを、最初の起動可能デバイスとして指定します。
- 5 Symantec Recovery Disk CD を CD ドライブに挿入し、コンピュータを再起動します。

---

**メモ:** Symantec Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品 CD に含まれるか、または別の CD として提供されます。Symantec Recovery Disk が含まれている CD は安全な場所に保管してください。CD を紛失しても、書き込み型 CD ドライブがあれば新しい CD を作成できます。

---

- 6 変更を保存して BIOS のセットアップ画面を終了し、新しい設定でコンピュータを再起動します。
- 7 任意のキーを押して Symantec Recovery Disk を起動します。

Symantec Recovery Disk CD をドライブに挿入してコンピュータを起動すると、[Press any key to boot from CD or DVD] というメッセージが画面に表示されます。5 秒以内にキーを押さない場合、コンピュータは BIOS で 2 番目の起動可能デバイスとして設定されているデバイスから起動を試みます。

---

**メモ:** コンピュータの起動プロセス中は、画面を注意して見てください。このメッセージを見逃した場合、あらためてコンピュータを起動する必要があります。

---

## コンピュータを修復する準備

コンピュータを修復する前に、ハードディスクをスキャンして、データの破損やディスク表面の損傷がないかどうかを確認する必要があります。

p.181 の「ハードディスクでのエラーの確認」を参照してください。

## ハードディスクでのエラーの確認

ハードディスクが損傷を受けている疑いがある場合は、エラーが発生しているかどうかを確認できます。

### ハードディスクでエラーを確認する方法

- 1 [分析]パネルで[ハードディスクのエラーをチェック]をクリックします。
- 2 確認するドライブを選択します。
- 3 次のいずれかのオプションを選択します。

ファイルシステムのエラーを自動的に修復 選択したディスクのエラーを修正します。このオプションを選択しない場合、エラーは表示されますが、修正されません。

不良セクタの検出および修復 不良セクタを検索し、読み取り可能な情報を修復します。

- 4 [開始]をクリックします。

## コンピュータの修復

修復環境からコンピュータを復元できます。修復するハードディスクドライブに対応するリカバリポイントがある場合、コンピュータやその他のハードディスクドライブを、リカバリポイントが作成された時点の状態にすべて修復できます。

---

**メモ:** 異なるハードウェアを使うコンピュータにリカバリポイントを復元すれば、**Restore Anywhere** 機能は自動的に有効になります。

---

p.186 の「[仮想ディスクファイルからのコンピュータの修復](#)」を参照してください。

p.193 の「[Restore Anywhere によるコンピュータの修復](#)」を参照してください。

### コンピュータを修復する方法

- 1 Symantec Recovery Disk CD を使用してコンピュータを起動します。  
p.178 の「[Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動](#)」を参照してください。
- 2 [ホーム]パネルで、[コンピュータを修復]をクリックします。  
リカバリポイントが CD または DVD に保存されており、CD/DVD ドライブが 1 台しかない場合、この時点で Symantec Recovery Disk CD を取り出します。リカバリポイントが含まれる CD または DVD を挿入します。
- 3 ウィザードの[ようこそ]のページで、[次へ]をクリックします。

- 4 次のいずれかを実行します。
  - Symantec Recovery Disk がリカバリポイントを特定したら、手順 6 に進みます。
  - Symantec Recovery Disk がリカバリポイントを特定できなかった場合は、次の手順に進みます。
- 5 [リカバリポイントを表示]で、次のいずれかを選択します。

日付 検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。  
リカバリポイントが検出されなかった場合は、表には何も表示されません。そのような場合、コンピュータのすべてのローカルドライブを検索するか、参照してリカバリポイントを探します。

[ソースフォルダを選択]リストで、次のいずれかを行います。

- [すべてのローカルドライブ]をクリックして、コンピュータのローカルドライブにあるすべての利用可能なリカバリポイントのリストを表示します。
- [参照]をクリックして、ローカルドライブまたはネットワークフォルダのリカバリポイントを探します。

ファイル名 別の場所を参照して、リカバリポイントファイル(.v2i)を選択できます。  
このオプションを選択し、[参照]をクリックします。リカバリポイントファイル(.v2i)を探して選択し、[開く]をクリックします。  
必要ならば、[ネットワークドライブの割り当て]をクリックします。共有ネットワークフォルダパスを指定し、ドライブ文字を割り当てます。このとき、必要なファイルがあるフォルダの場所を参照できます。

システム この種類の修復操作では、システムインデックスファイル(.sv2i)を使用して、複数のドライブを備えているコンピュータを復元します。

システムインデックスファイルを使えば、ドライブの復元にかかる時間を短縮できます。システムインデックスファイルは、リカバリポイントと同時に作成されます。システムインデックスファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。

このオプションを選択し、[参照]をクリックします。システムインデックスファイル(.sv2i)を探して選択し、[開く]をクリックします。

- 6 [次へ]をクリックします。

7 [修復するドライブ]パネルで、修復する各リカバリポイントを選択します。

必要に応じて、リストでリカバリポイントの追加または削除を行います。

コンピュータを修復している場合は、**Windows** がインストールされているドライブを選択します。ほとんどのコンピュータシステムでは、これは **C** ドライブです。修復環境では、ドライブ文字とボリュームラベルが **Windows** のものと一致しないことがあります。そのボリュームラベルや割り当てられた名前に基づいて、またはリカバリポイントのファイルとフォルダを参照して、適切なドライブを識別する必要があることがあります。

8 次の操作を行います。

- 任意で、修復するドライブを選択し、[編集]をクリックします。  
 修復プロセスで実行するオプションを選択し、[OK]をクリックして[修復するドライブ]ペインに戻ります。  
 p.184 の「ターゲットドライブとオプションを編集」を参照してください。
- 次を設定します。

復元前にリカバリポイントを検証

復元する前に、リカバリポイントが有効であるか、または破損しているかを検証します。リカバリポイントが無効なら、修復は中断されます。

このオプションを有効にすると、修復の所要時間が大幅に延びます。

Restore Anywhere を使用して別のハードウェアに修復

次のいずれかに当てはまる場合、このオプションは自動的に選択されます。

- システムドライブ (**Windows** がインストールされているドライブであり、通常は **C** ドライブ)のみを修復するか、またはシステムドライブと 1 つ以上のデータドライブの両方を新しいまたは別のコンピュータハードウェアへ修復する。
- 古くなったコンピュータから新しいまたは別のコンピュータハードウェアにアップグレードする。
- コンピュータのマザーボードが故障した。

データドライブのみを新しいまたは別のコンピュータハードウェアに修復する場合、このオプションは選択されません。

p.196 の「Symantec Recovery Disk によるファイルとフォルダの修復」を参照してください。

- 9 [次へ]をクリックして、選択した修復オプションを確認します。
- 10 修復プロセスが終了したときにコンピュータを自動的に再起動するには、[終了後に再起動]を選択します。
- 11 [終了]をクリックします。
- 12 [はい]をクリックして、修復プロセスを開始します。

## ターゲットドライブとオプションを編集

次の表は Symantec Recovery Disk CD のブート後に[ターゲットドライブとオプションを編集]ページで利用可能になるオプションを記述したものです。

オプション	説明
ドライブを削除	リカバリポイントを復元する領域を確保するために、リストで選択したドライブを削除します。  [ドライブを削除]をクリックすると、ドライブには削除のマークが付くだけです。ウィザードの[終了]をクリックすると、ドライブが実際に削除されます。
削除を元に戻す	ドライブを削除した後でその削除を中止する場合は、[削除を元に戻す]をクリックすると、そのドライブがリストに戻されます。
修復後にドライブのサイズを変更(未割り当て領域のみ)	リカバリポイントが復元された後でサイズ調整を行うディスク(またはボリュームラベル)を選択します。このオプションを選択し、新しいサイズをMB単位で指定します。サイズは、そのリストで選択したディスクの識別されるサイズよりも大きくする必要があります。
パーティションの種類	パーティションの種類を次のように設定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ 基本パーティション: ハードディスクの基本パーティションは最大4つに制限されているため、復元の結果ドライブ内のパーティションが4つ以下である場合に、[基本パーティション]が選択できます。</li><li>■ 論理パーティション: 5つ以上のパーティションが必要な場合は、[論理パーティション]を選択します。ハードディスクには、最大容量を超えない範囲で、最大3つの基本パーティションに加えて任意の数の論理パーティションが作成できます。</li></ul>



## オプション

修復後のファイルシステムのエラーを確認

ドライブをアクティブ (OS ブート用) に設定

元のディスク署名を復元

## 説明

リカバリポイントの復元後に、復元したドライブにエラーがないかどうかをチェックします。

復元したドライブをアクティブパーティション (コンピュータの起動ドライブなど) に設定します。

オペレーティングシステムがインストールされているドライブを復元している場合は、このオプションを選択してください。

ハードディスクドライブの物理ディスク署名を復元します。

ディスク署名は、**Backup Exec System Recovery** がサポートするすべての Windows オペレーティングシステムで用いられています。ディスク署名は、ハードディスクドライブの使用に必要です。

次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。

- コンピュータのドライブ文字が非定型である (C、D、E など以外の文字が割り当てられている場合)。
- リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元している。

## オプション

マスターブートレコードを復元

## 説明

マスターブートレコードを復元します。マスターブートレコードは、物理ハードディスクの第一セクタに含まれています。マスターブートレコードは、マスターブートプログラムと、ディスクパーティションを記述するパーティションテーブルから構成されています。マスターブートプログラムは、最初の物理ハードディスクのパーティションテーブルを分析して、アクティブな基本パーティションを調べます。その後、アクティブなパーティションのブートセクタからブートプログラムを起動します。

このオプションは、上級ユーザーのみが利用することをお勧めします。修復環境でドライブ全体を復元する場合にのみ利用可能です。

次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。

- リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元している。
- リカバリポイントを元のドライブに復元しているが、リカバリポイントの作成後にドライブのパーティションが変更されている。
- ウイルスまたはその他の問題によって、ドライブのマスターブートレコードが破損した疑いがある。

# 仮想ディスクファイルからのコンピュータの修復

修復環境を使用して、仮想ディスクファイル(.vmdkまたは.vhd)内からコンピュータを修復できます。修復するハードディスクドライブに対応する仮想ディスクがある場合、コンピュータやその他のハードディスクドライブを、元の仮想ディスクが作成された時点の状態にすべて修復できます。

p.151の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

p.145の「[ワнтаイム仮想変換の実行](#)」を参照してください。

---

**メモ:** 異なるハードウェアを使うコンピュータに仮想ディスクを復元すれば、Restore Anyware 機能は自動的に有効になります。

---

p.181の「[コンピュータの修復](#)」を参照してください。

p.193の「[Restore Anyware によるコンピュータの修復](#)」を参照してください。

## 仮想ディスクファイルからコンピュータを修復する方法

- 1 Symantec Recovery Disk CD を使用してコンピュータを起動します。  
 p.178 の「[Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動](#)」を参照してください。
- 2 [ホーム]パネルで、[コンピュータを修復]をクリックします。
- 3 ウィザードの[ようこそ]のページで、[次へ]をクリックします。
- 4 [リカバリポイントを表示]で、[ファイル名]を選択し、次のいずれかを実行します。
  - [参照]をクリックします。
  - 仮想ディスクファイル(.vmdk または .vhd)を探して選択し、[開く]をクリックします。
  - 必要ならば、[ネットワークドライブの割り当て]をクリックします。  
 共有ネットワークフォルダパスを指定し、ドライブ文字を割り当てます。このとき、必要な仮想ディスクファイルがあるフォルダの場所を参照できます。
- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 仮想ディスクを復元するターゲットドライブを選択します。
- 7 任意で、次の操作を実行します。
  - [ドライブを削除]をクリックします。  
 仮想ディスクを復元する領域を確保するために、リストで選択したドライブを削除します。  
 [ドライブを削除]をクリックすると、ドライブには削除のマークが付くだけです。ウィザードの[終了]をクリックすると、ドライブが実際に削除されます。
  - [削除を元に戻す]をクリックします。  
 ドライブを削除した後でその削除を中止する場合は、[削除を元に戻す]をクリックすると、そのドライブがリストに戻されます。
- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 オペレーティングシステムドライブ (Windows がインストールされているドライブ、通常は C ドライブ) を修復する場合は、[Restore Anywhere を使用して別のハードウェアに修復]がすでに選択されています。  
 このオプションは対象のコンピュータが必要とするドライブが仮想ディスクにすでに含まれていれば選択されません。または、データドライブを含んでいる仮想ディスクを復元する場合にも選択されません。

10 必要に応じて、ライセンスキーを入力します。

Restore Anyware を使用して仮想ディスクファイルからシステムを修復する場合、ライセンスキーが必要になります。

[カスタム Recovery Disk CD を作成] ウィザードを使用してカスタム Symantec Recovery Disk CD に直接ライセンスキーを追加できます。Symantec Recovery Disk の Restore Anyware を有効にして仮想ディスクを復元する場合、ライセンスキーの入力を求めるメッセージは表示されません。ライセンスキーは、カスタム Symantec Recovery Disk CD にすでに含まれています。

p.31 の「[カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成](#)」を参照してください。

11 [次へ] をクリックします。

12 修復プロセスで実行するオプションを選択します。

p.188 の「[仮想ディスクの修復オプション](#)」を参照してください。

利用可能なオプションは、以前選択したターゲットドライブによって異なります。

13 [次へ] をクリックして、選択した修復オプションを確認します。

14 修復プロセスが終了したときにコンピュータを自動的に再起動するには、[終了後に再起動] を選択します。

15 [終了] をクリックします。

16 [はい] をクリックして、修復プロセスを開始します。

## 仮想ディスクの修復オプション

次の表は仮想ディスクを修復するとき利用可能である修復オプションを記述したものです。

オプション	説明
復元前にリカバリポイントを検証	復元する前に、リカバリポイントが有効であるか、または破損しているかを検証します。リカバリポイントが無効なら、修復は中断されます。  このオプションを有効にすると、修復の所要時間が大幅に延びます。
修復後のファイルシステムのエラーを確認	リカバリポイントの復元後に、復元したドライブにエラーがないかどうかをチェックします。
修復後にドライブのサイズを変更(未割り当て領域のみ)	このオプションを選択し、新しいドライブサイズを MB 単位で指定します。

## オプション

パーティションの種類

ドライブをアクティブ (OS ブート用) に設定

元のディスク署名を復元

## 説明

パーティションの種類を次のように設定します。

- **基本パーティション:** ハードディスクの基本パーティションは最大 4 つに制限されているため、復元の結果ドライブ内のパーティションが 4 つ以下である場合に、[基本パーティション] が選択できます。
- **論理パーティション:** 5 つ以上のパーティションが必要な場合は、[論理パーティション] を選択します。ハードディスクには、最大容量を超えない範囲で、最大 3 つの基本パーティションに加えて任意の数の論理パーティションが作成できます。

復元したドライブをアクティブパーティション (コンピュータの起動ドライブなど) に設定します。

オペレーティングシステムがインストールされているドライブを復元する場合は、このオプションを選択してください。

ハードディスクドライブの物理ディスク署名を復元します。

ディスク署名は、**Backup Exec System Recovery** がサポートするすべての Windows オペレーティングシステムで用いられています。ディスク署名は、ハードディスクドライブの使用に必要です。

次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。

- コンピュータのドライブ文字が非定型である (C、D、E など以外の文字が割り当てられている場合)。
- リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元する。

## オプション

マスターブートレコードを復元

## 説明

マスターブートレコードを復元します。マスターブートレコードは、物理ハードディスクの第一セクタに含まれています。マスターブートレコードは、マスターブートプログラムと、ディスクパーティションを記述するパーティションテーブルから構成されています。マスターブートプログラムは、最初の物理ハードディスクのパーティションテーブルを分析して、アクティブな基本パーティションを調べます。その後、アクティブなパーティションのブートセクタからブートプログラムを起動します。

このオプションは、上級ユーザーのみが利用することをお勧めします。修復環境でドライブ全体を復元する場合にのみ利用可能です。

次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。

- リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元する。
- リカバリポイントを元のドライブに復元するが、ドライブのパーティションはリカバリポイントの作成後に変更されている。
- ウイルスまたはその他の問題によって、ドライブのマスターブートレコードが破損した疑いがある。

# Restore Anyware を使用した復元

管理者は、Symantec Backup Exec System Recovery Restore Anyware™ 機能を使用して、Windows 2000、2003、または XP システムボリュームのイメージをハードウェア環境が異なるコンピュータに復元し、システムをブートできるようにするために必要な変更を行うことができます。設定によっては、サーバーを正確に従来どおりに動作できるようにするために、追加の変更が必要になることがあります。

## Restore Anyware の使用

Restore Anyware 機能を使用して復元を実行する前に完全なライセンスがある正規版の Symantec Backup Exec System Recovery をインストールする必要があります。この機能には試用または評価期間はありません。

コンピュータが機能しなくなっても（たとえば、マザーボードが動作しない）、Symantec Backup Exec System Recovery のライセンスを取得しているコンピュータのリカバリポイ

ントがある場合、新しいハードウェアに復元できます。Restore Anyware は、古いコンピュータから新しいハードウェアへアップグレードするときにもよく使用されます。この機能を使用するとドライブのみが修復されます。ファイルおよびフォルダレベルでの修復には使用できません。

---

**警告:** ハードウェアベンダからの OEM ライセンスまたはシングルユーザーライセンスを使用している場合、Windows 製品のライセンスキーを使用して Windows ソフトウェアを再度アクティブ化するように求めるメッセージが表示されることがあります。OEM およびシングルユーザーライセンスのアクティブ化の数には制限があることに注意してください。Restore Anyware を使っても、お使いのオペレーティングシステムまたはアプリケーション(あるいはその両方)のライセンス契約に違反しないことを確認してください。

---

Restore Anyware を使う場合は、以下のことに留意してください。

- まったく異なる種類のハードウェアに Restore Anyware を使用する場合は、次の操作が必要になる場合があります。
  - 大容量ストレージデバイスのドライブを指定する
  - 復元する Windows オペレーティングシステムの修正プログラムを指定する
  - システムが再起動したときに Windows オペレーティングシステムのライセンス認証を再度アクティブ化する
  - システムが再起動したときにライセンスキーを入力する
  - システムが再起動したときに、リカバリポイントにローカルのユーザー名とパスワードを入力する
- Restore Anyware を使ってリカバリポイントを復元する場合は、ローカルの管理者名とパスワードの入力を求める画面が表示されることがあります。復元を実行する前に、この情報を用意しておく必要があります。
- 静的 IP アドレスを使っているコンピュータで Restore Anyware を使う場合は、復元の完了後にそのコンピュータの再設定を手動で実行する必要があります。
- Symantec Backup Exec System Recovery では、1 つのシステムで 1 つの NIC をサポートします。2 つの NIC を搭載したシステムで Restore Anyware を使って復元を実行するには、もう 1 つの NIC を手動で設定する必要がある場合があります。

Restore Anyware を使用してコンピュータの復元を実行する前に、復元に使用するリカバリポイントを、アクセスできる場所(参照可能な場所など)に保存する必要があります。復元時には、ディスクドライブ、サービスパック、修正プログラムなどを指定するように指示される場合もあります。また、Windows メディア CD を用意しておくことを推奨します。

Restore Anyware ドライブの取得について詳しくは、

[http://www.symantec.com/region/jp/techsupp/enterprise/select\\_product\\_kb.html](http://www.symantec.com/region/jp/techsupp/enterprise/select_product_kb.html)  
でシマンテック社のナレッジベースを参照してください。

### コンピュータの復元を Restore Anyware を使用して実行する方法

- 1 復元を完了するターゲットコンピュータのメディアドライブに Symantec Backup Exec System Recovery CD を挿入してください。
- 2 コンピュータを再起動します。  
CD からブートできるようにするためにシステムを変更する必要がある場合もあります。
- 3 [Press any key to boot from CD or DVD] というメッセージが表示された直後にいずれかのキーを押すと、修復環境の起動が開始されます。
- 4 ライセンス契約に目を通し、[同意する] をクリックします。  
同意しない場合は、修復環境を起動することはできません。コンピュータが再起動されます。
- 5 ネットワークにアクセスする必要があるかどうかに応じて、ネットワークサービスを起動するために [はい] か [いいえ] をクリックしてください。  
リカバリポイントの日時を正しく参照するには、修復環境で正しいタイムゾーンを設定する必要がある場合があります。  
メインウィンドウの下部でタイムゾーンのフィールドをクリックしてください。[タイムゾーンの選択] ダイアログボックスで、[タイムゾーン] ドロップダウンリストからご使用の地域のタイムゾーンを選択し、次に [OK] をクリックしてください。
- 6 メインコンソールで、[コンピュータを修復] をクリックします。  
コンピュータの修復ウィザードが起動されます。
- 7 [修復するドライブ] をクリックし、[次へ] をクリックします。
- 8 必要とする修復のタイプを選択し、次に [次へ] をクリックしてください。
- 9 リカバリポイントの場所にナビゲートするために [参照] をクリックしてください。
- 10 [ファイルを開く] ダイアログボックスで、使いたいリカバリポイントを選択し次に [開く] をクリックしてください。
- 11 選んだリカバリポイントがアクティブ化されたバージョンの Symantec Backup Exec System Recovery で作成されたことを確認します。そうであれば、[次へ] をクリックしてください。異なるリカバリポイントを選択する必要があったら、[ファイルを開く] ダイアログボックスを使用してそのリカバリポイントを参照してください。
- 12 リカバリポイントの復元先を選択し、次に [次へ] をクリックしてください。
- 13 パーティションの種類が基本に設定されていることを確認します。[Restore Anyware を実行] チェックボックスを選択し、次に [次へ] をクリックします。
- 14 選択したオプションを確認し、[終了] をクリックします。



## Restore Anyware によるコンピュータの修復

Restore Anyware を使用してコンピュータを復元する前に、復元に使用するリカバリポイントまたは仮想ディスクファイルを、アクセスできる場所に保存する必要があります(たとえば、参照可能な場所など)。修復時には、ディスクドライバ、サービスパック、修正プログラムなどを指定するように指示される場合もあります。Windows メディア CD を用意しておく必要があります。

Restore Anyware ドライバの取得について詳しくは、次の URL からシマンテック社のナレッジベースにアクセスしてください。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-15>

---

**警告:** Restore Anyware を使用してコンピュータを復元する前に、修復環境でリカバリポイントまたは仮想ディスクにアクセスできるかどうかテストしてください。SAN ボリュームへのアクセス権があり、ネットワークに接続できることを確認する必要があります。

---

p.181 の「[コンピュータの修復](#)」を参照してください。

p.186 の「[仮想ディスクファイルからのコンピュータの修復](#)」を参照してください。

### Restore Anyware を使用してコンピュータを修復する方法

1 Symantec Recovery Disk CD を使用してコンピュータを起動します。

p.178 の「[Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動](#)」を参照してください。

2 [ホーム]パネルで、[コンピュータを修復]をクリックします。

リカバリポイントまたは仮想ディスクが CD または DVD に保存されており、CD/DVD ドライブが 1 台しかない場合、この時点で Symantec Recovery Disk CD を取り出します。リカバリポイントまたは仮想ディスクが含まれる CD または DVD を挿入します。

3 ウィザードの[ようこそ]のページで、[次へ]をクリックします。

4 次のいずれかを実行します。

- Symantec Recovery Disk がリカバリポイントを特定したら、手順 6 に進みます。
- Symantec Recovery Disk がリカバリポイントを特定できなかった場合は、次の手順に進みます。

5 [リカバリポイントを表示]をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。

日付	<p>検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。</p> <p>リカバリポイントが検出されなかった場合は、表には何も表示されません。そのような場合、コンピュータのすべてのローカルドライブを検索するか、参照してリカバリポイントを探します。</p> <p>[ソースフォルダを選択]リストで、次のいずれかを行います。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ [すべてのローカルドライブ]をクリックして、コンピュータのローカルドライブにあるすべての利用可能なリカバリポイントのリストを表示します。</li><li>■ [参照]をクリックして、ローカルドライブまたはネットワークフォルダのリカバリポイントを探します。</li></ul>
ファイル名	<p>別の場所を参照して、リカバリポイントファイル(.v2i)または仮想ディスクファイル(.vmdk または .vhd)を選択できます。</p> <p>p.151 の「<a href="#">仮想変換ジョブの定義</a>」を参照してください。</p> <p>p.145 の「<a href="#">ワンタイム仮想変換の実行</a>」を参照してください。</p> <p>このオプションを選択し、[参照]をクリックします。リカバリポイントファイル(.v2i)または仮想ディスクファイル(.vmdk または .vhd)を探して選択し、[開く]をクリックします。</p> <p>必要ならば、[ネットワークドライブの割り当て]をクリックします。共有ネットワークフォルダパスを指定し、ドライブ文字を割り当てます。このとき、必要なファイルがあるフォルダの場所を参照できます。</p>
システム	<p>この種類の修復操作では、システムインデックスファイル(.sv2i)を使用して、複数のドライブを備えているコンピュータを復元します。</p> <p>システムインデックスファイルを使えば、ドライブの復元にかかる時間を短縮できます。システムインデックスファイルは、リカバリポイントと同時に作成されます。システムインデックスファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。</p> <p>このオプションを選択し、[参照]をクリックします。システムインデックスファイル(.sv2i)を探して選択し、[開く]をクリックします。</p> <p>ネットワーク上の場所を選択する場合は、ネットワーク資格情報を入力します。</p>

6 [次へ]をクリックします。

## 7 [修復するドライブ] ペインで、修復する各リカバリポイントを選択します。

必要に応じて、リストでリカバリポイントの追加または削除を行います。

コンピュータを修復している場合は、**Windows** がインストールされているドライブを選択します。ほとんどのコンピュータシステムでは、これは C ドライブです。修復環境では、ドライブ文字とボリュームラベルが **Windows** のものと一致しないことがあります。そのボリュームラベルや割り当てられた名前に基づいて、またはリカバリポイントのファイルとフォルダを参照して、適切なドライブを識別する必要があることがあります。

p.196 の「[Symantec Recovery Disk によるファイルとフォルダの修復](#)」を参照してください。

## 8 次の操作を行います。

- 任意で、修復するドライブを選択し、[編集] をクリックします。  
修復プロセスで実行するオプションを選択し、[OK] をクリックして [修復するドライブ] パネルに戻ります。  
p.184 の「[ターゲットドライブとオプションを編集](#)」を参照してください。
- 次のオプションのうち、必要なものを選択します。

復元前にリカバリポイントを検証

復元する前に、リカバリポイントが有効であるか、または破損しているかを検証します。リカバリポイントが無効なら、修復は中断されます。

このオプションを有効にすると、修復の所要時間が大幅に延びます。

Restore Anyware を使用して別のハードウェアに修復

次のいずれかに当てはまる場合、このオプションは自動的に選択されます。

- システムドライブ (**Windows** がインストールされているドライブであり、通常は C ドライブ) のみを修復するか、またはシステムドライブと 1 つ以上のデータドライブの両方を新しいコンピュータハードウェアへ修復する。
- 古くなったコンピュータから新しいコンピュータハードウェアにアップグレードする。
- コンピュータのマザーボードが故障した。

データドライブのみを新しいコンピュータハードウェアに修復する場合、このオプションを選択する必要はありません。

- 9 [次へ]をクリックして、選択した修復オプションを確認します。
- 10 修復プロセスが終了したときにコンピュータを自動的に再起動するには、[終了後に再起動]を選択します。
- 11 [終了]をクリックします。
- 12 [はい]をクリックして、修復プロセスを開始します。

## Symantec Recovery Disk によるファイルとフォルダの修復

Symantec Recovery Disk CD を使用してコンピュータを起動し、リカバリポイント内からファイルとフォルダを復元できます。

### Symantec Recovery Disk を使ってファイルとフォルダを修復する方法

- 1 Symantec Recovery Disk CD を使用してコンピュータを起動します。

p.178の「[Symantec Recovery Disk の使用によるコンピュータの起動](#)」を参照してください。
- 2 [修復]、[ファイルを修復]の順にクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
  - Symantec Recovery Disk でリカバリポイントが見つからない場合は、検索するように求められます。[ファイルを開く]ダイアログボックスでリカバリポイントを選択し、[開く]をクリックします。
  - Symantec Recovery Disk によってリカバリポイントが検出された場合は、リストからリカバリポイントを選択し、[OK]をクリックします。

---

**メモ:** ネットワーク上にリカバリポイントが見つからない場合は、[ファイル名]フィールドに、リカバリポイントが保存されているコンピュータ名と共有名を入力します。たとえば、`¥¥computer_name¥¥share_name` のように入力します。

それでも問題が解決しない場合は、コンピュータの IP アドレスを入力してください。

p.198の「[Symantec Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

---

- 4 **Recovery Point Browser** のツリーペインで、復元するファイルまたはフォルダが含まれるドライブをダブルクリックして展開します。

- 5 Recovery Point Browser のコンテンツペインで、復元するファイルまたはフォルダを選択するには、次のいずれかの操作を実行します。

すべての項目を選択する方法	Ctrl+A を押します。
隣接しているファイルをまとめて選択する方法	一番上のファイルをクリックし、Shift キーを押しながら、リストの最後のファイルを選択します。
隣接していないファイルをまとめて選択する方法	Ctrl キーを押しながら、ファイルを選択します。

- 6 [ファイルを修復] をクリックします。

可能であれば、[アイテムの修復] ダイアログボックスの [このフォルダに復元] フィールドに、ファイルを作成したときの元のパスが自動的に表示されます。

元の場所にドライブ文字が含まれていない場合は、パスの先頭にドライブ文字を入力する必要があります。

---

**メモ:** 修復環境では、ドライブ文字とラベルが Windows のものと一致しないことがあります。ラベル (割り当てられた名前) に基づいて、適切なドライブを識別する必要があります。

---

- 7 元のパスが不明であったり、選択したファイルを別の場所に復元する場合は、[参照] をクリックして復元先を選択します。
- 8 [修復] をクリックして、ファイルの復元を開始します。
- 9 [OK] をクリックして終了します。

## Symantec Recovery Disk によるコンピュータのファイルとフォルダの検索

[コンピュータを検索] 機能を使用して、修復環境からコンピュータ上のファイルとフォルダを検索できます。

この機能では、Recovery Point Browser と、Windows エクスプローラに類似した機能を使用します。コンピュータに接続されたすべてのドライブのファイル構造を、修復環境から参照できます。

### Symantec Recovery Disk を使ってコンピュータのファイルとフォルダを検索する方法

- ◆ [分析] ペインで、[コンピュータを検索] をクリックします。

## Symantec Recovery Disk でのネットワークツールの使用について

リカバリポイントをネットワーク上に保存した場合は、このネットワークにアクセスして、コンピュータかファイルとフォルダを Symantec Recovery Disk から復元する必要があります。

---

**メモ:** ネットワークを通じてコンピュータを修復する場合は、追加のコンピュータメモリが必要になることがあります。

---

p.198 の「[ネットワークサービスの起動](#)」を参照してください。

p.198 の「[リモート修復での pcAnywhere Thin Host の使用](#)」を参照してください。

p.200 の「[Symantec Recovery Disk 内からのネットワークドライブのマッピング](#)」を参照してください。

p.201 の「[ネットワーク接続の設定](#)」を参照してください。

### ネットワークサービスの起動

ネットワークサービスを起動する必要がある場合は、手動で起動できます。

#### ネットワークサービスを起動する方法

- ◆ [ネットワーク]パネルで[ネットワークサービスを開始]をクリックします。

ネットワークへの接続を確認するため、ネットワークドライブをマッピングできます。

p.200 の「[Symantec Recovery Disk 内からのネットワークドライブのマッピング](#)」を参照してください。

### リモート修復での pcAnywhere Thin Host の使用

Symantec Recovery Disk CD は pcAnywhere Thin Host を含んでいます。修復環境のコンピュータにリモートでアクセスできます。pcAnywhere Thin Host には、1 つのリモートコントロールセッションをサポートするために必要な最低限の設定が含まれています。Thin Host には、リモートコントロールセッションをホストするための IP アドレスが必要です。

---

**メモ:** Thin Host は Symantec Recovery Disk に配備できません。Thin Host は、Symantec Recovery Disk CD から起動した場合のみ、Symantec Recovery Disk でリモートコントロールセッションをホストします。Symantec Recovery Disk の Thin Host は、ファイル転送をサポートしません。また、ネットワークまたはストレージデバイスのドライブを追加するために使用することはできません。

---

Thin Host は Symantec Recovery Disk から起動されると、リモートコンピュータからの接続を待機します。Thin Host に接続して、修復のリモート管理または Symantec Recovery Disk でサポートされているその他のタスクを実行できます。Thin Host に接続するには、Symantec pcAnywhere を使用する必要があります。

#### pcAnywhere Thin Host を起動する方法

- 1 修復環境の[ネットワーク]パネルで、[pcAnywhere Thin Host を開始]をクリックします。
- 2 必要に応じて、ネットワークサービスが開始されます。Thin Host が接続を待機します。

### pcAnywhere Thin Host へのリモート接続

Symantec pcAnywhere を使用すると、修復環境で実行中のコンピュータにリモート接続できます。コンピュータが、Symantec Recovery Disk CD に含まれる pcAnywhere Thin Host を実行中で、かつ、接続を待機中である必要があります。接続されると、クライアントコンピュータは修復をリモート管理したり、Symantec Recovery Disk でサポートされているその他のタスクを実行したりできます。

---

**メモ:** クライアントコンピュータは、ファイルの転送や、ネットワーク用のドライバ、または Thin Host を実行しているコンピュータ上のストレージデバイスの追加はできません。

---

#### pcAnywhere Thin Host にリモート接続する方法

- 1 リモートで管理されるコンピュータ(ホスト)が修復環境で起動されたことを確認します。また pcAnywhere Thin Host が接続を待機中であることを確認します。
- 2 Thin Host コンピュータの IP アドレスを取得します。
- 3 クライアントコンピュータの Symantec pcAnywhere で、リモート接続項目を設定します。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

---

**メモ:** 接続中のホストに自動的にログオンする必要はありません。

---

- 4 pcAnywhere で接続設定を行うときは、次の操作を実行します。
  - 接続の種類として TCP/IP を選択します。
  - ホストコンピュータの IP アドレスを指定します。
  - 接続中のホストへの自動ログオンを選択します。  
ログオン情報を入力しないと、Thin Host に接続するときに、入力を求めるメッセージが表示されます。

- 次のログオン名を入力します。

**symantec**

- 次のパスワードを入力します。

**recover**

間違った設定で接続しようとする、**Thin Host** はシャットダウンします。

権限のないユーザーによって設定が不正に変更されたり、許可のないセッションが開始されようとするのを防止するために、リモート接続項目のパスワードを設定します。

このオプションは、[項目の保護] タブの [リモートプロパティ] ウィンドウで選択できます。**Thin Host** は暗号化をサポートしていません。

- 5 **pcAnywhere** で、リモートコントロールセッションを開始します。

接続に失敗した場合は、再接続を行う前にホストコンピュータで **Thin Host** を再起動する必要があります。

- 6 ホストコンピュータで必要なタスクをリモートに実行します。

**Thin Host** を終了したとき、**Thin Host** コンピュータが再起動されたとき、またはリモートコントロールセッションが終了されたとき、リモートコントロールセッションは終了します。

ホストコンピュータが **Windows** オペレーティングシステムを起動した後、クライアントコンピュータは **Thin Host** を配備、接続して、修復環境の使用中に実行されたタスクが正常に完了したことを検証できます。

## Symantec Recovery Disk 内からのネットワークドライブのマッピング

修復環境を起動した後にネットワークサービスを開始した場合、ネットワークドライブをマッピングすることができます。これによって、マッピングしたドライブを参照し、復元するリカバリポイントを選択できるようになります。または、修復環境からバックアップを作成すれば、ネットワーク上のある場所に存在する保存先を選択できます。

DHCP サーバーが存在しない場合、または DHCP サーバーが利用不能場合は、**Symantec Recovery Disk** を実行しているコンピュータの静的 IP アドレスとサブネットマスクの指定が必要になります。

p.201 の「[ネットワーク接続の設定](#)」を参照してください。

静的 IP アドレスとサブネットマスクを入力すると、修復環境が使用できるようになります。ただし、コンピュータ名を解決する方法がないため、マイコンピュータの修復ウィザードまたは **Recovery Point Browser** を実行しているときは、IP アドレス以外ではネットワーク上のリカバリポイントを参照できません。ネットワークドライブをマッピングすると、より効率的にリカバリポイントを検索できます。または、修復環境内から作成するリカバリポイントの保存先として、マップしたネットワークドライブを使うこともできます。



## Symantec Recovery Disk 内からネットワークドライブをマッピングする方法

- 次のいずれかを実行します。
  - 修復環境ウィンドウの左側で[ホーム]をクリックし、右側のペインで[ネットワークドライブの割り当て]をクリックします。
  - 修復環境ウィンドウの左側で[ネットワーク]をクリックし、右側のペインで[ネットワークドライブの割り当て]をクリックします。
- リカバリポイントが保存されているコンピュータの UNC パスを使用して、ネットワークドライブをマッピングします。

たとえば、`\\computer_name\share_name` や `\\IP_address\share_name` のように入力します。

また、修復環境内で、コンピュータの修復ウィザードまたはコンピュータのバックアップウィザードからネットワークドライブをマッピングすることもできます。

## ネットワーク接続の設定

[ネットワーク設定]ウィンドウにアクセスし、修復環境で実行するときの基本的なネットワーク設定を行うことができます。

### ネットワーク接続を設定する方法

- 修復環境のメインウィンドウで、[ネットワーク]、[ネットワーク接続を設定]の順に選択します。
- ネットワークサービスの起動を求めるメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。

### 静的 IP アドレスの割り当て

ネットワークドライブまたは共有に存在するリカバリポイントを復元するときに、ドライブをマッピングできない、あるいはネットワーク上のドライブまたは共有を参照できない場合は (利用可能な DHCP サービスが存在しないため)、修復環境を実行しているコンピュータに固有の静的 IP アドレスを割り当てることができます。これにより、ネットワークドライブまたは共有にマッピングできるようになります。

### 静的 IP アドレスを割り当てる方法

- [ネットワークアダプタ設定]フィールドで、[次の IP アドレスを使用する]をクリックします。
- 復元するコンピュータに、固有の IP アドレスとサブネットマスクを指定します。  
指定するサブネットマスクがネットワークセグメントのサブネットマスクと一致していることを確認します。
- [OK]をクリックします。

- 4 [閉じる]をクリックして、修復環境のメインメニューに戻ります。
- 5 [ネットワーク]ペインで、[リモートコンピュータに対して ping を実行]をクリックします。
- 6 ネットワークセグメント上の ping 先のコンピュータのアドレスを入力します。
- 7 [OK]をクリックします。

アドレス方法としてコンピュータ名またはコンピュータ名とドメインを指定した場合は、ping を送信したコンピュータから返された IP アドレスを記録しておきます。

ストレージコンピュータとの接続が確立したら、[ネットワークドライブの割り当て]ユーティリティを使用して、リカバリポイントの保存場所にドライブをマッピングできます。

## ping 送信に失敗したときの静的 IP アドレスの取得

アドレスに ping 送信し、そのアドレスが応答しない場合は、`ipconfig /all` コマンドを使用して正しい IP アドレスを確認できます。

### ping 送信に失敗したときに IP アドレスを取得する方法

- 1 復元するリカバリポイントを含むコンピュータのコマンドプロンプトで、次のコマンドを入力して Enter キーを押します。

```
ipconfig /all
```

- 2 表示された IP アドレスを書き留めます。
- 3 修復環境を実行しているコンピュータに戻り、書き留めた IP アドレスを使用して、[リモートコンピュータに対して ping を実行]ユーティリティを実行します。

## リカバリポイントとドライブのプロパティの表示について

リカバリポイントと、このリカバリポイントに含まれるドライブのプロパティを表示できます。たとえば、リカバリポイントの説明、サイズ、圧縮レベルを表示できます。リカバリポイントを作成したコンピュータの名前も表示できます。

- 「リカバリポイントのプロパティの表示」
- 「リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示」

## リカバリポイントのプロパティの表示

Recovery Point Browser を使用して、リカバリポイントのプロパティを表示することができます。次のプロパティを表示できます。

説明	ユーザーが入力したリカバリポイントの説明。
サイズ	リカバリポイントのサイズ(MB)。

作成日時	リカバリポイントの作成日時。
圧縮	リカバリポイントで使用されている圧縮レベル。
複数のファイルに分割	リカバリポイントが複数のファイルに分割されているかどうか。
パスワードプロテクト	選択したドライブのパスワード保護の状態。
暗号化	リカバリポイントで使用している暗号化の強さ。
バージョン	リカバリポイントと関連付けられるバージョン番号。
コンピュータ名	リカバリポイントを作成したコンピュータの名前。
<b>Restore Anyware</b>	リカバリポイントに対して <b>Restore Anyware</b> を有効にしている場合、このプロパティが表示されます。
検索エンジンのサポート	リカバリポイントに対して検索エンジンのサポートを有効にしている場合、このプロパティが表示されます。
作成者	リカバリポイントの作成に使用されたアプリケーション ( <b>Backup Exec System Recovery</b> )。

### リカバリポイントのプロパティを表示する方法

- 1 **Recovery Point Browser** のツリーパネルで、表示するリカバリポイントを選択します。
- 2 次のいずれかを実行します。
  - ファイルメニューで、[プロパティ]を選択します。
  - リカバリポイントを右クリックして、[プロパティ]を選択します。

## リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示

リカバリポイント内のドライブについて、次のプロパティを表示できます。

説明	ユーザーが入力したリカバリポイントの説明。
元のドライブ文字	ドライブに割り当てられていた元のドライブ文字。
クラスタサイズ	<b>FAT</b> 、 <b>FAT32</b> 、または <b>NTFS</b> ドライブで使用しているクラスタサイズ(バイト)。
ファイルシステム	ドライブで使用しているファイルシステムの種類。
基本/論理	選択したドライブのパーティションの種類。基本パーティションまたは論理パーティションのいずれか。

サイズ	ドライブの総サイズ(MB)。 使用領域と空き領域の両方が含まれます。
使用領域	ドライブ内の使用領域の容量(MB)。
未使用領域	ドライブ内の未使用領域の容量(MB)。
不良セクタが含まれています	ドライブ上に不良セクタがあるかどうかを示します。
正常に静止しました	リカバリポイントが作成された時、データベースアプリケーションが正しく静止したかどうかを示します。

### リカバリポイント内のドライブのプロパティを表示する方法

- 1 **Recovery Point Browser** のツリーパネルで、表示するドライブが含まれているリカバリポイントをダブルクリックします。
- 2 ドライブを選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
  - ファイルメニューで、[プロパティ]を選択します。
  - リカバリポイントを右クリックして、[プロパティ]を選択します。

## サポートユーティリティについて

修復環境には、ハードウェア問題のトラブルシューティングの際に使用するようシマンテック社のテクニカルサポートから指示されるサポートユーティリティがいくつかあります。シマンテック社のテクニカルサポートに問題解決の支援を求める場合は、これらのユーティリティによって生成された情報を提供する必要があります。

---

**メモ:**これらのツールは、シマンテック社のテクニカルサポートから指示があった場合にのみ使用してください。

---

# ドライブのコピー

この章では以下の項目について説明しています。

- [ドライブのコピーについて](#)
- [ドライブをコピーする準備](#)
- [ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー](#)

## ドライブのコピーについて

ドライブのコピー機能を使用して、オペレーティングシステム、アプリケーション、またはデータをハードディスクドライブから別のハードディスクドライブにコピーできます。

コピー元のドライブ上のデータのサイズが新しいドライブの総サイズより小さく、その差が総サイズの 1/16 以上あれば、大容量のハードディスクドライブから容量の小さいハードディスクドライブにデータをコピーすることもできます。

コピー元のハードディスクドライブに複数のパーティションがある場合は、パーティションを一度に 1 つずつ新しいハードディスクドライブにコピーする必要があります。

大容量のハードディスクドライブにアップグレードしたり、2 台目のハードディスクドライブを追加したりする場合に、ドライブのコピー機能を使うことができます。別のコンピュータで使用するハードディスクドライブのセットアップには、ドライブのコピー機能を使うことはできません。多くの場合、あるコンピュータでハードウェアの実行に使用されるドライバは、別のコンピュータのドライバとは一致しません。

p.190 の「[Restore Anyware を使用した復元](#)」を参照してください。

## ドライブをコピーする準備

ドライブをコピーする前に、ハードウェアを適切に構成する必要があります。

## ドライブをコピーする方法

- 1 次の手順を実行します。
  - コンピュータを準備します。
  - ドライブの取り付けに関する製造元の説明書を用意してください。
  - コンピュータをシャットダウンし、電源コードをはずします。
  - コンピュータの接地している金属部分に触れて、静電気を放電してから作業を行ってください。
  - コンピュータのカバーをはずします。
- 2 ハードディスクドライブのジャンパ設定を変更して新しいハードディスクドライブをスレーブドライブに設定します。マスター/スレーブの指定にジャンパ設定ではなくケーブルセレクトを使用する場合は、スレーブドライブとなるように接続します。
- 3 次の手順で、新しいハードディスクドライブを取り付けます。
  - ケーブルの色の付いた線の側がマザーボードの I/O ピンの位置と揃うようにケーブルを接続します。  
つまり、マザーボードの **Pin1** または **1** とマークされた位置に色の付いた線が来るように接続します。
  - ケーブルのもう一方の端をハードディスクドライブの背面に接続します。ここでも、色の付いた線の側を **Pin1** の位置に合わせるように接続します。  
通常、I/O ピンは、電源コネクタに一番近い側にあります。
- 4 電源ケーブルのコネクタを新しいハードディスクドライブに差し込みます。  
プラスチックコネクタの突起のある側をピンソケットの切り欠き側と揃えて差し込みます。
- 5 製造元の説明書に従って、ドライブをベイに固定します。
- 6 次の手順で、新しいハードディスクドライブを認識するように BIOS を変更します。
  - BIOS のセットアップ画面を開きます。BIOS のセットアップ画面を開く方法は、コンピュータの起動時に画面に表示されます。
  - 通常はマスタードライブ、スレーブドライブともに **[Auto Detect] (Auto)** を選択します。
  - 変更を保存して BIOS 画面を終了します。  
自動的にコンピュータが再起動します。

# ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー

新しいハードディスクドライブの取り付けが完了すれば、古いハードディスクドライブの内容をコピーすることができます。新しいハードディスクドライブをフォーマットする必要はありません。

コピー元のハードディスクドライブに複数のパーティションがある場合は、パーティションを一度に 1 つずつ新しいハードディスクドライブにコピーする必要があります。

データのコピー中に電源やハードウェアに障害が発生しても、元のドライブからデータが消失することはありません。ただし、コピー処理を再開する必要があります。

## ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブにコピーする方法

- 1 [ツール] ページで、[ハードディスクドライブをコピー] をクリックします。
- 2 ウィザードの指示に従ってドライブをコピーします。

ウィザードで、コピー元ドライブ、コピー先ドライブ、およびドライブをコピーする際のオプションを正しく選択します。

## ドライブ間のコピーオプションについて

1 つのハードディスクドライブを別のハードディスクドライブにコピーする場合、ドライブ間のコピーオプションを使用することができます。

次の表に、1 つのハードディスクドライブを別のハードディスクドライブにコピーするためのオプションを示します。

表 15-1 ドライブ間のコピーオプション

オプション	説明
コピー元のファイルシステムのエラーを確認	ソースドライブをコピーする前に、そのドライブにエラーがないか確認します。ソースドライブとは、コピー元のドライブです。
コピー先のファイルシステムのエラーを確認	ドライブのコピー後にエラーがないかコピー先のドライブを確認します。コピー先のドライブとは、新しいドライブです。
未割り当て領域を最大限に利用するようにドライブのサイズを変更	コピー先のドライブの空き領域のサイズに合わせてドライブを自動的に拡大します。

オプション	説明
ドライブをアクティブ (OS ブート用) に設定	<p>コピー先のドライブをアクティブパーティション (コンピュータのブートドライブ) に設定します。アクティブにできるドライブは 1 つだけです。コンピュータをブートするためには、最初の物理ハードディスクにアクティブなドライブがあり、そのドライブにオペレーティングシステムがインストールされている必要があります。コンピュータはブート時に最初の物理ハードディスクのパーティションテーブルを読み込み、アクティブなドライブを探します。見つかったその場所からブートします。ドライブからブートできない場合は、ブートディスクを使用します。Symantec Recovery Disk CD を使うことができます。</p> <p>[ドライブをアクティブに設定] オプションは、ベーシックディスク (ダイナミックディスクではない) の場合にのみ有効です。</p>
SmartSector コピーの無効化	<p>SmartSector は、データを含むクラスタとセクタのみをコピーすることで、コピー処理を高速化するテクノロジーを使用しています。ただし、セキュリティが強化された環境などのように、データの有無にかかわらず、すべてのクラスタとセクタを元のレイアウトのままコピーすることが望ましい場合もあります。</p>
コピー中は不良セクタを無視	<p>ディスク上にエラーがある場合でも、ドライブをコピーします。</p>
MBR をコピー	<p>ドライブから別のドライブに、マスターブートレコードをコピーします。このオプションは、C:¥ドライブを新しい空のハードディスクドライブにコピーする場合に使用します。ドライブを、バックアップと同じハードディスクドライブ上の別の領域にコピーする場合は、このオプションを選択しないでください。また、置き換えたくない既存のパーティションがあるハードディスクドライブにドライブをコピーする場合も、このオプションを選択しないでください。</p>
コピー先のパーティションの種類	<p>[基本パーティション] をクリックすると、コピー先の (新しい) ドライブが基本パーティションになります。</p> <p>[論理パーティション] をクリックすると、コピー先の (新しい) ドライブが拡張パーティション内の論理パーティションになります。</p>
ドライブ文字	<p>[ドライブ文字] リストからパーティションに割り当てるドライブ文字を選択します。</p>



# Backup Exec System Recovery Granular Restore Option の使用

この章では以下の項目について説明しています。

- [Backup Exec System Recovery Granular Restore Option](#) について
- [Granular Restore Option](#) で使用するリカバリポイントを作成する場合のベストプラクティス
- [Granular Restore Option](#) の起動
- [Granular Restore Option](#) で実行できる処理
- 特定のリカバリポイントの内容の確認
- [Exchange](#) メールの復元について
- [SharePoint](#) ドキュメントの復元
- ファイルとフォルダの復元

## Backup Exec System Recovery Granular Restore Option について

[Granular Restore Option](#) は次のアプリケーションに個別復元の機能を提供するために Symantec Backup Exec System Recovery と連携して動作する管理ツールです:

- Microsoft Exchange™ 2003、2007、2010

---

**メモ:** Microsoft Exchange 2007 には 64 ビットの Windows オペレーティングシステムが必要です。Microsoft Exchange 2010 には Windows Vista SP2 64 ビット版か Windows Server 2008 64 ビット版が必要です。

---

- Microsoft SharePoint® 2003 と 2007
- ファイルおよびフォルダのデータ

Symantec Backup Exec System Recovery はボリュームレベルのリカバリポイントを作成するのに使われます。Granular Restore Option を使用すると、リカバリポイントを開き、Microsoft Exchange のメールボックス、フォルダ、個々のメッセージを復元できます。また Microsoft SharePoint ドキュメント、構造化されていないファイルとフォルダも復元できます。

## Granular Restore Option で使用するリカバリポイントを作成する場合のベストプラクティス

リカバリポイントを作成する場合は、次のガイドラインを参考にしてください。

- 選択したファイルおよびフォルダをバックアップするオプションではなく、コンピュータをバックアップするオプションを選択します。
- バックアップするドライブを選択する場合は、システムのすべてのドライブを選択していることを確認します。  
p.210 の「[バックアップするドライブを指定する方法](#)」を参照してください。
- 作成するリカバリポイントの種類を選択する場合は、[単体リカバリポイント]ではなく、[リカバリポイントセット]を選択します。この選択によって、後続のリカバリポイントのサイズが非常に小さくなります。
- バックアップを正常に実行するために、Exchange サーバーまたは SharePoint サーバーの電源を切る必要はありません。ただし、サーバーがビジー状態になりにくい時間帯（たとえば、午前 0 時以降）にバックアップをスケジュールしてください。
- マウントポイントを使用している場合は、マウントポイントをバックアップ対象として選択していることを確認します。

### バックアップするドライブを指定する方法

Exchange サーバーを保護するには、サーバー上のすべてのドライブが含まれるバックアップジョブを 1 つ作成することをお勧めします。ただし、ストレージグループやメッセージストアのレベルでバックアップを実行することもできます。バックアップが正常に実行されるように、次の事項を考慮してください。

**Exchange** のインストール先のドライブを含める Granular Restore Option では、Exchange サーバーのリカバリポイントを使用して復元操作が実行されます。そのため、Exchange サーバーを定期的にバックアップする必要があります。リカバリポイントを作成する場合、Exchange のインストール先ディレクトリが含まれるドライブを選択する必要があります。

たとえば、Exchange を C:\Program File\Exchsrvr ディレクトリにインストールした場合は、Cドライブ全体がリカバリポイントに含まれていることを確認してください。

バックアップするメッセージストアのストレージグループを含める ストレージグループはメッセージストアの集まりです。各ストレージグループには、メッセージストアへのバッファ書き込みで使用されるトランザクションログが含まれます。保護するメッセージストアのストレージグループのログファイルが含まれるドライブをバックアップする必要があります。

たとえば、First Storage Group という名前のストレージグループがあるとします。E:\Exchsrvr\mdbdata にストレージグループのトランザクションログがある場合、リカバリポイントに Eドライブ全体を含める必要があります。複数のストレージグループがある場合は、すべてのストレージグループを同時にバックアップする必要があります。複数のストレージグループを別々のスケジュールでバックアップする場合でも、バックアップに Exchange を含める必要があります。

保護するメッセージストアを含める 1つのメッセージストアは、電子メールを保存するデータベースファイルです。複数のメッセージストアはストレージグループのサブグループです。1つのメッセージストアのリカバリポイントを作成する場合は、そのメッセージストアのストレージグループも含める必要があります。

たとえば、Message Store (myserver) という名前のメッセージストアが、F:\Exchsrvr\mdbdata\Message Store (myserver).stm に配置されている場合、リカバリポイントに Fドライブ全体を含める必要があります。

Microsoft SharePoint サーバーをバックアップするときにドライブのサブセットを選択できます。ただし、サーバー全体を保護することを推奨します。Exchange の方法とは異なり、SharePoint のバイナリをバックアップする必要はありません。ただし、SharePoint データが含まれるすべてのボリュームをバックアップする必要があります。

## Granular Restore Option の起動

Granular Restore Option を起動する方法は使用する Windows のバージョンによって異なります。

### Granular Restore Option を起動する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。

- Backup Exec System Recoveryの[ツール]ページで、[Granular Restore Option を実行]をクリックします。
- Windows のクラシックタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[Granular Restore Option]の順にクリックします。
- Windows 2003、2008、XP、Vista、7のタスクバーで、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec Backup Exec System Recovery]、[Granular Restore Option]の順にクリックします。

## Granular Restore Option で実行できる処理

Granular Restore Option を使用して次のタスクを実行できます。

- Exchange メールを復元する。
  - 特定のリカバリポイントを開く。
  - メールボックスを復元する。
  - 電子メールフォルダを復元する。
  - 電子メールメッセージを復元または転送する。

p.213 の「[Exchange メールの復元について](#)」を参照してください。

- SharePoint ドキュメントを復元する。
  - 特定のリカバリポイントを開く。
  - 消失したドキュメントを検索または参照する。
  - ドキュメントを復元する。

p.216 の「[SharePoint ドキュメントの復元](#)」を参照してください。

- 構造化されていないファイルおよびフォルダを復元する。
  - 1 つまたは複数のリカバリポイントを開く。
  - 消失したファイルやフォルダを検索または参照する。
  - 消失したファイルおよびフォルダを復元する。
  - ファイルの 1 つのバージョンを復元する。

p.216 の「[ファイルとフォルダの復元](#)」を参照してください。

## 特定のリカバリポイントの内容の確認

リカバリポイントを開くと、メールボックス、電子メールフォルダとメッセージ、SharePoint ドキュメント、ファイルとフォルダを復元できます。

### 特定のリカバリポイントを開く方法

- 1 Backup Exec System Recovery の [ツール] ページで、[Granular Restore Option を実行] をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

作業しているコンピュータの最後のリカバリポイントを使用してリカバリポイントを開く方法 [このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用する] をクリックします。

システムインデックスファイルを使用してリカバリポイントを開く方法

- [システムインデックスファイルの使用 (\*.sv2i)] をクリックします。
- [参照] をクリックし、リカバリポイントを作成したときに保存先として指定したフォルダを選択します。
- 拡張子が .sv2i のファイルを選択してリカバリポイントの内容を表示します。
- [開く] をクリックします。

別のコンピュータに存在するリカバリポイントを開く方法

- [別のコンピュータのリカバリポイントを使用する] をクリックします。
- [参照] をクリックします。
- [フォルダを参照] ダイアログボックスで、別のコンピュータのバックアップ先に移動します。そして [OK] をクリックします。

- 3 [リカバリポイントを開く] ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。
- 4 右上で別の日付を選択すると、表示するバックアップ日を変更することができます。

## Exchange メール の復元について

Symantec Backup Exec System Recovery を使用して、メールボックス、電子メールフォルダ、または電子メールメッセージを復元できます。

p.214 の「[メールボックスの復元](#)」を参照してください。

p.214 の「[電子メールフォルダの復元](#)」を参照してください。

p.215 の「[電子メールメッセージの復元](#)」を参照してください。

## メールボックスの復元

復元されたメールボックスは、リカバリポイントの作成時にユーザーのメールボックスに含まれていたすべての電子メールで構成されます。復元されたメールボックスは、PST ファイルとしてディスク上に保存されます。

Microsoft Outlook を使用すると、ファイルを開いて内容を表示できます。復元されたメールボックスを Outlook で開いた後、電子メールやフォルダをドラッグして元の場所に戻すことができます。

---

**メモ:** 多くの場合、1 つのメッセージを見つけるよりもユーザーのメールボックス全体を復元する方が簡単です。

---

### メールボックスを復元する方法

- 1 Backup Exec System Recovery の [ツール] ページで、[Granular Restore Option を実行] をクリックします。
- 2 メールがサーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
- 3 [Exchange メール] タブをクリックします。
- 4 メールボックスのリストで、復元するメールボックスを選択して [復元] をクリックしてください。
- 5 復元したメールボックスを配置したいフォルダを選択し、次に [OK] をクリックしてください。

---

**メモ:** メールボックスのサイズが大きい場合、共有フォルダにコピーする必要がある場合があります。

---

## 電子メールフォルダの復元

メールボックス全体を復元する代わりに、フォルダ単位で復元を行うことができます。たとえば、送信したメッセージのコピーが必要な場合は、[送信済みアイテム] フォルダのみを復元する方が早く済む場合があります。

復元されたフォルダは、PST ファイルとしてディスク上に保存されます。Microsoft Outlook を使用すると、フォルダを開いて内容を表示できます。復元された電子メールフォルダを Outlook で開いた後、電子メールやフォルダをドラッグして元の場所に戻すことができます。

### 電子メールフォルダを復元する方法

- 1 Backup Exec System Recovery の [ツール] ページで、[Granular Restore Option を実行] をクリックします。
- 2 メールがサーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
- 3 [Exchange メール] タブをクリックします。
- 4 復元を要求したユーザーのメールボックスを選択します。
- 5 フォルダのリストで適切なフォルダを選択して、ツールバーの [復元] をクリックします。
- 6 復元したフォルダを配置するフォルダを選択します。

## 電子メールメッセージの復元

Granular Restore Option を使って個々の電子メールメッセージを復元することができます。個々のメッセージは、MSG ファイル形式でディスク上に保存したり、ユーザーに直接転送したりできます。保存された MSG ファイルの内容を開いて表示するには、Microsoft Outlook を使用します。

### 電子メールメッセージを復元する方法

- 1 Backup Exec System Recovery の [ツール] ページで、[Granular Restore Option を実行] をクリックします。
- 2 メールがサーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
- 3 [Exchange メール] タブをクリックします。
- 4 復元を要求したユーザーのメールボックスを選択します。
- 5 復元するメッセージを含むフォルダを選択します。
- 6 復元するメッセージを選択してください。

---

**メモ:** 列見出しをクリックすると、リストをソートできます。また、メッセージのリストの近くにある検索フィールドに検索する用語を入力すると、メッセージの件名を検索できます。検索ボックスの文字を追加したり削除したりすると、自動的に結果が変更されます。

---

- 7 ユーザーに電子メールメッセージを返すには、次のいずれかを実行してください：
  - Microsoft Outlook がインストールされている場合は、メッセージをダブルクリックして Outlook で開きます。Outlook を使って所有者にメッセージを送り返すことができます。
  - Outlook のメッセージを転送する場合は、メッセージを右クリックし、次に [次へ] をクリックしてください。

**Outlook** は新しいメッセージを開きます。転送するメッセージは添付ファイルとして含まれます。元の所有者にこのメッセージを転送できます。

- ディスクにメッセージを保存する場合は、メッセージを選択し、ツールバーの[修復]をクリックします。ファイル名を入力し、次に[保存]をクリックしてください。電子メールメッセージがディスクに保存されます。**Outlook** を使ってメッセージを開くことができます。

## SharePoint ドキュメントの復元

Symantec Backup Exec System Recovery は、Microsoft SharePoint サーバーのバックアップドキュメントの復元に使用できます。SharePoint ドキュメントはローカルシステムに復元されます。必要に応じて、Microsoft SharePoint を使用してドキュメントを SharePoint サーバーに戻すことができます。

### SharePoint ドキュメントを復元する方法

- 1 Backup Exec System Recovery の [ツール] ページで、[Granular Restore Option を実行] をクリックします。
- 2 対象のファイルがサーバー上で有効だった期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
- 3 [SharePoint ドキュメント] タブをクリックします。
- 4 復元するファイルを参照または検索します。

---

**メモ:** 列見出しをクリックすると、リストをソートできます。ドキュメントリストの近くにある検索フィールドに検索する用語を入力することができます。検索ボックスの文字を追加したり削除したりすると、自動的に結果が変更されます。

---

- 5 内容を表示する場合または復元する場合は対象のファイルをクリックし、横にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。
- 6 [復元] をクリックし、復元先を選択します。

## ファイルとフォルダの復元

Granular Restore Option は構造化されていないファイルとフォルダの復元に使うことができます。この機能は、消失したファイルやフォルダを見つけるために、複数のリカバリポイント(複数のバックアップ日付)を検索する必要がある場合に特に便利です。



### ファイルまたはフォルダを復元する方法

- 1 Backup Exec System Recoveryの[ツール]ページで、[Granular Restore Option を実行]をクリックします。
- 2 対象のファイルがサーバー上で有効だった期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
- 3 デフォルトで選択されていない場合は、[ファイルやフォルダ]タブをクリックしてください。
- 4 復元するファイルを参照または検索します。

一度に複数のリカバリポイントを表示できます。複数のリカバリポイントが含まれるファイルシステムを表示するには、[バージョン]をクリックしてください。リスト内の表示するバージョンにチェックマークを付けて選択します。

列見出しをクリックすると、リストをソートできます。ドキュメントリストの近くにある検索フィールドに検索する用語を入力することができます。検索ボックスの文字を追加したり削除したりすると、自動的に結果が変更されます。
- 5 内容を表示する場合または復元する場合は対象のファイルをクリックし、横にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。
- 6 [復元]をクリックし、復元先を選択します。

---

**メモ:** 複数のリカバリポイントを表示する場合、複数のバージョンのファイルが利用可能であれば、バージョンのリストを展開できます。各ファイルの隣にあるプラス記号をクリックします。復元するファイルを選択した後で、目的のファイルのバージョンを選択します。

---



# 検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索

この付録では以下の項目について説明しています。

- [検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索について](#)
- [検索エンジンのサポートの有効化](#)
- [Google デスクトップのデスクトップ検索機能を使用したファイルの修復](#)

## 検索エンジンを使用したリカバリポイントの検索について

Backup Exec System Recovery では、Google デスクトップを使用して、リカバリポイントに含まれるファイル名を検索することができます。

---

**メモ:** Symantec Backup Exec Retrieve も使用できますが、インストールは、会社の IT 部門が行う必要があります。インストール時は、製品を有効にするためにユーザーが行う操作はありません。詳しくは、IT 部門にお問い合わせください。

---

検索エンジンのサポートを有効にすると、Backup Exec System Recovery によって、リカバリポイントに含まれるすべてのファイルのカタログが作成されます。Google デスクトップなどの検索エンジンでは、このカタログファイルを使用してインデックスを生成します。これにより、名前でファイルを検索できます。Google デスクトップは、ファイルの内容にはインデックス付けを行いません。ファイル名にのみインデックス付けを行います。

## 検索エンジンのサポートの有効化

Google デスクトップなどの検索エンジンでこの機能を使用するには、次のすべての操作を実行する必要があります。

検索エンジンをインストールする

**Backup Exec Retrieve** のインストールは、組織の IT 部門が行います。インストールについて、IT 部門にお問い合わせください。

**Google デスクトップ** は、インターネットから無料でダウンロードしてインストールできます。[desktop.google.com](https://desktop.google.com) を参照してください。

p.221 の「[Google デスクトップをインストールする方法](#)」を参照してください。

**Google デスクトップ** のサポートを有効にする

**Google** 検索を使用してファイルの検索および修復を行うには、**Backup Exec System Recovery** のための **Google** プラグインが必要です。

この機能を有効にすると、プラグインは自動的にインストールされます。

p.221 の「[Google デスクトップのサポートを有効にする方法](#)」を参照してください。

バックアップジョブを定義または編集するとき、検索エンジンのサポートを有効にする

バックアップジョブを定義するとき、または既存のバックアップジョブを編集するとき、検索エンジンのサポートを有効にできます。

次にバックアップが実行されるとき、作成されたリカバリポイントに含まれるすべてのファイルのリストが作成されます。**Google デスクトップ** などの検索エンジンは、そのリストを使用してインデックスを独自に生成します。そのインデックスを使用して、ファイル名により検索を実行することができます。

p.221 の「[バックアップジョブの検索エンジンのサポートを有効にする方法](#)」を参照してください。

---

**メモ:** この機能を有効にするときにすでに存在するリカバリポイントには、インデックス付けできません。これは、検索エンジンが検索可能なインデックスを生成するにはファイルのリストが必要ですが、そのリストはリカバリポイントが作成されるときに生成され、リカバリポイントに追記されるためです。この機能を有効にした後で、各バックアップを実行し、インデックス付けに必要な情報が含まれる新しいリカバリポイントを作成します。

---

**メモ:** バックアップ先がネットワークドライブにある場合、その場所を **Google デスクトップ** の [ユーザー設定] に追加してください。

---

### Google デスクトップをインストールする方法

- 1 Backup Exec System Recovery を起動します。
- 2 [タスク]、[オプション]、[Google デスクトップ]の順にクリックします。
- 3 [Google デスクトップのダウンロード]をクリックし、インストールの指示に従います。
- 4 インストールしたら、Backup Exec System Recovery の[オプション]ウィンドウで、[OK]をクリックします。

詳しくは [desktop.google.com](http://desktop.google.com) を参照してください。

### Google デスクトップのサポートを有効にする方法

- 1 Backup Exec System Recovery を起動します。
- 2 [タスク]、[オプション]、[Google デスクトップ]の順にクリックします。
- 3 [Google デスクトップによるファイルとフォルダの復元を有効にする]を選択します。
- 4 [OK]をクリックします。

Google デスクトップをインストールしていない場合は、このオプションを利用できません。Google デスクトップをインストールしてから、この手順を繰り返してください。

- 5 [OK]をクリックして、Google プラグインをインストールします。

### バックアップジョブの検索エンジンのサポートを有効にする方法

- 1 Backup Exec System Recovery を起動します。
- 2 次のいずれかを実行します。
  - 既存のバックアップジョブを編集して、ウィザードの[オプション]ページの[Google デスクトップおよびBackup Exec Retrieve の検索エンジンのサポートを有効化]を選択します。
  - 新しいバックアップジョブを定義して、ウィザードの[オプション]ページの[Google デスクトップおよびBackup Exec Retrieve の検索エンジンのサポートを有効化]を選択します。

## Google デスクトップのデスクトップ検索機能を使用したファイルの修復

Google デスクトップを正しく設定してサポートを有効にしている場合、Google デスクトップを使用して、保存されているリカバリポイントを検索し、ファイルを修復することができます。

p.219 の「[検索エンジンのサポートの有効化](#)」を参照してください。

### Google デスクトップのデスクトップ検索機能を使用してファイルを修復する方法

- 1 Google デスクトップを起動します。
- 2 修復するファイルの名前(または名前の一部)を入力し、[デスクトップを検索]をクリックします。
- 3 修復するファイルを含む検索結果をクリックします。
- 4 関連付けされているアプリケーションでファイルを開く場合は、[ファイル]、[名前を付けて保存]の順にクリックして、修復したファイルを保存します。

また、検索結果を右クリックしてから[開く]をクリックして、**Recovery Point Browser**でリカバリポイントを開くこともできます。

p.135 の「[リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)」を参照してください。

## Google デスクトップを使用したファイルの検索について

検索エンジンのサポートが有効なリカバリポイントにファイルが含まれているのにファイルが見つからない場合は、次の操作を実行します。

- システムトレイの **Google** デスクトップアイコンを右クリックして、[インデックスの作成]、[インデックスの再作成]の順にクリックします。  
インデックスの再作成には、長時間かかる場合があります。これが完了するまで待機してから再検索してください。
- システムトレイの **Google** デスクトップアイコンを右クリックして、[設定]をクリックします。  
[検索するアイテム]で、[ウェブの履歴]にチェックマークが付けられていることを確認します。このオプションにチェックマークを付ける必要があります。チェックマークを付けないと、**Google** デスクトップはリカバリポイントの内容に対してインデックス付けを実行できません。
- リカバリポイント(バックアップ先)を含むドライブが利用可能であることを確認します。  
たとえば、バックアップ先が **USB** ドライブにある場合は、ドライブが接続され、電源が入っていることを確認してください。または、バックアップ先がネットワーク上にある場合は、接続が確立され、適切な資格情報でログインしていることを確認してください。
- **v2i** を検索文字列に追加して、検索結果数を絞り込みます。たとえば、**My Tune mp3** を検索する場合は、**v2i** を追加して、検索文字列が **My Tune mp3 v2i** になるようにします。  
リカバリポイントファイルは、**.v2i** をファイルの拡張子として使用します。これを検索文字列に追加すると、リカバリポイントにない検索結果は除去されます。
- バックアップ先がネットワークドライブにある場合、その場所を **Google** デスクトップの [設定] の [次の場所を検索] 設定に追加してください。

# VSS 対応データベースのバックアップについて

この付録では以下の項目について説明しています。

- [VSS 対応データベースのバックアップについて](#)
- [VSS 非対応データベースのバックアップについて](#)

## VSS 対応データベースのバックアップについて

Symantec Backup Exec System Recovery は、Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS)と統合されて、次のような VSS 対応データベースのバックアップ処理を自動化します。

- Exchange Server 2003 以降
- SQL Server 2005 以降
- Windows Server 2003 ベースのドメインコントローラまたはそれ以降

VSS 対応データベースは自動的に有効になり、無効にすることはできません。VSS により、管理者はサーバー上のボリュームのシャドウコピーバックアップを作成できます。シャドウコピーには、すべてのファイル(開いているファイルを含む)が含まれます。

リカバリポイントを作成するとき、Backup Exec System Recovery は VSS (Volume Shadow Copy Service) に警告します。VSS は、VSS 対応データベースを一時的に休止(スリープ)状態にします。この休止状態の間、データベースがバックアップされると同時に、トランザクションログに対して書き込みが続行されます。データベースが静止した後、Backup Exec System Recovery はスナップショットを作成します。スナップショットの作成が完了すると VSS に通知されます。データベースが復帰すると、トランザクションログがデータベースに対してコミットされます。同時に、リカバリポイントが作成されます。データベースはスナップショット作成の間だけ休止され、リカバリポイント作成の残りのプロセスの間はアクティブになります。

Backup Exec System Recovery は、Microsoft 社の Volume Shadow Copy Service (VSS) テクノロジーを実装した Exchange Server 2003 以降をサポートします。ただし、データベースの負荷が高い場合には、VSS 要求が無視される可能性があります。リカバリポイントの作成は負荷が最も低い時間帯に実行してください。

指定したデータベースの最新の Service Pack がインストールされていることを確かめてください。

## Exchange データベースで Backup Exec System Recovery を使う場合に推奨される方法

Backup Exec System Recovery とともに実行する場合、他のバックアップアプリケーションは不要です。

## VSS 非対応データベースのバックアップについて

Backup Exec System Recovery 2010 を使用すると、VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントまたはホットリカバリポイントを手動または自動で作成できます。

Symantec Backup Exec System Recovery サーバーにもデータベースが存在しているため、定期的にサーバーをバックアップする必要があります。データの消失または破損を防ぐためには、バックアップを実行する前に Symantec Backup Exec System Recovery Web Services を停止する必要があります。バックアップを実行するには、Symantec Backup Exec System Recovery を使用してコールドリカバリポイントを自動的に作成します。

p.224 の「[VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントの手動作成](#)」を参照してください。

p.225 の「[VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントの自動作成](#)」を参照してください。

p.226 の「[VSS 非対応データベースのホットリカバリポイントの作成](#)」を参照してください。

## VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントの手動作成

コールド(オフライン)リカバリポイントを手動で作成すると、すべてのデータベーストランザクションをハードディスクに保持できます。その後、Backup Exec System Recovery を使用してリカバリポイントを作成し、データベースを再起動します。



### VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントを手動で作成する方法

- 1 データベースを手動で停止します。
- 2 Symantec Backup Exec System Recovery を使用し、[バックアップを実行]または [ワнтаイムバックアップ]機能を使用してバックアップをすぐに実行します。

Backup Exec System Recovery により、データベースの「仮想ボリュームリカバリポイント」が即座に作成されます。

- 3 コンソールの [監視] ページにリカバリポイントのプログレスバーが表示されたら、手動でデータベースを再起動します。

データベースが再起動されている間に、実際のリカバリポイントが仮想ボリュームリカバリポイントから作成されます。

## VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントの自動作成

VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイント作成を自動化する場合は、バックアップジョブ内でデータ取得前にコマンドファイルを実行してデータベースを一時的に停止 (または休止) し、すべてのトランザクションログをハードディスクに保持します。その後、Backup Exec System Recovery により、すぐに「仮想ボリュームリカバリポイント」が作成されます。2 番目のコマンドファイルがバックアップ内で実行されて自動的にデータベースが再起動し、仮想ボリュームリカバリポイントからリカバリポイントが作成されます。

仮想ボリュームスナップショットの作成にかかる時間はわずか数秒で、データベースがリカバリポイントを作成している状態にあるのは短時間です。そのため、作成されるログファイル数が最小限に抑えられます。

---

**メモ:** VSS に対応していない Windows 2000 サーバー上でドメインコントローラを実行している場合は、最初に NTbackup を使用して Active Directory データベースをバックアップしてから、Backup Exec System Recovery を使用してシステム全体を保護する必要があります。バックアップ内でコマンドファイルを実行することにより、このプロセスを自動化できます。

---

### VSS 非対応データベースのコールドリカバリポイントを自動で作成する方法

- 1 次に示すリカバリポイントの各段階で使用するコマンドファイルを作成し、そのコマンドファイルを含むバックアップを定義します。

データ取得前                      データベースを停止するコマンドファイル

データ取得後                      データベースを再起動するコマンドファイル

- 2 Backup Exec System Recovery を使用して、コマンドファイルを含むバックアップジョブを実行します。

## VSS 非対応データベースのホットリカバリポイントの作成

コールドリカバリポイントを作成できない場合、VSS 非対応データベースのバックアップとして 2 番目の選択肢は、ホット(オンライン)リカバリポイントです。

**Backup Exec System Recovery** では、「クラッシュ整合性」リカバリポイントが作成されます。このようなリカバリポイントは、電源障害時に実行していたシステムの状態に相当します。この種類のエラーから修復できるデータベースは、「クラッシュ整合性」リカバリポイントからの修復が可能です。

### VSS 非対応データベースのホットリカバリポイントを作成する方法

- ◆ **Backup Exec System Recovery** を使用して、データベースを停止または再起動せずにリカバリポイントを作成します。

**Backup Exec System Recovery** により、「仮想ボリュームリカバリポイント」が即座に作成されます。この「仮想ボリュームリカバリポイント」からリカバリポイントが作成されます。

# Active Directory について

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Active Directory の役割について](#)

## Active Directory の役割について

Symantec Backup Exec System Recovery でドメインコントローラを保護する場合は、次の事項に注意してください。

- ドメインコントローラが Windows Server 2003 の場合は VSS がサポートされます。Backup Exec System Recovery は自動的に VSS を呼び出して Active Directory データベースのバックアップの準備を行います。
- ドメインに参加するためには、すべてのドメインコンピュータは、ドメインコントローラとトラストトークンをネゴシエートする必要があります。このトークンは、デフォルトで 30 日ごとに更新されます。このタイムフレームは変更することができ、セキュリティが確保されたチャネルトラストと呼ばれます。一方、リカバリポイントに含まれるトラストトークンは、ドメインコントローラによって自動的に更新されません。したがって、古いトークンを含むリカバリポイントを使用して修復されたコンピュータは、適切な資格情報を持つユーザーによってドメインに再度追加されない限り、ドメインには参加できません。Backup Exec System Recovery では、修復プロセスの開始時にコンピュータがドメインに参加する場合、このトラストトークンは自動的に再度確立されます。
- ほとんどの場合、ドメインコントローラは非公式に復元される必要があります。これによって、Active Directory の古いオブジェクトが復元されないようにすることができます。古いオブジェクトは、tombstone (廃棄) と呼ばれます。Active Directory は設定された制限よりも古いデータは復元しません。ドメインコントローラの有効なリカバリポイントの復元は、非公式の復元と同じことになります。実行する復元の種類を決定する際には、Microsoft 社のドキュメントを参照してください。非公式な復元では、tombstone の競合を回避できます。

VSS 非対応のドメインコントローラについて詳しくは Web ページにあるホワイトペーパーの「Protecting Active Directory」を参照してください。

<http://sea.symantec.com/protectingdc> (英語)

また、シマンテック社のナレッジベースの次の文書も参照してください。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-16>

# Microsoft の仮想環境のバックアップについて

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて](#)
- [Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元について](#)

## Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて

Microsoft Windows 7 と Windows Server 2008 R2 で仮想ハードディスク (VHD) の使用がサポートされるようになりました。Microsoft 社では、同じバックアップジョブでの物理ディスクおよびその物理ディスク上の VHD のバックアップはサポートされていません。この制限は Backup Exec System Recovery にも適用されます。Backup Exec System Recovery を使用して同じバックアップジョブで物理ディスクとそれに対応する VHD をバックアップすることはできません。また、別の VHD でホストされている VHD または別の VHD 内にネストされている VHD をバックアップする機能もサポートされていません。物理ディスクおよびその物理ディスク上の VHD をバックアップする場合は、各ディスクに対して個別のバックアップを作成する必要があります。

VHD をホストする物理ディスクのバックアップは、同じバックアップにその VHD を別のボリュームとして含めないかぎりサポートされます。VHD をホストする物理ディスクをバックアップする場合、その VHD は物理ディスクのバックアップの一部である別のファイルとして処理されます。

VHD は物理ディスクのホスト (ボリューム) に接続したり、物理ディスクのホストから切り離したりすることができます。Microsoft 社では、バックアップの前にホストボリュームに保存されている VHD を切り離すことを推奨しています。バックアップの前に VHD を切り離さないと、バックアップ時にホストボリュームで一貫性のない VHD のコピーが作成される可能性があります。ホストボリュームを復元した後、VHD ファイルを再接続できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-2>

VHD のバックアップについて詳しくは Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

[http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd440865\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd440865(WS.10).aspx)

## Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元について

Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップを作成するには、仮想マシンがホストされているコンピュータのボリュームをバックアップする必要があります。これを行うには、ホストマシンのライブバックアップまたはシステム状態バックアップのいずれかを作成します。特定の仮想マシンをバックアップまたは復元できます。ライブバックアップは仮想マシンの実行中に作成されます(ホットバックアップ)。システム状態バックアップは仮想マシン上のゲストオペレーティングシステムが実行されていないとき(コールドバックアップ)または Hyper-V VSS 統合コンポーネントが仮想マシンにインストールされていない場合に作成されます。

---

**メモ:** Backup Exec System Recovery ではクラスタ化された共有ボリュームはバックアップできません。このような設定のボリュームはクラスタ化された各 Hyper-V ホストコンピュータにアクセスできるため、特定のボリュームをバックアップ用にロックすることができません。ただし、1 つのホストにディスクへの排他的なアクセス権があるため、クラスタ化されたディスクは Backup Exec System Recovery でバックアップできます。

---

実行中の仮想マシンのバックアップを作成するには、次の条件を満たす必要があります。

- ゲストオペレーティングシステムが実行されている。
- ゲストマシンで Windows Server 2003 以降 が実行されている。  
ゲストマシンで Windows 2000、Windows XP 32 ビットまたは 64 ビットが実行されている場合は、システム状態バックアップのみを作成できます(コールドバックアップ)。
- バックアップする各仮想マシンに Hyper-V VSS 統合コンポーネントがインストールされている。  
仮想マシンを Virtual Server 2005 から Hyper-V に移動する場合は、Hyper-V VSS 統合コンポーネントをインストールする前に、まず Virtual Server 2005 統合コンポーネントを仮想マシンからアンインストールする必要があります。
- ゲスト仮想マシンが、ダイナミックディスクではなくベーシックディスクのみを使用するように設定されている。  
これは、Windows 仮想マシンをインストールする場合のデフォルトです。
- 固定ディスク上のすべてのボリュームでスナップショットの作成がサポートされている。

前述の条件が満たされていない場合にバックアップを実行しようとする、Backup Exec System Recovery はクラッシュ整合性のあるシステム状態リカバリポイントを作成します。

クラッシュ整合性のあるリカバリポイントでは、システム障害や停電が発生した場合と同様に仮想マシンが取得されます。

仮想マシンを復元するには、ホストコンピュータのリカバリポイントを復元する必要があります。ホストコンピュータのリカバリポイントには、復元する仮想マシンを保持するボリュームが含まれている必要があります。特定の仮想マシンを復元することはできません。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-2>





# Backup Exec System Recovery 2010 と Windows Server 2008 Core について

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Backup Exec System Recovery 2010 および Windows Server 2008 Core について](#)
- [コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Backup Exec System Recovery 2010 のインストール](#)

## Backup Exec System Recovery 2010 および Windows Server 2008 Core について

Windows Server 2008 Core には、他のバージョンの Windows で利用可能な従来のグラフィカルユーザーインターフェース (GUI) は含まれていません。主にコマンドを使用してコマンドラインインターフェースでインストールおよび管理されます。

Backup Exec System Recovery 2010 は Windows Server 2008 Core にインストールできますが、これはエージェントのみのインストールです。Windows Server 2008 Core の場合、.NET はサポートされません。このため、Backup Exec System Recovery の GUI はインストールできません。Backup Exec System Recovery は Windows Server 2008 Core では単なるエージェントのみでサポートされます。Backup Exec System Recovery 2010 はコマンドラインでコマンドを使用してインストールできます。また、リモートマシンからエージェントをインストール (プッシュ) することもできます。

Windows Server 2008 Core マシンのバックアップと復元でサポートされている方法は 1 対 1 の管理のみです。つまり、Windows Server 2008 Core マシンにエージェントをインストールした後でバックアップまたは復元するには、Backup Exec System Recovery

2010 または Backup Exec System Recovery Management Solution が実行されているリモートマシンからこのマシンに接続する必要があります。

エージェントをリモートでインストールし、Windows Server 2008 Core マシンでバックアップ機能と復元機能を管理する前に、サーバーにアクセスできるようにファイアウォールを設定する必要があります。デフォルトでは、ファイアウォールはサーバーにアクセスできないように設定されています。

Windows Server 2008 Core マシンでのファイアウォールの設定について詳しくは Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

Windows-on-Windows 64 ビット (WoW64) は Windows オペレーティングシステムのサブシステムで、64 ビット版の Windows で 32 ビットのアプリケーションを実行する場合に必要となります。デフォルトでインストールされ、すべての 64 ビット版の Windows に含まれています。Windows Server 2008 Core R2 マシンで WoW64 をアンインストールした場合は、Backup Exec System Recovery 2010 をインストールする前に再インストールする必要があります。

## コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Backup Exec System Recovery 2010 のインストール

Windows Server 2008 Core システムに Backup Exec System Recovery 2010 をインストールする場合は 2 つのオプションがあります。それらを次に示します。

- ログ付きのフルサイレントインストール
- ログ付きのエージェントのみのサイレントインストール

### GUI サポート付きのフルインストールを実行する方法

- 1 Backup Exec System Recovery 2010 CD で、AutoRun.exe を参照して実行します。

これによって、インストールの残りの手順を実行するグラフィカル環境 (GUI) が起動されます。

- 2 インストールウィザードの手順に従ってインストールプロセスを完了します。

Backup Exec System Recovery がフルインストールされた場合でも、Windows Server 2008 Core ではエージェントのみが必要とされ、使用されます。

### ログ付きのフルサイレントインストールを実行する方法

- 1 Backup Exec System Recovery 2010 CD で、インストールディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
Setup.exe /s /v"/qn /l*v %temp%\BESRInstall.log"
```

Backup Exec System Recovery がフルインストールされた場合でも、Windows Server 2008 Core ではエージェントのみが必要とされ、使用されます。

### ログ付きのエージェントのみのサイレントインストールを実行する方法

- 1 Backup Exec System Recovery 2010 CD で、インストールディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
Setup.exe /s /v"/qn AddLocal=Agent,Shared,BESRSecurityShortCut /l*v %temp%\BESRInstall.log"
```



- .sv2i、複数のドライブを復元するための使用 181
- 「オプションを指定してバックアップを実行」機能 96
- イベントログ
  - トラブルシューティングでの使用 132
  - 説明 132
- インストール
  - 無効な機能 20
- エージェント
  - Microsoft サービス 111
  - サービスのトラブルシューティング 111
- コンピュータ
  - コンピュータリストへの追加 106
- コンピュータのエージェント
  - サービス、確認 110
  - 説明 110
- コンピュータのエージェントサービスの停止 110
- コンピュータのエージェントサービスの確認 110
- コンピュータリスト
  - コンピュータの追加 106
- コールドリカバリポイント
  - VSS 非対応データベース用に手動作成 224
  - VSS 非対応データベース用に自動作成 225
- サービス
  - エージェントの使用 111
  - 使用のベストプラクティス 112
- スケジュール
  - バックアップの編集 101
- タスク、キャンセル 98
- タスクの停止 98
- タブ
  - イベントとログファイル 112
- ディスク
  - 再スキャン 122
- ディスクの再スキャン 122
- デフォルト設定
  - Backup Exec System Recovery Agent の変更 113
- データベース
  - VSS 非対応のバックアップ 224
- トラブルシューティング
  - エージェント 111
- ドメインユーザー
  - Windows Server 2003 SP1 の権限の付与 109
- ドライブ
  - コピー 205
  - リカバリポイントのマウント解除 137
  - 各詳細 129
- ドライブのコピー 205
- ドライブベースのバックアップ
  - 説明 52、140
- ハードディスク
  - 再スキャン 122
- ハードディスクドライブ
  - 別のドライブへのコピー 207
- バックアップ
  - アドバイス 57
  - コンピュータのパフォーマンス重視の低速 98
  - スケジュールの編集 101
  - データベース、VSS 非対応 224
  - バックアップ中の作業 55
  - ファイルおよびフォルダのバックアップ中に除外されるフォルダ 93
  - ベストプラクティス 52
  - 今すぐ実行 95
  - 保存場所の管理 139
  - 削除 102
  - 効率的なバックアップのベストプラクティス 52
  - 正常終了の検証 99、124
  - 状態 99、124
  - 監視 121
  - 種類 52
  - 高速 98
- バックアップの状態 99
- バックアップを実行する上でのアドバイス 57
- バックアップデータ
  - 自動管理 159
- バックアップ保存場所
  - 説明 139
- バックアップ先
  - 仕組み 139
- ファイル
  - バージョンの検索 159

ファイルおよびフォルダ  
 リカバリポイントに保存された状態から開く 167  
 検索 167

ファイルおよびフォルダのバックアップ  
 含まれないフォルダ 93  
 説明 52

ファイルおよびフォルダのバックアップデータ  
 保存されているデータ量の表示 158  
 管理 157

ファイルバージョン  
 保存する数の制限 158

フォルダ  
 バージョンの検索 159

ベストプラクティス、サービス 112

リカバリポイント  
 セットの削除 142  
 ドライブのマウント解除 137  
 保存されたファイルやフォルダを開く 167  
 古いもののクリーンアップ 141

リカバリポイントドライブのマウント解除 137

レポート、ログファイル 112

ログファイル  
 イベント 132  
 確認 112

今すぐバックアップを実行  
 説明 95

作成後のリカバリポイントの検証 124

保護の状態 99

時間、[イベント]タブの経過時間 112

検索エンジン  
 使用 136

権限  
 Windows Server 2003 SP1 でのドメインユーザー  
 に対する付与 109

無効な機能 20

状態レポート  
 ドライブごとのカスタマイズ 128

現在の操作のキャンセル 98

製品のアクティブ化 26

起動  
 コンピュータのエージェントサービス 110

[イベント]タブ、ログファイル履歴 112

[詳細]ページ  
 表示または非表示 15  
 説明 15

## A

Active Directory  
 役割 227

## B

Backup Exec System Recovery  
 新機能 14  
 デフォルトオプションの設定 38  
 使用方法 36  
 詳細情報 15

Backup Exec System Recovery Agent  
 自動的な起動 112

Backup Exec System Recovery Agent、デフォルト設定  
 の変更 113

Backup Exec System Recovery Agent  
 修復操作の設定 115  
 製品 CD からの手動インストール 107  
 ネットワークを介した配備 107

Backup Exec System Recovery を使うメリット 13

Basic Edition、無効な機能 20

## E

Exchange  
 電子メールフォルダの復元 214  
 電子メールメッセージの復元 215  
 保護 211  
 メールの復元 213  
 メールボックスの復元 214

Exchange データベース  
 Symantec Backup Exec System Recovery で使う  
 場合に推奨される方法 224

## G

Google デスクトップ  
 サポートするためのバックアップの設定 136

Google デスクトップ  
 サポートの有効化 24  
 使用するためのサポートの設定 219  
 リカバリポイントの検索での使用 219

Granular Restore Option 209

## H

hiberfil.sys 71

Hyper-V マシン、サポート 230

## L

LightsOut Restore 170  
 起動 172  
 再設定 174  
 復元 170

LiveUpdate、使用 26

**M**

Microsoft 仮想ディスク 145  
 Microsoft 仮想ディスク(.vhd) 151  
 Microsoft 仮想ハードディスク、サポート 229

**N**

NTbackup  
 バックアップ 227

**P**

P2V  
 仮想変換ジョブ、今すぐ実行 156  
 仮想変換ジョブ、削除 157  
 仮想変換ジョブ、進行状況の表示 156  
 仮想変換ジョブ、プロパティの表示 156  
 仮想変換ジョブ、編集 156  
 スケジュール 151  
 ワンタイム 145  
 pagefile.sys 71  
 pcAnywhere Thin Host  
 リモート修復の使用 198

**R**

RAM ドライブ  
 未サポート 20  
 Recovery Point Browser  
 リカバリポイント内でファイルを開く 135  
 Restore Anyware 190  
 復元 190  
 Restore Anyware  
 使用 190

**S**

SharePoint  
 ドキュメントの復元 216  
 SmartSector コピー  
 説明 74  
 Symantec Backup Exec System Recovery  
 異なるユーザー権限で実行 118  
 使用 212  
 復元 212  
 Symantec Backup Exec Web Retrieve  
 バックアップに関する設定 136  
 Symantec Recovery Disk  
 オプション、LightsOut Restore 173  
 カスタム作成 31  
 仮想ディスクファイルからのコンピュータの修復 186

起動 178  
 コンピュータの修復 181  
 サポートユーティリティ 204  
 修復オプション 184  
 使用中のコンピュータの検索 197  
 静的 IP アドレスの割り当て 201  
 説明 177  
 テスト 29～30  
 ドライブのプロパティの表示 203  
 ドライブのマッピング 200  
 トラブルシューティング 179  
 ネットワーク接続の設定 201  
 ネットワークツール 198  
 バックアップの作成について 80  
 バックアップを作成 81  
 ハードディスクのスキャン 181  
 ファイルとフォルダの修復 196  
 ブート 178  
 リカバリポイントとドライブのプロパティの表示 202  
 リカバリポイントのプロパティの表示 202  
 Symantec Recovery Disk からコンピュータを検索 197  
 Symantec Recovery Disk からのドライブのマッピング 200  
 Symantec Backup Exec Web Retrieve  
 リカバリポイントの検索での使用 219

**T**

ThreatCon レスポンス  
 有効化または無効化 100

**V**

VHD、接続 66  
 VMware ESX 151  
 VMware ESX Server 145  
 VMware 仮想ディスク 145  
 VMware 仮想ディスク(.vmdk) 151  
 VSS  
 完全バックアップの実行 75  
 サポート 227  
 VSS 非対応データベース、バックアップ 224  
 VSS、データベースのバックアップ 223

**W**

Windows Server 2003 SP1  
 ドメインユーザーに対する権限の付与 109  
 Windows エクスプローラ  
 ファイルおよびフォルダのバージョン情報の表示 159

## Windows 7

- サポート 14、17

## Windows エクスプローラ

- リカバリポイントのマウント 135

## Windows からのワンタイムバックアップ 79

## あ

## アーカイブ

- リカバリポイントのコピー 143

## アクセス

- ユーザーまたはグループを許可または禁止 116

## アップグレード

- Backup Exec System Recovery の評価版 22

## 暗号化

- リカバリポイント 76

- [意見を送信] 38

- 依存関係、エージェントの表示 113、115

## イベント起動のバックアップ

- ThreatCon レスポンス 100

- 有効化 100

## インストール

- 後 24

- サポートされるファイルシステム 19

- サポートされるリムーバブルメディア 19

- システム要件 17

- 準備 17

- 手順 23

## ウイルス

- リカバリポイントの確認 133

## エージェント

- 依存関係、表示 113、115

- 開始、停止、再起動 113

- 修復操作の設定 115

- セキュリティの設定 102、116

- エージェントセキュリティの設定 116

- エージェントの開始 113

- エージェントの再起動 113

- エージェントの停止 113

- エージェントの配備

- Windows Vista 107

- 使用 107

- エージェントのプッシュインストール 107

## エラー

- 通知の設定

- 警告: 送信する電子メールの設定 49

## エラーメッセージ

- 表示または非表示の設定 43

## オフサイトコピー

- 使用する外部ドライブへのニックネームの割り当て 45

- 説明 85

- リカバリポイントのコピー 85

## オプション

- デフォルトの設定 38

## オペレーティングシステム

- 複数のオペレーティングシステムを使用したコンピュータのバックアップ 61

## か

## 外部ドライブ

- ニックネームの割り当て 45

## 仮想ディスク

- 仮想変換ジョブ、今すぐ実行 156

- 仮想変換ジョブ、削除 157

- 仮想変換ジョブ、編集 156

- コンピュータの修復 186

- 変換ジョブ、進行状況の表示 156

- 変換ジョブ、プロパティの表示 156

- リカバリポイントの変換のスケジュール 151

- リカバリポイントのワンタイム変換 145

- 仮想ディスクへワンタイムでリカバリポイントを変換 145

## カテゴリ

- ファイルの種類管理 43

## 簡単セットアップ

- 最初のバックアップの定義 26

- 管理者、Backup Exec System Recovery の実行 118

- [関連するドライブ] オプション 66

## 起動 211

- 機能、Basic Edition では無効 20

## 緊急

- コンピュータの修復 181

- コンピュータの修復、説明 177

- クラスタ化された共有ボリューム 230

## 権限

- 他のユーザーにバックアップを許可 102

## 検索エンジン

- サポートの有効化 220

- リカバリポイントの検索での使用 219

## 更新

- LiveUpdate による自動更新 26

## コマンドファイル

- バックアップ中に実行 72

## コールドバックアップ

- 説明 80

- ワンタイムの実行 81

## コンピュータ

- CD からブートするための設定 179

- 仮想ディスクファイルからの修復 186

- 修復 29～30、181



修復、準備 180  
 修復、説明 177  
 リモート修復 198

## さ

サービス  
   エージェントの開始、停止、再起動 113  
   ローカルコンピュータで開く 113  
 サポートユーティリティ 204  
 資格情報、エージェントの変更 118  
 システムインデックスファイル、複数のドライブを修復するための使用 181  
 システムドライブ  
   修復 29～30  
 システムトレイアイコン  
   エラーメッセージの表示または非表示 43  
   状態メッセージの表示または非表示 43  
   デフォルト設定の調整 43  
   表示または非表示 43  
 システム要件 17  
 修復  
   カスタマイズ 168  
   コンピュータ(Cドライブ) 177  
   説明 163  
   ドライブのオプション 169  
   ファイルおよびフォルダ 163  
   ファイルとフォルダの復元 163  
   元のディスク署名 185、189  
 修復操作  
   エージェントが開始しないときの設定 115  
 詳細なスケジュールオプション 70  
 状態メッセージ  
   表示または非表示の設定 43  
 スクリプト  
   バックアップ中に実行 72  
 ストレージグループ  
   指定および保護 211  
 スロットル  
   バックアップ中に調整、ネットワーク 42  
 セカンダリドライブ  
   修復 168  
 セキュリティ  
   エージェント 102、116  
   権限を許可または禁止する 116  
   他のユーザーにバックアップ権限を付与 102  
   他のユーザーにバックアップ権限を付与する 116  
 接続された VHD 66

## た

単体リカバリポイント 67  
 ディスクメディア  
   サポート対象 19  
 データベース  
   VSS 対応のバックアップ 223  
 デバイス  
   サポートされるストレージ 19  
 デフォルトオプション  
   設定 38  
 デュアルブートコンピュータ  
   バックアップ 61  
 デュアルブートコンピュータのバックアップ 61  
 電子メール  
   復元 214～215  
 電子メール通知  
   警告とエラーの送信設定 49  
 ドキュメント  
   復元 216  
 ドメインコントローラ  
   Symantec Backup Exec System Recovery を使用した保護 227  
 ドライブの検証 29～30  
 ドライブ  
   Symantec Recovery Disk 内からのプロパティの表示 203  
   システムインデックスファイルを使った複数のドライブの修復 181  
   修復 163  
   バックアップの指定 210  
   バックアップ保護レベル 122  
   保護 122  
   保護レベルの向上 130  
   リカバリポイント内での表示 137  
 ドライブベースのバックアップ  
   詳細オプションの設定 74  
   説明 63  
   定義 64  
   含まれないファイル 71  
 ドライブ文字  
   リカバリポイントへの割り当て 133  
 トランザクションログ、切り捨て 75  
 トランザクションログの切り捨て 75

## な

ネットワーク  
   バックアップ中にスロットルを調整 42  
 ネットワークサービス  
   Symantec Recovery Disk での起動 198

Symantec Recovery Disk での使用 198

静的 IP アドレスの割り当て 201

接続の設定 201

ネットワーク資格情報、説明 71

ネットワークドライブ、マッピング方法 200

## は

バックアップ

Symantec Recovery Disk からのワнтаイム、概要 80

Symantec Recovery Disk からのワнтаイムの実行 81

Windows からのワнтаイム 79

イベント起動 100

オプションを指定して実行 96

コマンドファイルの実行 72

最初の定義 26

詳細オプションの編集 76

進行状況の表示 78

設定を編集 99

他のユーザーにバックアップ定義を許可 102

データベース、VSS 対応 223

デュアルブートコンピュータ 61

ドライブ ベース時に不良セクタを無視 74

ドライブ ベースの詳細オプションの設定 70

ドライブ ベースの定義 64

ドライブ ベースの定義について 63

バックアップ後の作業 55

バックアップ先の選択 58

バックアップ前の作業 53

ファイルおよびフォルダ 140

ファイルおよびフォルダの詳細オプションの設定 93

ファイルとフォルダの定義 91

ベストプラクティス 53

保存場所 40

無効化 101

ローカルコンピュータから他のコンピュータ 105

バックアップ先

移動 160

バックアップ先のオプション 68

バックアップジョブ

詳細オプションの編集 76

バックアップデータ

パスワード保護 75

ファイルとフォルダの修復のための使用 163

リムーバルメディアへの保存 61

バックアップ中のパフォーマンス、ネットワーク用に調整 42

バックアップの進行状況、表示 78

バックアップの無効化 101

ハードディスク

修復 163

プライマリの修復 181

評価版

インストールまたはアップグレード 22

評価版の有効期限終了 22

ファイル

消失または破損したファイルおよびフォルダの修復 163

ファイルおよびフォルダのバックアップからの手動による削除 158

リカバリポイント内から開く 135

ファイルおよびフォルダ

Symantec Recovery Disk を使用した修復 196

消失または破損したファイルおよびフォルダの修復 163

復元 216

リカバリポイントを使った復元 165

ファイルおよびフォルダのバックアップ

説明 140

定義 91

バックアップデータを使用した修復 163

ファイルの削除 158

ファイルおよびフォルダのバックアップデータ

推奨の保存場所 61

デフォルトの保存場所 40

バックアップ先 58

ファイルシステム

サポート対象 19

ファイルの種類

管理 43

削除 45

新規作成 44

編集 44

フィードバック、送信 38

フォルダ

消失または破損したファイルおよびフォルダの修復 163

復元

Exchange、電子メールフォルダ 214

Exchange、電子メールメッセージ 215

Exchange、メールボックス 214

SharePoint ドキュメント 216

ファイルおよびフォルダ 216

メール 213

物理から仮想へ

ジョブ、今すぐ実行 156

ジョブ、削除 157

ジョブ、進行状況の表示 156

ジョブ、プロパティの表示 156  
 ジョブ、編集 156  
   スケジュール 145、151  
 ブート構成データベース 66  
 ベストプラクティス 210  
 別のユーザーとして実行、ログオンの変更 118  
 変換ジョブ  
   今すぐ実行 156  
   仮想ディスクへのリカバリポイント 151  
   削除 157  
   進行状況の表示 156  
   プロパティの表示 156  
   編集 156  
 保護  
   ハードディスク 122  
 ホットバックアップ  
   ドライブベースの定義 64  
   ワнтаムの実行 79

## ま

マスターブート、復元 186、190  
 メッセージストア  
   指定 211  
   保護 211  
 メール  
   復元 214  
 元のディスク署名、修復 185、189

## や

ユーザー  
   Symantec Backup Exec System Recovery を実行  
   する権限 116  
 要件  
   システム 17

## ら

ライセンス製品 24  
 リカバリポイント  
   CD または DVD へのコピー 143  
   Symantec Recovery Disk からのドライブのプロパ  
   ティの表示 202  
   Windows エクスプローラからのマウント 135  
   アーカイブ 143  
   圧縮レベルの設定 78  
   暗号化 76  
   ウイルスチェック 133  
   オフサイトコピー 85  
   オプションの選択 69

仮想ディスク形式への変換のスケジュール 151  
 仮想ディスクへのワнтаム変換 145  
 仮想変換ジョブ、今すぐ実行 156  
 仮想変換ジョブ、削除 157  
 仮想変換ジョブ、進行状況の表示 156  
 仮想変換ジョブ、プロパティの表示 156  
 仮想変換ジョブ、編集 156  
 管理 141  
 検索エンジンを使用した検索 219  
 検索する 133  
 検証 69  
 作成後の検証 77  
 サポートされるメディアへのコピーによる保存 60  
 種類、定義 67  
 推奨の保存場所 61  
 整合性チェック 69、77  
 セット数の制限 69  
 単体 67  
 デフォルトの保存場所 40  
 特定の種類の作成 96  
 特定のリカバリポイントの内容の確認 213  
 ドライブのプロパティを表示 137  
 ドライブ文字の割り当て 133  
 パスワード保護 75  
 ハードディスク領域の解放 143  
 ファイルを開く 135  
 マウント 133~134  
   マウントしたリカバリポイントのプロパティを表示 137  
   リカバリポイントを使用したファイルの修復 165  
   リムーバブルメディア 61  
 リカバリポイントの圧縮レベル 78  
 リカバリポイントのオプション 68  
 リカバリポイントのオプション、Symantec Recovery  
   Disk 184  
 リカバリポイントの検証 77  
 リカバリポイントの作成  
   オプション 69  
 リカバリポイントの種類オプション 67  
 リカバリポイントファイル  
   検索 58  
 リムーバブルメディア  
   サポート対象 19  
   リカバリポイントの分割 60  
   リカバリポイントの保存 60  
 リモートバックアップ 105  
 ログ、トランザクションの切り捨て 75